

川柳塔

平成元年六月二十五日
平成元年七月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻七四六号

日川協加盟



No. 7 4 6

七月号

西尾 栞 叙勲記念川柳大会

日 時 平成元年 7 月 9 日(日) 午前11時開場

会 場 なにわ会館 4 階 金剛の間

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12 TEL 06 (772) 1441
但し、地下鉄谷町線・谷町九丁目下車5分 近鉄上本町下車スグ

司会 西 田 柳宏子

☐ 開会の辞 橋 高 薫 風

☐ 祝 辞……………日本川柳協会理事長 山 田 良 行 氏

☐ 題と選者(各題2句 ☆締切 12時 ☆欠席投句拝辞)

「初 恋」 小 出 智 子 選

「挨 拶」 波多野 五楽庵 選

「慌 て る」 黒 川 紫 香 選

「 絵 」 寺 尾 俊 平 選

「町 内」 広 瀬 反 省 選

「 旅 」 小松原 爽 介 選

「 顔 」 去来川 巨 城 選

「 杯 」 磯 野 いさむ 選

事前投句 「自 分」 西 尾 栞 選

☐ 閉会の辞 野 村 太茂津

事前投句はハガキに2句・締切 6月20日

(宛先) 〒545 大阪市阿倍野区三明町2-10-16

ウエムラ第2ビル 川 柳 塔 社

☐ 会 費 2,000円(昼食・記念品・作品掲載誌室)

☐ 祝 宴 8,000円(同会場にて午後5時～8時の予定)

主 催 川 柳 塔 社

川柳と世相

西尾 栞

先月号に、一円玉という題で、時事川柳のことを書いたら、二、三の反響の手紙をもらった。成程、我が師路郎は曾て「川柳と世相」という演題で、大阪市立中央図書館の「著者は語る」会で二時間余、講演したことがある。

それを要約してみると、現在、私たちが短詩と称している範囲の詩、短歌、俳句、川柳は何れも叙情詩であつて、世相を目標に作詩しているわけでないことは私が言うまでもなからう。然し、詩、短歌、俳句、川柳を通観した時、その作品の上に最も多く世相が流れているものとして、川柳を第一に推すことを私もまた

肯定するものであるが、それは川柳が批判詩であるからで、だからと言って、川柳は世相を詠むものだとの断定は当たらない。つい最近、Y新聞が「川柳世相展」なるものをS百貨店で催したが、これなども世間一般が、川柳は世相を詠むものだと早合点をさせるものであつて、ホントの川柳家にとつては有難迷惑である。

新聞はニュースの関係から、時事吟を募集したりするが、時事吟というものは殆ど、詩というものがない。単に世相を十七字型式にまとめているだけで、川柳としての価値はまことに稀薄である。

おそらく新聞社の人達でも、あれを価値あるものと思つていないが、低級な読者の欲心を買つたために応えているのだぐらいに考えて黙認しているのであらうと思ふ、と時事吟の非詩論をぶつて、江戸時代の句を二句、大正時代の句を一句、昭和時代九句を挙げて解説し、川柳に流れ

ている世相がどんなものであるかを知つてもらふことにしている。然し、これらも始めから世相を詠もうとして詠んだのではなく、詠んだ句に世相が流れているのであることを付け加えている。

そして最後に川柳の一面をのみ見て、川柳は世相を詠むものだという観念は一般の人々のアタマからは是非とも除去してもらいたいものである、と結んでいる。

師の言葉ながら、私は時事川柳の中に、鋭い批判と気の効いた諷刺とユーモアに感動を覚えることしばしばである。

近時、川柳人口は素暗しく上昇している。それはY新聞、M新聞の時事川柳のおかげで、素人川柳家の参加が増加したからであらう。師は曾て川柳の社会化運動を提唱されたが、時事川柳より始めるのが捷徑であつたのではと思つ次第である。

座右の句

軍鶏抱いて男の流転限りなし

(薫風)

私の句

空港に過去の悪夢が渦を巻く

米田恭昌

川柳塔 七月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

川柳と世相

西尾 栞 (1)

近頃

正本 水客 (2)

川柳塔 (同人吟)

西尾 栞選 (4)

自選集

東野 大八 (34)

■川柳太平記 (134)

川柳の群像 野口北羊

黒川 紫香選 (38)

■連載 誹風柳多留廿六篇研究 (四十二丁)

小池 しげお (33)

水煙抄

小島 蘭幸 (70)

秀句鑑賞

同人吟

橘高 薫風選 (57)

愛染帖

水煙抄

小出 智子選 (62)

へ女性コーナーへ 茴香の花

句評リレー 越村枯梢・西口いわゑ・越智一水・河内天笑

近頃

正本 水客

近頃、歩くのが不自由となつてから妻の肩を借りて毎日30分ほどの散歩をしているが、途中の一軒の家に美事な二本の桜の木がある。蕾の時から咲くのを楽しみにしていたが、先日、満開の花の下でしばらく足を止めていると、中から家の人が出てこられて、毎日さくらを見に来ていただいて喜んでいました。ちよつとお待ち下さいと大きな枝を切つて下さった。桜は枝を切つてはいけなと聞いていたので、本当に花を愛する心がうれしかった。3月に紫香君が出した句文集『むらさき』の私の序文の中でちよつとふれた伊豆の稲取温泉のY荘は、料理に定評のある宿だが、稲取は東伊豆随一の漁港と言われるだけに、魚料理には驚いた。次から次へと出てくるボリユームには降参した。もう一つ、信州の山田温泉にF荘がある。料理の質と量は文句のないものであるが、メーンは狸の肉が出るのでボンボン鍋と名付けたフォンデューであらう。栗主幹もお気に入り二度三度と訪れておられるはずである。

座右の句
女と妻のあいだで好きな彩を着る
私の句
玄関でにらみをきかす父の靴
(智子)
山田 妙子

川柳塔

西尾 葉選

平田市 久家 代仕男

此処に来て消費は美德など言えず
雑草の王者を氣どる鬼あざみ

蛞蝓の身軽うらやむ蝸牛

毒抜きをすれば君さへ河豚の味
友達にひょうきん族が居て困る
尺八に肺活量を試される

大阪市 西出 楓 楽

話のわかる人にされてる妥協癖
人うらみ軽い不眠の刑にあう

解りたくないこともある子の話
良妻になろうなろうと豆を煮る
シングル志向答え預けている老後
女文字きれいなだけが能でない

大阪市 江城 修 史

子供の日母の日やさしい風にあう
民族の衣にみどりの風美し

母の日も母手ばなさぬヘルメット

ちぎれ雲君は夢追う旅人か

腎不全残高零の命かも

労りの言葉よ雨の冷たさよ

竹原市 小島 蘭 幸

貸し自転車で太陽に逢うてくる

一匹狼の匂いが忘れられなくて

ばくの金魚は小さいままでいて欲しい

街の絵描きと笑いばなしをして帰る

テリトリー私の匂い妻の匂い

レストランの帰れたこ焼き買ってくる

松原市 佐藤 藤 子

免許証の写真がいつも気に入らぬ

優雅だと言われ退屈とも言えず

生き延びる手立てに擬態など覚え

拝殿にとくに注意とスリのこと

うつうつと不徳のいたす昼の月

藤棚の緑滴りくる序曲

倉敷市 小野 克 枝

老いて行く影をウインドーから貰う
ちちとは交互に座る臍月

桜井市 岩 本 雀踊子

エプロンの役を嬉しい顔で受け
晴れの日が好きな帽子でとびたがり

逆立ちの向うに希望が見え始め

さかずきへ浮いて沈まぬ花ごろも

ウイंकが続く達磨は疲れきる

熟年へ小太鼓ひとつ持たされる

八尾市 高 杉 鬼 遊

北に友あり枝垂れ桜の城に立つ

一票一揆おたまじやくしが群をなす

戦備拡張水鉄砲を買いあつめ

親方が留守でも変わりない日本

大臣もわたしも金によく転ぶ

保険屋のおばはんからのラブコール

島根県 堀 江 正 朗

空想のできる気力は僕のもの

闇無限信じる音に囲まれて

手さぐりの僕のころを花も読む

見えた日のままの緑か盃よ

ぶつかってドジな盲人だね僕は

雨しきり緑に染まる音だろう

米子市 林 瑞 枝

生き甲斐の大きく実る路地かばちや

背の君が光って見えるときもある

税務署へおたふく風邪を提げて行く

若菜摘む山へ繰り出すセドリツク

和歌山市 西 山 幸

演歌まだ続く拍手が欲しいのか

ころ豊かに生きる砂糖と塩を買う

弘前市 波多野 五楽庵

唐きびをブツンとくだく旅のうつ

北上の川に思いを流そうよ

九官鳥不倫の声で喋り出し

本当によいのでしょうかこのままで

癌告知すこし天気が良過ぎます

世渡りが下手で頼杖ついてます

兵庫県 遠 山 可 住

コーヒーで会いコーヒーでさようなら

さくら散る散ると散るまで落着けぬ

やりくりへ妻の不思議さ有難さ

お開きにしよう本音が出はじめる

牛乳瓶さくら一ひら付けて来る

色即是空弥陀は美人におわします

和歌山市 西 山 幸

演歌まだ続く拍手が欲しいのか

ころ豊かに生きる砂糖と塩を買う

弘前市 波多野 五楽庵

唐きびをブツンとくだく旅のうつ

北上の川に思いを流そうよ

九官鳥不倫の声で喋り出し

本当によいのでしょうかこのままで

軽く手を振って別れてきたけれど
のり茶漬やつとわたしを取り戻す
燃えるだけ燃えて無になろう有になろう
生きている証ビールもたこ焼も

美禰市

安平次 弘道

ペアルック妻の若さに引きずられ

飽食の科に怯えるめし茶碗

紛飾をした自分史が他人めき

物差しの違い哀しい嫁姑

ロボットに負けて言い訳うまくなり

針千本おんなにジョーク通じない

島根県

小砂 白汀

柿若葉北海道は雪が降り

葉ざくらに酸素吸入してもらい

その裏でナンバーツーのうす笑い

下におれ土曜閉庁さまだぞよ

多すぎて仮面うっかりとり違え

土竜さえ思春期地球を掘りかえし

倉吉市

奥谷 弘朗

シベリヤで命拾ってからの運

拾いものしたと娘のムコを褒め

追伸で本音を言ってきた便り

共白髪はのほとしたお茶の味

死ぬ覚悟した経験がものをいう

肩書が取れて気楽な茶をすすり

米子市

林 荒介

掌の中の螢も死んだ光らない

一枚の葉書に声を注入する

乾かない燐寸が父の部屋にある

薬湯を煎じ優しい鬼になる

友達に影を支えてくれていた

約束は脆いものなり賽の裏

松原市

谷垣 史好

退屈も善き哉雲と友だちに

支出ゼロそんな日もある暮らしなり

捨てようと誰も言わない亡母の杖

ひとり浮き浮きうどん玉買いに

好きだからつれない仕打ち耐えてます

一円は一円人気に酔うでない

大阪市

津守 柳伸

山あい泳いだ愛の鯉のぼり

放牧の広野で脳を入れ替える

魚拓ならべて船宿の活け造り

落ち込んだ出船に丸い月が出る

洗い髪女が匂うおぼろ月

お付き合いていどに唄いたい月謝

藤井寺市

吉岡 美房

追い風に皮算用をいう野党

ライオンの昼寝人間うるさすぎ

緋牡丹の刹那刹那を抱きしめる

満開の躑躅に朝を送られる

天地みな青葉の中の山つつじ

一日を青葉に染まる日を貰う

八尾市 宮西弥生

今日からは生きかた変える米を研ぐ
友達のくらしと差がつくこしひかり

この町のひとりとなって目高追う

輝いて五月の女傷見せぬ

若き日のアルバムこの辺から狂う

下関市 石川 侃流洞

別室へ行く相談が生臭い

縄電車最後に降りた親思い

路傍の石の隠忍神の目にとまり

満開の下では辞世考えぬ

ふるさと創生お祭りばかり目立ち過ぎ

羽曳野市 塩満 敏

男と女謎があるから面白い

一滴の水を集めて那智の滝

七人の敵も貰ったリクルート

ケセラセラ自分の影のない男

絶叫のロックに明日の日本見る

高槻市 辻 白溪子

ハンドルを離して渋滞煙草吸う

筆無精の手紙に無心詰めてある

金かかる趣味を子供が持ちはじめ

人妻の同級生に頼られる

仲直りさせても長くは続くまい

奈良市 天正 千梢

鬼の岩屋玄海の風まっしぐら

花吹雪今日は仮面をすてました

毒けまで抜いてほしいよ花吹雪

優待乗車券三途の川まで続きいし

春愁や茫茫の刻流れすぎ

堺市 中川 滋雀

遠回しに言わねばならぬアレルギー

聞き役に回ると決めたコーヒー代

ピン呆けのままで話題の中に居る

老眼鏡ああそうだった広辞苑

天を突く泰山木の花灯り

堺市 高橋 千万子

入社式ウサギもカメもいちれつに

電卓をはじいて屑屋も消費税

口は重宝お待ちしておりました

スピーチがつづき料理を目で食べる

栄養満点力仕事がなぜ出来ぬ

豊中市 田中正坊

七月の誕生色で藤が好き

深紅のドレスその人の名は知らず

赤白青 美しき旗バリー祭

シャンゼリゼに三越があり巴里祭

過去はもう光らぬ父の銀時計

尼崎市 春城 武庫坊

ワープロで打つと本音が傍はく

珈琲館さがして嘘を塗りかえる

胃カメラの結果を聞いて腹笑う

饌米をまいて雀を手なずける

悲劇から喜劇にかわる夏の空

万葉を語れば五月闇になる

縄文の男女がドアをノックする

卯の花の白い辺りは五月闇

もう少し優しくおしとあやめ咲く

つるばらの垣根りハビリまだ続く

生きていく痛みが溜る土踏まず

信用の笠が重たいおんな坂

従ってくる影が味方と限らない

世渡りが下手でおみくじばかり引く

莫迦になる事にも馴れた座りだこ

試行錯誤大輪を夢見て種を蒔く

句の主は美人の作者にしておこう

懐にあっても出さぬ一円貨

割勘のときややこしい消費税

平成にもちよつとは馴れた領収書

春や春 往復はがきが三つ四つ

火遊びの火傷とわかる厚化粧

苦手だと相手の顔にも書いてある

ひとり者みたいな妻のスケジュール

尼崎市

春城年代

岡山県

嘉数兆代賀

京都市

松川杜的

京都市

都倉求芽

旅の友死去

手を合わす遺影と旅の夢語る

奈良県 宮口笛生

早いとこ昭和忘れてしまいましょ

お寺さん有難くなる妻も老け

それ以上言わしなさんな罪になる

安い店見つけてあったのみ仲間

その時はその時夫婦きりの日々

潮時へ突っ突きあつて退散し

恋愛か見合ですかとうるさくて

年寄のなかでわたしはひよこです

一つ間違えば善が悪となり

不都合は忘れまして片付ける

筈とわかめが歌う母のうた

筈の旬は奥歯が知っていた

いざこざの少しも持って里帰り

右に焼酎左に遠野物語

ある朝の雨戸つつじへパツと明け

退院してから変な噂聞く

春うらら若者何故に死を急ぐ

定年へ庭の毛虫も寄りつかず

定年を待ってたように歯が痛み

明日手術する児を主治医抱いてくれ

伊丹市

樫谷寿馬

倉敷市

野田素身郎

笠岡市

松本忠三

富田林市 藤田泰子

書くことが溢れる五月の日記帳

山彦の返事やさしい声でくる

どっちともとれる返事を聞いている

はつきりと言うと疵つく人がいる

子供だと思つて無理を聞いてやる

松原市 玉置重人

アルバムは褪せたが情熱まだ褪せぬ

縦横斜そんな見方を大切に

落ちはった江りはったと第三者

税務署を出てコーヒーのうまい店

顔色を読みそこなつた消去法

宇部市 平田実男

また一杯酌いで貰つた聞き上手

鼻高くなつて器量の落ちたミス

切つた胃のところで恐縮してる酒

母と娘の絆が細い少女A

仮面つけ忘れて本音言っちゃまい

松江市 恒松町紅

植民地のような本屋のカタカナ語

八方美人で年金が減つてゆく

大正の父の形見に巻脚絆

平成の畑で軍手生きている

札幌の品位も落ちた藪の中

松江市 柳楽鶴丸

オバタリヤンがオバタリヤンに腹をたて

露天風呂で見たオバタリヤンパウー

目覚し時計お前も今日から停年だ

遊び人と言われてもエイズでありません

松江の街ぶらり茶どころ菓子どころ

松江市 舟木与根一

立て板に水の話は聞き流す

酎ハイも水臭くなり消費税

嫁さんもやつと居着いて梅を干し

絵にはなる女でお嫁にはなれぬ

腹話術覚え世渡り上手くなる

米子市 小西雄々

雑魚なりの努力を評価してほしい

バラ色の老後へ杖は濡らされぬ

檀山で期待外れを語り合う

ライバルへ暗証番号漏れていた

期待した子が一本の反旗持つ

米子市 石垣花子

船頭が多くて花が咲き損ね

冬の風知らぬいちごの縹緞よし

約束の時までぐっすり寝る球根

三文判押したその夜のこわい夢

すき焼と玉子の仲を笑うまい

米子市 田中亜弥

大丈夫か元気かと文こまめです

終電で味方がどつと降りてくる

風おどす一人の旅はなおのこと

踏絵するわたしの意志が弱いため
蛇年の夫だ巻かれることにする

米子市 青戸田鶴

野仏のかざらぬ顔がありがたい
噂消えるまでは甲羅の中にいる
樺並木の燃える風情は街のもの
弱虫へ新樹しきりに語りかけ
連休が終り二人の膳になり

米子市 野坂なみ

そして今^{コウ}旧高女の石碑残すのみ(卒業五十周年)
紫陽花は踊り疲れて眠くなる
夕陽には今日のお礼を言いましょ
脱皮した蛇の涼しい瞳に惹かれ
ときどきは私を捨てに旅に出る

米子市 菅井とも子

海の幸集めて温し子の帰省
ブーメラン遠くの山も見て帰り
無理強いをされてもかごめの輪は抜けぬ
頼らぬば何も出来ない眼鏡拭く
朝刊を配る子供の顔知らず

米子市 政岡日枝子

吊り橋の上で根性見せてみな
貝がらは居場所を月にだけ言つた
貧乏神もあきれる程の薄い耳
あきれる程のカード俵せ買えないよ

おぼろ月癌ではないと言ひ聞かす

米子市 澤田千春

天をつく新芽に弱気笑われる
魂の叫びを抱いている夕陽
いい友と京の風情を持ち帰る
噂の川に寄ってくるのは女たち
あれ以来約束こばむ薬指

和歌山市 堀端三男

馬鹿正直に階段一歩ずつ登る
土下座したあの日の悔いをバネにする
あこがれた都会でかかる五月病
強く手を握り返したのが答え
喜色満面試着室から女出る

和歌山市 福本英子

何時眺めても変り映えせぬ頭脳線
連休の破調茶粥で埋め合わす
同罪になる返事なら書きましよう
存在価値を認めて欲しい胃が騒ぐ
開発の落ちこぼれです芽ぶく樹々

和歌山市 牛尾緑良

無職二ヶ月人の情けをしみじみと
入学に充てると退職金消えた
不器用に生きると父に似てしまふ
浄土かなこのまま眼開けざれば
新しい職が出来たよ燕たち

和歌山市 松原寿子

軽い約束夏の星座のなかに棲む

あなた撃つ銃はわたしの指で足る

消せぬまま深くかわる絆かな

ひとりの人をすでに愛して生き延びる

折鶴の涙わたしの掌に重い

和歌山市 山川克子

活魚に誘いおんなを料理する

迫力が好きでバナナの叩き売り

心配はいらんあんたの子やないか

娘の涙母の涙を知ってから

無責任ではない輪ゴムにも限界

和歌山市 桜井千秀

恐縮の度に眼鏡がずり落ちる

辛子の余韻クシヤミ出るのか出ないのか

抹香くさい意見も聞いて雨宿り

鎧着て愛を告白されたとして

世渡りの作りポーズは美しく

和歌山市 福井桂香

菜種梅雨アダムとイブがもつれ出す

バツカスに魅入られてます昨日今日

言いたいこと書いて下さいあと余白

頭脳線まん中辺で小休止

貧しさが二人三脚ばかり強い

唐津市 田口虹汀

虫干しでやつと世に出た形身分け

もう一度騙されてみる親心

気兼ねして吹かす紫煙は不発弾

見映えせぬ貌で見飽かぬ妻の顔

鬱病か心の窓が半開き

唐津市 久保正敏

葬儀一式宛名の書いてないチラシ

ハイと言わぬ女が多いのも事実

不渡りを訪えば相手も握ってる

鍵の癖知って世間が怖い仲

商魂は下戸のグラスに注ぐボトル

唐津市 仁部四郎

黒枠へ制服姿が選ばれる

制服を脱ぐと鏡が広くなる

制服がママにも欲しい幼稚園

制服の乱れ社運にカゲがあり

制服で撮った写真が来る五月

唐津市 浜本義美

万緑のふるさと削りまた削り

「古唐津」にこころの静をみつけた

鯛ヒラメ鮮度競うて空を翔ぶ

借りていた生命を返す日も近し

貧乏もこころ豊かに目刺し焼く

島根県 西村早苗

独りですばたんくらいは僕がつけ

気の乱れはぐすに行くは花屋だけ

失恋も笑うて話すもうお齡

新春の決意がいまだ果せない

和やかな座にくどいのが一人居る

島根県

榊原秀子

ときめきでポストをあけるのが日課

なし終えてバサリつきもの落ちたよう

私を追いかす人の背の幅

忘れたいことへ懸命拭き掃除

新緑に酔うて美味しいお茶となり

岸和田市

福浦勝晴

生きのびて鏡にうつすエゴの貌

思想なきおんなバーゲン買い漁る

そと孫の電話で知った声変わり

カンナ燃ゆ恋もリンゴも真っ赤っか

忘却の彼方へあいつを押しやろう

岸和田市

植山武助

学生の頃仲良しだった右派と左派

四面楚歌私に小さい趣味がある

それなりの私に満ちた日が続く

他人の事はよく見えますね解説者

一人とはこんなに淋しい妻の留守

大和高田市

岸本豊平次

例えばの話が眼だけこちら向き

お隣の帰宅の車夢うつつ

家族みな赤い眼をした朝が明け

嘘のない汗に菜園芽が揃い

順番がしんがりになり春の風邪

姫路市

人見翠記

高軒深い眠りを安堵する

読書とや眠りを誘う魔女なりや

生涯を自由に泳がす愛深し

好奇心私の夢を膨らます

巢に戻る今年の燕親子連れ

高石市

浅野房子

新薬を試されている中だるみ

疑いを抱いて会話が弾まない

淋しくてすぐ群れたがる女たち

ストレスをフアイトに替えて朝の靴

恥かきっ子一番頼りになつてます

大阪市

大塚節子

能面の内に女の泪みる

多喜二の忌プロレタリアの淡い夢

九連休財布もお休みが欲しい

抽斗の隅に初恋ひそんでる

似てるような似てないような絵看板

箕面市

坪田紅葉

春愁や一人でお茶と桜もち

思い方かえて明るい春化粧

病院で行をしている待ち時間

あやめ咲く頃今年もクラス会

ひきたてる役目で生きるかすみ草

大阪市

西 森 花 村

その齢で食堂も飯屋も顔が効き

ひたすらに地球自分のコース行く

二号さん男はケチときめつける

エエ買物でつせと墓地をすすめられ

葬儀社に顔が売れてる旧家です

大阪市

黒 田 真 砂

左遷地の月を肴にひとり酒

忍の字を胸に明治の母のしわ

何時の日かひとりになった日を思い

空しさの底にためてる意地一つ

孫抱いて重さがうれし春の旅

大阪市

古 川 美 津 枝

四日目の快晴が消すうらみ言

七十も装う五月の披露宴

招かれたホテル迷い子になる愉快

現代に羽ばたけ孫の背なをボン

ひつつき草思い出させる消費税

鳥取県

土 橋 螢

愛された日から味方になったげる

夢遙か昨日へ戻る道はない

消えてゆく時間すみれはむらさきに

六十になって本音を吐いている

うれし涙は拭わない朧月

言い訳に心の飢が残ってる

鳥取県

松 下 た つ み

警官の若さが買った売り言葉

おせっかいな風が傷口触れたがり

指切りをしてから弱い指となる

豆の蔓何の思想もなく伸びる

倉敷市

稲 田 豊 作

金のない僕風のない風みたい

時計ばかり見る恋人で詰まらない

失敗も経験リッチな僕になる

心機一転なせば太陽微笑んだ

我慢するお手本母を見て育つ

西宮市

林 は つ 絵

花は一瞬 一生は緑色

オアシスの仲間があつて兎に還る

ふるさとの山波みどり父母は亡し

山は緑 亡母の裾が過ぎてゆく

落丁の詫びるしかない自分史よ

寝屋川市

稲 葉 冬 葉

心臓を外した釘で生きている

ひとりになることが楽隠居とは哀し

東奔西走妻の知らないことにする

献血車縁なきものよ血糖値

辻褄を合わす責任軽くない

今治市 矢野佳雲

おいとしか呼べぬ夫と春火燵
氣に入らぬこと言うたかと妻に問ひ
押し問答結局貰うのし袋
前向きの姿勢でカニは横に這い
出る幕でないと自分を心得る

竹原市 森井菁居

父逝く（八十歳）

因襲の重みに耐えて喪主なりき
満中陰までは空けとく父の椅子
多弁だった父の位牌が軽すぎる
ロマンチスト春に生まれて春に往く
喪主としていとしおらしくしおらしく

西宮市 奥田みつ子

悪霊もひそむ気配の夕桜
窓あけて私を変えろ風を待つ
澄んだ瞳について約束をしまふ
鯉のぼり地球のみどり危ないぞ
卓球に腕まくりする宿浴衣

姫路市 大原葉香

エンジン始動途端に蝶が舞い上がり
茶柱が立ったと話題かえる朝
合掌をすれば落ちつく血の流れ
華やかな夢など持たぬ針葉樹
バス通り路地の人情置きざりに

寝屋川市 柴田英壬子

成人病ひとつ抱えて梅雨さなか
砂糖抜きキリマンジャロを点てさせる
菓子パンをやめて心を鎮めよう
ポケットの鍵をなだめている孤独
前置きの長さ借る身の気の重さ

神戸市 仲 どんたく

爛漫の園でゴリラのものの思い
昇天の時は悪役面を捨て
病床と世の接点にテレビ置く
清濁を合せて飲めば胃の謀反
歩留りを考えている渡り鳥

倉吉市 野中御前

砂時計の早さで愛がさめていく
悪女だが恋の手ほどきしてくれる
この人も酸欠らしい投書欄
親展と書くから妻が読みたがる
こころ許した友に梯子をはずされる

宝塚市 丸山よし津

ワープロの手紙情けは伝わらぬ
長寿国働き盛りの計が続く
ペアルック幸せごっこ何時までか
祝日に国旗忘れぬ祖父達者
追い抜いて男か女確かめる

高槻市 河瀬芳子

生きざまの見事な葦を知っている
出おくれた分だけ裏がよう見える
人生に賞罰無しは淋しすぎ

身の内に青い鱗を光らせる

哀しさよカチンと梅の種を噛む

出雲市

板垣夢酔

離婚して娘になれたわけでなし

窓際で爪と鼻毛がよく伸びる

むっくりと犬は家人の香に目覚め

馬耳東風なれず喧嘩をして帰る

使い捨て嫁ほど上手に出来ぬ姑

神戸市

山口美穂

みどりのトンネル五月の陽が洩れる

だんだんと小さくなってく老母のかさ

句のこと野菜に言い分たんとある

恋猫の声三月の偏頭痛

白黄色紅バラどうして棘をもつ

羽曳野市

榎本吐来

許さない女の方が炎えている

枉げられぬ根性などはない背広

通帳と余生を計る日向ぼっこ

羽をたたんで小説ばかり読んでます

少年が見ぬふりをする父母の不和

河内長野市

井上喜醉

他人には言えぬ静かな物思い

本人が言うまで黙ってほっとこう

急行へ時間合せるコップ酒

美容院上手に客の噂聞く

花園に夢あり恋のテント虫

岡山県

小林妻子

敗け戦もう程々に忘れよう

余ってる脳があるから愚痴こぼす

過去捨てて無傷な明日の絵を捜す

万灯会真新しきは耕花の灯

熟年を気づかうベルが鳴っている

奈良県

長谷川春蘭

花人の影も薄れて昼の茶所

羊かんを厚目に切って新茶汲み

青葉風張り子の虎へ突当り

堂塔の影は届かず菖蒲池

肌のもの替えて素通る芽木の風

玉野市

小谷仙山

一つずつ暗示が解けて牡丹散る

情けなら人には負けぬ石仏

今の内なら何んとか成ると釘を打ち

民話聞く渋茶が美味い楠若葉

西条市

片上明水

待つことにくたびれ石を蹴りはじめ

それとなく記事悪人の知恵を賞め

酒のシミ服に残して桜散る

東京行切符困ったことが起き

大田市 藤田 軒太楼

家長の座崩さず耐える肩のこり

名目は反省会で酔いつぶれ

酔う程に古老が語る艶話

本番となれば頑老頼られる

島根県 堀江 芳子

悪知恵が少しは欲しい夫の背な

苦勞などくじけてならぬ道しるべ

まな板と休む日のない幸も知り

影法師慰め上手に従いてくる

和泉市 西岡 洛醉

愚痴ひとつ老眼鏡を掛け直す

六十一歳ある日軌道をそれたがり

快食快便快晴正義の顔の朝

ブランドの鞆六十歳にある若さ

守口市 羽原 静歩

幼稚園 (二句)

どの顔も菩薩に見える朝礼台

幼稚園砂場の夕陽が美しい

オバタリアンとソックリさんの立ち話

自転車で老いの坂道縫うている

東大阪市 森下 愛論

屈辱の席虚勢のカラいばり

ひまわりのすねているのか横に咲き

夢多情積木にも似る恋をする

蟻の列崩して無職空虚なる

鳥取市 両川 洋々

ポケットで賄賂こっそり目を覚ます

デスマスク亡父は癌だと知らなんだ

支持率も総理デマだと信じたい

影武者の秘書を大臣飼ひ慣らす

和歌山市 若宮 武雄

曼陀羅の華麗信じる善人にて

捨てるものばかり八十路の身のまわり

幕あけは華やかだから悲劇かも

達人の隙につけこんではならぬ

大阪市 河井 庸佑

いつの日か努力が実る日を信じ

小細工が自分の首を締めつける

定退へ暮しのリズム模索する

がむしやらに前進ばかりした誤算

寝屋川市 岸野 あやめ

月遅れの誕生仏に会う御縁

母の日に娘の家計思いやる

好きだから意地悪したい思春期だ

つい本音洩れた背中を風が押す

八尾市 宮崎 シマ子

逢いにゆくせりふも出来て五月晴

白い帽子で山歩きたい五月晴

今日からは姓の変った娘を祝し
仲人も新婦と同じライト浴び

富田林市 田形美緒
うちの子に限って信じる他はなし

断りを優しい文で書いてくる
返事だけよくて当てには出来ぬ人
曖昧な返事時には長所とも

羽曳野市 佐野白水
電話で済む用難聴へはがき来る

喫煙室男女平等五人ずつ

寒戾り水煮きにする老い二人
連休に近所の留守頼まれる老い

西宮市 西口いわゑ

すこし悪くてすこしおどけている仲間

ふとめざめ鼓動ばかりが耳を打つ

白旗を上げられ負けたなと思う

モナリザの顔を見てると気が抜ける

高知市 赤川菊野

海峡をいくら越えたか冬の花

年輪が光る師匠の舞扇

自分には過ぎた生活と思わねば

ロマンには遠い男の渴いた眼

寝屋川市 江口度

うきの影びくり眠気がさつと消え
整列乗車びたりと電車止まらない

弱肉強食雑魚幾万の卵抱く
天下取る夢から醒める請求書

仙台市 川村映輝
四面楚歌日本漁船何処へゆく

一言が多く喧嘩の種になり
わが事となれば新聞うそ半分
座席取る時の老人はやいこと

柳井市 弘津柳慶
マンネリもホドホドこころで変化球

昭和史へ私の半生書き添える

弁解へ冷えきっている他人の目

孫連れて財布そろそろ軽くなり

岡山市 川端柳子

滝しぶきこの世の難を歌いあげ

兄ちゃんの女友達皆嫌い

五月晴れ食べたい見たいまだ死ぬ

攻めてくる活字カタカナ語に弱い

名古屋 越村枯梢

おみくじも嘘を言います待ち呆け

ばらよりも野の花が好き私は一人

俺だつて負けてたまるか老春譜

雪月花酒に振り回されている

今治市 越智一水

目の敵にされても草は花をつけ
紫の恋に燃えたい春の宵

頼りない父と言われて頼られる
年輪の顔が焚火の輪をつくり

倉吉市

渡辺 独歩

野に棲んで街がきらいな鬼ヤンマ
ぬれ落葉女の門に降りかかる
吊橋の途中で快傑ゾロを待つ
聞かれたら明治生れに御座候

奈良県

田中 紀美代

ためらいを捨てて女の花鍔
胸の中開けて見せたい夜が明ける
都合よく忘れてあげる妻になり
ポケットにいつでも詠り入れている

七尾市

松高 秀峰

許す氣の見て見ぬ振りの姑の汗
ボケ防止貧乏焦りに助けられ
母さんが嫁の肩持つ丸い灯
諺が成程解る年になる

和歌山市

内芝 登志代

正直にトマト真っ赤に熟れてくる
長生きを願って老後を案じてる
お医者とのつながりつけておく安堵
心にもないこと言って当てにされ

和歌山市

垂井 千寿子

日本の寿司に嬉しい四季があり
その奥も鋭くわかり聞かぬふり

時の流れ忘れる事も幸か
人情にふれて左遷もまた楽し

和歌山市

神平 狂虎

降り続く雨が心のうち外に
雨の日が似合う淋しい肩を抱く
涙の味を識ってしまった白い指
青葉から離れた露は星になる

和歌山市

後藤 正子

鳥も魚も北を目指しているのだな
いつそ海まで走り続けて行く五感
表情を捉えて離さない鏡
啜わずに聴いているのは九官鳥

和歌山市

青枝 鉄治

美しく咲いたケシにはない殺意
優しさに氣を許さない赤ズキン
横書きの履歴書をかき二度の職
腹ぺこで杭に巻きつく鯉のぼり

和歌山市

寺田 裕美

プライドで生きてる骨と皮ばかり
百姓へ鉄砲玉が向けられる
母の手で焼くと目刺も母の味
いつまでも棚から自分を下ろさない

高槻市

川島 颯云児

倦怠の兆おんなが貝になる
カルチャーへ退屈の虫捨てにゆく

善人じゃないが鬼でもないつもり
喝采は無いが続ける猿芝居

高槻市 竹内 花代子

相乗りを頼んで同じ寺詣り
手作りの兜老母と老娘の生活にも
お喋りの雀が起こした亡夫の夢
時々は老母に血圧上げさされ

静岡市 渥美 弧秀

点滴の友は知るまいガン告知
ひじ掛けの赤が眼を射るセザンヌ展
マンネリへ詩と音楽にあるフアイト
キープしたボトルが誘う短詩論

静岡県 蘭田 猓杳

渋滞がないと連休終らない
戦争も愛も国境越えてゆく
連れ添うて久しく妻の重量感
腐る程札のある人居りました

鳥取県 林 露杖

夕さりに老いの寂しき桐の花
嫁不足わが家のこととなりける
七十三歳遊び心は捨てませぬ
民謡をきかせる咽喉で子を叱り

鳥取県 新家 完司

誠実な人で自転車よく似合う
時計屋の倉庫でベルが鳴っている

花束にコロリと参る女たち
ひょうたんのくびれが少し色っぽい

鳥取県 土橋 はるお

マネキンが財布の中を覗いたな
むしろ旗のねばりがどうも足りません
日曜の野良着が似合うすみれ草
父つあんの酒癖牛が知っている

唐津市 山口 高明

海峡を渡ると風が肌にあう
旅の風少し冒険しませんが
浪人が居るから心底嗤えない
客人が取りなす孫の躰けよう

唐津市 筒井 朴竜

吹き曝す鳴り砂琴ヶ浜に立ち
打ち寄せる浜の真砂子の砂時計
恋の夢みる砂浜のさくら貝
元寇の堡塁を埋め黄砂降り

唐津市 浜本 ちよ

温かい笑顔の友に友多し
友の友もわたしの友だ大切に
趣味多彩おまけに料理こまめにし
心してきいた心算の口が過ぎ

大阪市 本間 満津子

我家の音いつものように良い目覚め
一枚もカードは持たず足るくらし

なんでも反対して日本どうする気
後釜へもし全能の神ならば

大阪市 神夏磯 典子

辛かった頃の日記は宝物

夫との会話は半分ゲームです

つつましく生きよと年金振込まれ

梅雨もよし出不精誘う花菖蒲

大阪市 北 勝美

沈む村左右に若葉七曲り

目に青葉膝を浮かべて露天風呂

竹葉庵そばを活かした卸し金

愚痴言いに帰って母の愚痴を聞き

大阪市 藤田 頂留子

沢ガニの受難万部の練り供養

北国へ蜂と連れ立つ花見好き

亡兄の声聞ける祭りよ降らないで

神輿当番市町だよと亡兄に告げ

大阪市 吐田 公一

定退という連休にある不安

大陸に消しても消えぬ過去がある

愛冷めて味噌汁までが冷めてくる

いいご主人ですねと他人の目は褒める

大阪市 井上 白峰

謙遜の椅子に無情の風が吹く

自惚れが自分の影を見失う

背を向けて妥協の声を待っている
綺麗ごと並べて爪を研いでいる

大阪市 中西 兼治郎

ドック入り人間船にたとえられ

渦を観る人間のうず見て帰り

患者より付添の方いたわられ

数字の強さめがねの度にみつ

出雲市 園山 多賀子

親切がおせっかいという後ろ指

頼られる薬くらいなら自負がある

八人目敵にも後ろ見せられぬ

人に酔い花に酔うてる通り抜け

出雲市 吉岡 きみえ

花やさんおんなの性の枯れぬうち

花言葉上げてあなた振り向かぬ

白と言う花のあまりにさみしくて

草やきの煙にうづく過去の傷

出雲市 小玉 満江

大安がとっても好きなのし袋

いい人ネ仮面はずせぬ破目となる

カップメン三分待てぬ食べざかり

おばあちゃんは金のいる時だけ呼ばれ

出雲市 久谷 まこと

夏帽子誰か待ってる無位無冠

親馬鹿を渡してくれぬ虹の橋

も一つの噂話を聞きただす
古い二人明日の天気は傘マーク

八尾市

山下 美津留

奥伊賀の忍者出そうな春ガスマ
天守から星見る子らにある未来
悲しみを深く包んで立つ羅漢
もやもやの苦勞地酒という味方

八尾市

鷺見 章

ペダル踏む妻のバラソル乗り慣れて
一札をして解剖のメスを執る
ブランコよ妻を少女の日に還す
終業ベル鳶のこはぜは地に帰る

富田林市

松本 今日子

子の返事上的方から落ちて来る
みなで剥く明日はきつと豆御飯
感情はよまれたくなしサングラス
サングラス取ると普通のお兄さん

富田林市

片岡 智恵子

魂胆があつて返事を遅らせる
子の世話になるともならぬとも思い
鉄線のからだままの愛もある
ハイハイとよい返事して忘れられ

羽曳野市

田中 隆二

再職はノーネクタイで行けるとこ
転職で流れに乗った父の船

新緑に染って地酒酌みかわし
転んでも只では起きぬにぎりめし

羽曳野市

吉川 寿美

贖罪の痛みわけする影法師
胃が痛む身元不明の噂きく
アルバムに残す人生時刻表
政治屋に衿を正すという逃げ場

島根県

錦織 文子

夫婦とはともどもに古い梅の宿
鏡に向つてゐる時私も女です
あたり前のお世辞あたり前によろ言えず
達筆のお返し今日もよう書けず

島根県

石田 清泉

金好きなきがしきりにそそのかす
六十の手習い言い訳も心得る
渋滞の車に連休奪われる
二階まで行つた用事が出て来ない

島根県

松本文子

つる延ばすアサガオ生涯主義持たぬ
底辺に住んで人間ありがたい
ひとつ覚えてまた二つほど忘れ
こんがりと妬みを貰う卵焼き

島根県

松本 はるみ

以下同文すこし言いたいことがあり
子の継がぬ店るいと積み上げて

空想はすてて洗濯干し上げる
カップルがこんな可愛いのも雀

竹原市 信本博子

一途さが神経病の名を貰い

怪談の出だしは雨の夜でした

人前ですんなり握手をしてしまつ

フランス製口紅が描く燃える夢

竹原市 石原淑子

五分進めて柱時計の思いやり

ゴチャゴチャの頭でもかく聴いてます

いやな人声をかけます私から

それなりの夫婦手持ちの種を蒔く

岸和田市 古野ひで

小さい胸痛めて見てる離婚劇

寝たきりへ話相手になりにゆく

明日からのひとりへ決意の花鉄

相談もなくて夫は先に逝き

岸和田市 清野こう

善意で貸したお金今だに戻らない

小さくとも遠慮気兼ねのない我が家

小さい幸掴んで生きている老後

逃げられずお受けしました町の役

岡山県 岩道博友

趣味一つ消して昔の肩を張る

うぬばれて昨日のリストを来て話す

足の裏タコが出来てる迷い道
強気では居られず病院の漫画読む

岡山県 千原理恵

慢心が危ない橋を渡らせる

いかめしい父だが切っ先は向けぬ

あすなろの本音絵の私語つづく

渡らばやあの吊橋に謎がある

松山市 谷信夫

蚕豆に新茶頂く今日の幸

銭湯で刺青に背ながされる

青竹踏み今日のいのちを大切に

ホームラン打たれた方と打った方

福岡県 横地正好
雅風改め

文なしは慌てぬ明日は明日の風

能もなく大樹にもたれ定年日

税逃れ湯街に会社保養所置く

みな巣立ちほおずる一人孫一人

西宮市 瀬尾六郎太

お茶処太閤気分わびた庭

何ごとともぬれ手に粟の落し穴

身構えること多過ぎて疲れるね

招く人招かれる人金からみ

姫路市 丁坪サワ子

密室にしてはならない子供部屋

働き蜂父権落して黄昏れる

リポーター遺族へ土足で入りたがり
不倫ごと写して視聴率落さない

有田市 松井かなめ

妻よりも酒を愛して長病い

病院に通い疲れた回数券

人の事おだてて自分が大のけち

以心伝心嫌いな犬が吠えて来る

町田市 竹内紫鏑

わが耳は老いしか点る音量値

シートベルトなければ孫が行き来する

長寿望まず出欠はまめに書く

良き友ら載りし型録捨てられず

倉吉市 渡辺苦句

太陽のうれし涙の草苺

ベル押すと星の世界でピンポンパン

君どこへこの蟻はキリストかも知れぬ

うかんむりの家並みをみながら散歩

堺市 柿花紀美女

連休明け街も一息ついている

謝恩会親の苦労をはなやかに

五月晴れ体調の方が崩れ出し

春眠の夫婦は別な事思ふ

加賀市 細呂木魯木

取り替えたレールに再起誓って

平凡な記事で埋めたい日々思ふ

やせ我慢男の見栄がある若さ
男の沽券八百屋を通り過ぎ

熊本市 永田俊子

残照寂光吉野全山花浄土

吉野千本花に埋めたい百の罪

女の流転知るや知らずや花吹雪

続編へ希望をつなぐ春の雲

尼崎市 奥山美智子

新緑に染まって過去と会いにゆく

素人のくせにと言われるほどの腕

若者の明日をにらんでいる話

定位置に座ってからの物忘れ

境港市 細木歳栄

残り火が疼く夫の忌近づくよ

紫陽花よ夫亡き今年はどんな彩

たった今言ったでしよと言われても

言いわけを憎しともまた愛しとも

倉敷市 田辺灸六

幸せと思う子がいて孫が居て

絆かな母に似てくる娘の仕草

三人の子育て娘やりおるわい

孫の字が腺病質な筆の跡

静岡市 永倉僕川

地球上裸で暮らす国が飢え

友の会妻を誘惑して困る

いさぎよく上座を譲り祖父達者
裸体画の胸のふくらみ触れてみる

松原市 小池 しげお

難色がないのもろた嫁のこと

お寺はんに説教してる河内弁

スタートの後ろは見ないかたつむり

カラットの指がやたらと様子する

大阪府 坂口 公子

早苗田の育ちへ月の遊ぶとこ

すきま風たまらん匂いくれる日も

しまい風呂女の見栄もしずませる

切り捨ててあとで悔んでいる鉢

弘前市 真喜内 實

脳天にポマードぬって旅に出る

春宵の脚を洗って野球見る

ありがとうはつきり言う子にもうひとつ

花りんご見舞う顔みな顎あがり

十和田市 斉藤 劔

津軽津軽りんごの花に皆染まる

几帳面な先生でした落椿

春五月逆さ岩木に田を植える

救急車どこまで行くか花吹雪

黒石市 相馬 一花

風鈴に保証期間は書いてない

オブラートで包み切れないアノ噂

小言なら誰にも負けぬ妻が居る
老眼鏡失くして買ってまた失くし

豊中市 吉田 あずき

休日の大きな足を邪魔にされ

故里はいまだに米の土産くれ

観光バス着いて神苑俗となる

野心捨てた日から大役回って来

富山市 舟渡 杏花

三界の女に黙って従っていく

正体を追い詰めていくペンの先

砂文字を裏切り続ける波の章

カラスの呪文へ負けてしまった阿呆鳥

岡山市 井上 柳五郎

年金で結構とほめ株いかが

医者嫌い自分で病名つけている

扁額の達筆文珠の知恵読めず

岡山市 荻野 鮫虎狼

聴診器背中が痒いとは知らず

旅かばん消費税まで詰めて乗り

お隣の猫が夕食時にきて座り

岡山市 二宗 吟平

目覚ましは起きるまで呼ぶ犬がおる

まき餌して小鳥気遣うことがふえ

悲観する顔は見せまい見られまい

岡山市 池田 半仙

朝寝坊自由の老後早目覚め
吠えたてゐる犬は親戚とは知らず
ハネムーンの土産は甘いチョコレート

岡山県 矢内 寿恵子

平成へ昭和のカルテ引きずられ
カタカナ氾濫五七五も立ちくらみ

枯野ぼうぼう木綿の似合う亡母が立つ

岡山県 山本 玉恵

本心のつき合い仮面はまだ捨てぬ
逢うた日は雨よくれた足袋をいとおしむ
途中下車させる絆の花の駅

鳥取県 森田 布堂

老いらくの恋も芽生える長寿国
海難を救助のへりが吊り上げる
親友の祝辞言葉の裏を知り

鳥取県 羽津川 公乃

暖冬の夏へ不吉なデマの数
カルシウム足りませんよと歯が疼く
新緑に逃げた若さと握手する

鳥取県 さえき やえ

鼻も低いが腰も低いともられる
風情ある言葉に感電してしまふ
傾いた家に鯉のぼりを上げる

鳥取県 津村 八重子

日曜も祭日もない母の四季

笑い袋が私の心そそのかす
たよりない男居眠りばかりして

岸和田市 原 さよ子

健康食また聞いてくる老夫婦
連休は結局残る老夫婦

紀三井寺参拝

石段が高くてご利益もらえそう

岸和田市 芳地 狸村

家計簿になじみが薄い消費税
真ん中で一息入れる登り坂
何事も相談出来る母が居る

米子市 金山 夕子

掃除ですこころの隅もはたきましよ
大声で叱られてばかりのわたしです
気ままになつて新茶が香る午後三時

米子市 白根 ふみ

匂がきた鰯を眺めその一人
涙より先に奥歯を噛んでいる
倅がくる方向へむいて寝る

米子市 川上 より子

去年の風も名前を聞いた利久梅
ふりむくと幕は上つておりました
気がつくと満ち潮となる刻でした

米子市 小村 てい子

呑めぬ君いつも上手に酔うている

肩たたく孫も気分で上手下手
回り道昔ばなしが面白い

寝屋川市 宮尾 あいき

分裂メーデー空も朝から雨模様

少しはしゃいで母の日の顔作る

物置きのがこれがアラジンのランブなら

寝屋川市 平松 かすみ

重純先生を偲びて

若い若いお声が生きているテープ

主婦だから家を大事に論される

先生を偲ぶ句会の指定席

寝屋川市 堀江 光子

名利より好きで選んだ花作り

よく喋る方が負けてるさし向い

欠点も似てる我が子の顔をみる

豊中市 上田 登志実

泣くもよい泣けば結論きつと出る

アンバランス誇張するのもしゃれかな

消しゴムは消した文句を知っている

豊中市 一瀬 福一

狂わない今日もリズムの靴をはく

死のかるさ昨日ノレンで吞んだ仲

雨音が今日のプランを変えさせる

豊中市 辻川 慶子

連休のプランは妻と子で決まる

五月雨に連休疲れほつとする
やさしさに甘えています花菖蒲

吹田市 茂見 よ志子

妻の趣味無関心でもなさそうな

頼まぬと知り手伝うと言う夫

顔色で欺しとおせぬ不整脈

吹田市 栗谷 春子

天井を食べたくなつたのも不思議

忘れるという特技があつて救われる

金木犀ついの棲処の手に届く

広島県 藤解 静風

永田町の方程式が解けませぬ

大過なく終つてみれば妻も老い

ライバルの動きまなこの端に入れ

広島県 田村 新造

連休を一日漁師の地引き網

体温計抱いて見ている砂時計

家計簿に缶詰とあり猫のエサ

大阪市 渡部 さと美

梅雨晴間噂も愚痴も千し直し

吊橋の悲鳴へおとこ男たり

近道は得だったかなきつい坂

大阪市 北山 悟郎

どん底の開き直りの底力

筋合いのないのが大きな口叩く

老いてなお女に美しい赤が有る

和歌山市

天満三千代

言いたい事あるらし曲つてゐる胡瓜

年齢ですよと言わんばかりに低い靴

孫の顔ただそれだけへ野良着脱ぐ

和歌山市

山田高夫

有意義な講話でしたと覚えてず

まだ六十もう六十と病みつづけ

塗り箸が剥けたまんまで愚夫愚妻

和歌山市

田中輝子

イメージダウン歩き疲れた観光地

葉桜が綺麗と不意に聞く言葉

後編を聞きたいらしい電話口

島根県

北川民子

歯ぎしりを聞かれぬ夜は淋しくて

猫柳銀の涙を誘う雨

さよならの霧笛聴いたは空耳か

島根県

小田川智重子

体験の嵩だけ言葉が重くなり

暖く冷めたくお金の持つ不思議

印鑑はあったが通帳見つからぬ

守口市

結城君子

ぞろぞろと掏摸もいるだろ通り抜け

放たれた犬幸せを駆けてみせ

力尽きた牡丹の乱れ責めるまい

宿場町店に飾った酒の甕

やっと気が静まってきた月の暈

店先のさよりは遠慮して並び

羽咋市

三宅ろ亭

改めて敬意を表す叙勲記事

一杯の飯今朝有難く頂戴す

改めて無欲と頑固世は求め

東大阪市

崎山美子

方言の会話身近に旅の宿

つる草の伸びにまかせた佗びずまい

宿下駄の音はずんでる若い旅

弘前市

小寺花峯

消しゴムで消えないほどの消費税

なぜならば私は短気と妻は言う

隙を見せ変化球を待つ女

茨木市

井上森生

家電王逝く世の御婦人を強くして

経営の神技家電で国豊か

キャニオンを創ったなどとは言わぬ川

富田林市

新開千代女

運命に逆らうつもりないけれど

先祖にも居たかも知れぬあわて者

独り居は灯ともし頃に人恋し

姫路市

中塚遊峰

飛んで来た種で隣の花が咲き
煩惱のからを脱ぎたいかたつむり
生かされてこそ再会の涙あり

竹原市

岩本笑子

さもうれしそうにキウイの花が咲く
マニキュアをしても満たされぬものよ
もの言わぬ一億円の幸不幸

藤井寺市

福元みのる

実年が来ても漫画本手放せぬ
親に似ていても良し整形がある
ただひとりだけになりたい旅に出る

高知市

北川竹萌

いたわりの言葉貰うた回り道
過疎の風ぼつぼつ抜けた軒瓦
土佐の海夫婦鯨が漫步する

川西市

松本ただし

釦掛け違えてからの愛と憎
深みにも嵌った覚えの脛の傷
日常語にお大事が出る歳の皺

奈良県

宮川古都路

長生きは露に歩いて深呼吸
ウインドーに髪をうつして恋を知る
庭付きの家が欲しいと妻の欲

出雲市

石倉芙佐子

血の滲む努力は言わぬ父の背

身内としてのけじめと思う翌る朝

出雲市

小白金房子

年金の温みを貰う旅靴

愛着心捨てぬ八十路の針仕事

出雲市

河原恵美子

さりげなくでも本当は青い鳥
私だけ名もない花と信じてた

大阪市

町田達子

平城の里歴史にむせる小半日
静と動無理はすまいと古稀の坂

大阪市

板東倫子

死後のことふと考えている夜半
魚の棚章魚の頭をわしづかみ

大阪市

塩田新一郎

我が家では雀が百舌鳥を生んだらし
肩書が増えて寿命が減ってゆき

大阪市

松尾柳右子

雨つづき赤シャツ マンガ読みあさり
童心にタイムスリップ レンゲ摘み

大阪市

松永すすむ

黄砂吹く眼はいたまぬか鯉のぼり
飯蛸の粒の齒当りまで五月

大阪市

富岡温子

まだ欲があつて検査の苦に耐える
定年の日から始めた山歩き

鳥取県 乾 喜与志
そろそろと歩け娘よ花嫁よ
年輪は顔の皺では計れない

鳥取県 谷 口 次 男
雨漏りの家でドームのゲーム見る
議員退め庶民の暮しや々と知り

鳥取県 田 村 きみ子
七十五日花の噂も風になる
針の穴通すメガネを買いに行く

島根県 藤 原 鈴 江
花菖蒲亡母の匂いとむらさきと
今日もまた無事に暮れたる掌よ

箕面市 椎 江 清 芳
逆立ちをしても西から陽は出ない
粒揃い中に混った身の不運

茨木市 堀 良 江
この指たかれついたかつてしまふ
本当のこと言いたくて言いたくて

海南市 三 宅 保 州
花道の先で奈落が待っている
何もかも一緒歯ブラシだけは別

姫路市 都 里 遊 光
幼な馴染みの月と別れる流れ星
ナツメロを聞いて泣くのも年かしら

東京都 吉 川 一 郎
簡単に貸さぬバンクの自動ドア

ひとり酒飯場の灯りを蛾が叩く

静岡市 安 本 晃 授
義理固い線で結んだ父の地図
合理化と言われ年寄り口が出ず

奈良市 米 田 恭 昌
お見合いの返事しに行く気の重さ
均等法鳥は夫婦で雛を抱く

岡山県 松 本 元 江
待つて下さいあなたは事を急きすぎる
二人三脚走り続ける泣き笑い

倉吉市 淡 路 ゆり子
やさしさの瞳に触れて水は澄み
ひとりぼっちで情熱のから回り

吹田市 園 田 文 子
箸やすめ碗に楓の京の茶屋
お多福豆鍋一杯に母の味

岡山市 花 田 たけ志
助け舟出せば大きく育つまい
流されぬ情が孤独にさせている

河内長野市 植 村 喜 代
境界線三坪損して丸くする
老人病棟知らない私にごきげんさん

岡山県 直 原 七面山
酔っても妻は妻
灯を消して気を静め

自選集

児島 与呂志

無人駅噂がぬれているベンチ
またボタンかけそのうている疎遠
手でつまむ肴が欲しいコップ酒
友がまたひとり逝く無口なり
凡人の雑草 初夏にそのまんま

八木 千代

花房がこころに咲いてくる 雨だ
観音の坂へ曳きずる葉がある
渡される心 ゆらゆら坂くだる
手招いた塔 円山の迷いみち
電車びたり 重なる駅の目くらまし

水粉 千翁

哀歓を刻む聲音など聞こう
わがいのちじっと見つめてお茶がしみ
友の身を案ず五月の風に触れ
一碗のお茶の心に花は舞う
水碧く風はみどりに出逢い波

金井 文秋

子にあとを継げとは言えぬ小商売
零細業者時の流れに消えて行く
九十で現役がいる負けられぬ
生きて行く知恵はミクロの世界にも
早いリズムでパチンコに負けて出る

正本 水客

鉢植えのつつじを仕舞う五月の陽
住所知らせと掛ってくるいい電話
舌出して少女は過去を自慢する
老人医療の利く温灸へ妻と連れ立つ
ちさい旅に出てみる気分取り戻し

野村 太茂津

流れには沿うが男の顔通す
老兵の気骨一本枉げられぬ
動き過ぎ親爺をすこし眠らせよ
内股膏藥の臭い芬々注進に
竹篋返しのさもしい言葉冷笑す

青春の匂い始めし娘と歩き

泣き声の聞えるところで泣き直し

母さんを苛める男に見える父

身に覚えあるからみんな黙りこみ

いい橋が架かり川には水がない

重純を見送る

梅雨しとど花の吐息を濡らしてる

はるかなる思い出哀し夫婦箸

波乱万丈末尾を飾る白い花

これからの月日は私の色に染め

波乱万丈越えて来ました骨拾う

現役作家荒谷シゲよ95歳近く

永遠の乙女ぼっくり句帳掌に

二三人は声をかければ寄ってくれ

群集の一人わたしもうくでなし

魚なら跳ねてる畠の匂いもの

ぶった切り息子が突いてきた魚

政治浄化みんな裸になり給え

七十も半ば酒仙の影も無し

用の無い人で新聞ばかり待ち

腕組みをして野次馬の中にいる

有働芳仙

藤村 女

山内静水

工藤甲吉

座禪草のお嫁さんには水芭蕉

誰にでも握手求める気の弱り

首縦に振り一徹もすでに歳

目玉焼母の手作りだから好き

生きてたら祖父が嘆こう休耕田

二次会に残るふたりの国訛り

人生の起伏「むらくも」と四十年

一日一善明日への暮し夢が湧く

夢は米寿へ善行を積んでおこ

野党政権時期尚早の御託宣

国民へ猛反省のいる自民党

連休も休めぬ職に誇り持つ

わかめ売りみどりの風を連れてくる

言いくいことは手紙で送りつけ

マンネリを抜ける小さな殻を割り

頂上に立つて四方の風にあう

音のない拍手嫉妬に長い刻

小心ののろさ脈搏だけはやい

叱る人はいいい人 多い人が多い

批判的だから聞いとくにこにこと

孫と遊ぶ時の笑顔で人に会う

月原宵明

藤井明朗

小林由多香

大矢十郎

懐古する楽しく長く晴れた道

歯医街道と平行線の作句路

クラス会酒吞童子のうまが合い

子守唄ちよっぴりもけてる若いパパ

奴風心ならずも舞わされる

小出智子

葉書で二枚書くのは妻のある人へ

そう言えば托鉢僧も来なくなり

雨が降っているのに病院こんでいる

一輪車ぐらいまだまだ乗れそうなく

終電車みんな帰る家があり

黒川紫香

孫の嫁に男性化粧品貰う

ともだちの肩借りながらゴールイン

同姓で手強い奴が敵にいる

孫の来る日にはメロンを買っておく

九十九折れ秘境の唄が聞こえ出す

阿萬萬的

飛鳥散策

古代の残照礎石の白さだけがあり

飛鳥路に石の言葉の忘れもの

磐余の里水が光って暮れかかる

発掘ブーム古代が人間臭くなる

山の辺に古代の神と逢える道

第4回国民文化祭さいたま 89文芸大会 川柳作品募集

作品 未発表作品（厳守）課題4題・各2句詠
課題と第1次選者（1題2人選）

「咲く」 越郷 黙朗・森中恵美子

「遺跡」 佐藤 正敏・吉岡 竜城

「立つ」 ちば東北子・野村 圭佑

「窓」 去来川巨城・山崎 凉史

応募料 千円（郵便小為替を作品に同封）

応募方法 二百字詰原稿用紙またはタテ書き便箋
に各題別に書く（無記名）。作品と別に

郵便番号・住所・氏名・年齢・性別・職

業・電話番号と大会・交流会への出欠を

明記。封筒右上に「川柳」と朱書、郵送

〒336 浦和市高砂3-15-1 埼玉県庁

第3庁舎 国民文化祭事務局内「文芸大

会川柳部門係」

締切 7月31日（当日消印有効）

発表大会

日時 11月11日（土）12・30・17・30

会場 埼玉会館大ホール（JR浦和駅西口下車）

分科会 宿題（各2句）「無限」渡邊蓮夫・「細

心」神田仙之助 席題（大会当日1題・

2人選）花南井可・熊本茶暮天

同人吟

秀句鑑賞

―前月号から―

小池 しげお

三指を夫についたことがない

西出 楓 楽

「苦勞さまでした」と三指指つて女は育ち、生活してきたものでした。それはもう昔の話ではなからうか。夫の方も全然、関心がない。しかし、礼儀だけは守って欲しい。悠々自適明日は雨の方がよい

宮口 笛 生

明日の天気を気にしているのではないが、雨の方が落ち着くのでしょう。悠々と暮してはいるが、絶えず前向きに物事を考えていると、軽く疲れる時もある。

おじいちゃんに会いたくなつたかくや姫

岩 本 雀 踊 子

おばあちゃんにも会いたいのに決っているが、おじいちゃんとしたところに、氣立てのよい孫娘の可愛さと女らしさが見える。おじいちゃんの厳しさも持った、いいかぐや姫でしょう。

四捨五入弱者に味方してしまふ

林 荒 介

四捨五入という判断資料で結果を求められた場合、たとえ機械的人間でも、迷うことがありはしないか。冷静に判断したとて正義感のある弱者、それが自分であれば尚更です。割箸がまっすぐ割れる日に賭ける

西山 幸

割箸というものは所詮、まっすぐに割れるようになっている。割れなければ箸にならないが、割れ目から先は、自分の意志どおりにならないことがある。その日はきつとまっすぐに割れたことでしょう。

潮どきを逃した貝の独り言

福本 英子

無口の貝の独り言を聞きました。彼のバイオリズムを書いてやりました。完全最高調期即ち人生のうちで、能力をフルに発揮する大きなチャンスでした。

窓いっぱい開けて誤解を解いておく

佐藤 藤子

誤解していたことが自分で解けた時、後悔したり、反省したりするが、今の自分を自分で立派だと思ふことがある。自分をほめてやる所作としての行動をうまく詠んでいる。

幸せが逃げそうだから窓しめる

奥田 みつ子

今度は窓を締めました。いま以上の、みつ子さんの幸せて何ですか。逃がしてならぬ

幸せなら窓をきつちり締めましょう。窓を開けても逃げはいたしません。

釘はまだ女を小馬鹿にして困る

石垣 花子

小馬鹿にしたいと思ひますよ。男が打つべき釘を女が打った。打たねばならなかった。そんな私を認めてほしいが、認めてもらえない自負心が心にくい程、表現されている。父よりも大きな足の靴を穿う

土橋 螢

立派な父を尊敬している。そんな父よりも大きくなってやろう。そして母にも孝行してやる心構えが「足の靴」でよく表れています。

末席の意見が的をついてくる

川島 諷云児

往々にして、末席の声は聞いて貰えないのに、そちらのご意見、ご質問となる。だからどちらも止めて、顔だけ向けておく。だのに「新参の意見はどないする、君い」。

診断書痛さにはまでは触れていず

辻 白溪子

慢性の腰痛ですが、私も時々出ます。前のことですが、休暇をもらうために、診断書がいりましてハイ。診断書は事務的に処理されますが、本人のそりや痛いこと、傷口があれば見せてやりたいくらい。

もう一度騙されて見る親心

田口 虹 汀

親ほど有難いものはありません。

川柳太平記

(134)

川柳の群像

野口北羊

東野大八

渡河準備母の写真はぬらすまい 北羊

斃れたる馬よりほかに盾はなし

日の丸のはためく音もわが部隊

北羊の陣中吟は昭和12年、同15年の北支編、

昭和16年、同18年の満州編の二部構成で戦中

の番傘を飾り、極めて好評であった。

筆者も兵衣を纏い、幾度か死線を彷徨し、

拳句の果てに迫撃砲弾により隻手になった。

「あなたの貌を見てると飯盒飯を思い出す

よ。むかしも今もあなたは戦友だ」

北羊はよく筆者と二人きりで酒やコーヒー

を飲むなかで、こんなことを言った。泥と血

と垢にまみれた日の丸の旗の下で、今日限り

の生命を賭して戦ったわれら二人には、生地

丸出しの本音でしか語りあえなかった。北羊

は九州戸畑、筆者は四国大洲、その故郷をと
もに離れて岐阜の地で顔を合わせる因縁も、
どこか心の底で通うものがあつた。お互い人
生に万事、筋を通す依古地さも人一倍であつ
た。

北羊は本名野口嘉寿美。大正4年9月30日

福岡県直方市の酒屋の六男に生れ、十六歳の

折養子に出されて栳姓を名乗る。昭和12年か

ら15年にかけて応召北支を転戦。帰還後、番傘

川柳社同人、ばくさん川柳会創立。この頃か

ら岸本水府を川柳の師と仰ぎ、機関誌『ばく

さん』を戸畑番傘川柳会と改めて『戸畑番傘』

と改称。このとき結婚。昭和16年から18年ま

で再応召。昭和20年三度目の召集を受け、下

関市で終戦を迎える。

戦後、復員して戸畑番傘川柳会を復活して
機関誌『まち』を発刊。昭和25年岐阜市へ転
任。昭和29年岐阜番傘川柳会を創立、機関誌
『鶴』を発刊、栳姓を野口姓と変える。昭和
41年師の水府の死去に加え、ある事情から番
傘を離れ、岐阜川柳社として『柳宴』を機関
誌として再スタートした。

岐阜県は川柳界切つての名門の地であつた。
明治36年狂句百年の負債を返せ——を合言葉の
新川柳運動に呼応し、田中蛙骨が青柳会を興
して県下初の川柳誌『青柳』を創刊。明治42
年7月には県下初の川柳大会を開き、同年9
月には全国で初めての第一回全国川柳大会を
開催、東西の著名川柳人が一堂に集つた。こ
うした実勢から岐阜は日本柳界の第二の発祥
地として全国柳人の注目を集めた。

しかし、昭和44年『青柳』は蛙骨の病臥に
よつて休刊。蛙骨を助けた恵那岐川、山田正
明らによつて直ちに『川柳社会風俗詩』を発
行、これがやがて柳史上唯一無二といわれる
古川柳研究専門誌『やなぎ樽研究』が生れた。
大垣出身の古川柳研究の泰斗、岡田三面子を
中心に、西原柳雨、武笠山淑、今井卯木ら古
句研究の第一人者が編集に協力、大正2年5
月まで月刊で継続して廃刊する。

『青柳』を失った実作グループは、大正11年に『よのころ』を出し、命脈を保っていたが、昭和7年上松爪人、松野暮朗、篠田半面子、川瀬占魚らによって、『こがね』が出た。これは昭和18年5月まで継続、涙をのんで戦時休刊号を出し、終戦を待つ形となった。

平和再び甦る終戦後の昭和21年8月、『川柳鵜』が今井鴨平、上松爪人らによって創刊号を出したが、今井鴨平、清水旺夕らの革新系の台頭によって、『鵜』は革新・伝統の二派に分裂する。鴨平らによっていくつかの機関誌が生れたが、鴨平の急逝によってその『現代川柳』は、昭和39年10月『鴨平追悼号』をもって現代川柳派の柳誌は消えた。

伝統派は、昭和29年に北九州市から転住した北羊の溢れるばかりの川柳熱に支えられ、岐阜番傘川柳会の創立、機関誌『鵜』の発刊によって名門岐阜の川柳界は息を吹き返した。旧誌『青柳』以来の地場古参柳人、松野暮朗、上松爪人、川瀬占魚、篠田半面子らもよく協力、ことに『川柳鵜』の編集を手がけた半面子が北羊の片腕となって活躍した。

率直に言って名古屋・岐阜という土地柄は江戸時代から根強い保守伝統の封建色が強く、とくに『よそ者』に冷たい欠点がある。その

ような困った環境下にあるだけに、地場古参川柳人との融和に手を焼いたことだと思われるが、なあーにお互いが人間で川柳人、ものにけじめをつけ、幅広い気持でやっていけばなんとかなるよ、とこともなげに語っていた北羊のことが忘れられない。岐阜柳壇切つての古参同人上松爪人の句集『ねずみの子』を自腹を切つて出したのも北羊である。

「北羊さんはうかがい知る限りにおいて、正に立志伝中の人である。年商三十億、従業員三百名と岐阜繊維業界でもトップクラスであることも、あくまで人間北羊の人となりのしからしむるところである（桑原狂雨）」

「水府先生の没後（番傘本社と）不幸な関係となり、私はこの関係者の人々に大いに陳弁に努めたが容れられず、遂に番傘を去ることになった。私は十数年を経た今もなお、誤解であったと信じているが、これによって岐阜川柳社の独立を確かなものにしたということができる」（岸田万彩郎）

「北羊さんと私との出会いは、拙宅の戸畑番傘例会に初参加された昭和八年四月二日で当時十七歳だった。北羊川柳の誕生日ともいえましよう。何事も曖昧さを許さない性格は私達が終戦を境いに戦列を離れた後も、悪条

件の中、岐阜に移れるまで戸畑番傘を守ってくれました」（永津短夜）

以上は『柳宴』三〇一号『野口北羊追悼特集』の各悼文の抄録である。昭和54年1月17日没。享年63。清柳院釈嘉浄。昭和52年岐阜市古津園に

鮎うましながらの水は澄みに澄む 北羊の句碑建立。著者に『浮世へんべん』『有情』選句鑑賞として『類題別一万句集・菊花石』などがあり、朝日新聞（岐阜版）および岐阜日日新聞柳壇選者

寝たままでよい生きてほし生きてほし 初枝「早いものでふた七日の一月三十日お経がすみ、お坊さんが帰られたあとで、書棚の隅から一枚の色紙がひょっこり」と、本当にひょっこりという形でできました。

六十の坂を妻恋うひとり旅 北羊という句でした。

人一倍さびしがりやの人が、どうしてこうもさつさとひとりで旅立ってしまったのか、一見強そうで実はやさしい心の持ち主だった主人——（野口初枝）

北羊亡きあと主幹になり、主人の意志を継いだ『柳宴』は現在四百二十号を越えている。

★次回は「本田深花坊」

俳風柳多留廿六篇研究 (四十二丁)

石田晋一・南得二・小野真孝
本多正範・石田成佳・大屋六郎
八木敬一・鈴木黄・多田光

故岡田甫

709 我夜具へ女郎を寝かすきつい事

南||三布団敷初の句。「我夜具へ女郎を寝かす」とは、客が三布団を遊女へ寄贈したことを言葉をかえていったもの。きつい事は、豪勢である位のところか。

爰に一人の英雄有り敷ぞめ 二〇一三
敷きぞめハ馬鹿をりつはにつくす也

明三仁7

小野||賛。「きつい」はある行為やことば、情況などに対してそれが普通でないことを感嘆の気持を込めている。たいしたものだ。
石田成||賛。きつい事の意は、第三者からみ

た感情を表し、たいしたものだという反面、大変な(ひどい)ことだという二つの意味を持つものと思います。

多田||小野さんのように解していたのですが、『雑俳語辞典』では、きびしい・強い・ひどい、として、甚だしい形、とまとめてあります。

710 猫もあり狸もあるてゑが来す

南||本句の場合の「猫」は老婆の異称。「狸」は狸おやじ。

句意は、猫婆・狸親父とよばれるようないやな姑・舅が居るので息子にゑの来てがない

ということ。

諷ハないはづ是くのわけだ物 五一 33
多田||賛。

711 吸口をぬくやうにしてゑハ出し

南||吸付け煙草において、軽々吸って煙管の火皿に火をつける。ゑがそのくちをつけた吸口を拭くのが、まるで吸口を煙管から抜きとるように強く拭いて、差し出したとの描写の句である。

吸口を抜くほど強く拭くとは、ゑの羞恥であり、その煙管を受け取るのが男(亭主)であれば、惜しい気持で拭かなくともいいのに

というところか？

鼻からけぶを出しながらふいて出し

二四二四

すい付て出すのがよめのやくに成り

宝十二二二

本多 吉原女郎の吸付け煙草と比べて、吸口を抜くように出すのは色気がないというのではないか。

石田晋 最初、本多氏のように考えていましたが、礎の説が正しいように思います。

多田 同右。

712 山形が組子花かんざしで出る

南 「山形」は入山形の花魁。「組子」は組の支配下の者、組下、組足。入山形の花魁の組子は新造、禿の類。「花かんざしで出る」とあるから、禿であろう。花かんざしの盛装から花魁道中と思われるが。

また、武田家の武將に山県三郎兵衛昌景があり、赤備えて有名。

本句「組子」とあるから、山形は山県三郎兵衛に、新造・禿の赤地の衣裳を、山県の組子赤備えになぞらえ、但し花魁の組子は、つまり禿は花かんざしで出るとしたものの。

山がたの下知新造の赤カ備

八八二六

吉原の伏勢どれも赤備へ

五八三

本多 「花かんざしをぬいて出る一ばん手」

(二五二) の句もあるが、伏勢を詠んだ句と考える。「組子」の語が活かしている。

八木 本多氏説のとおり「組子」から、この句は伏勢の句と思う。山県三郎兵衛とその三千の赤備から新造、禿を暗示する。とする考へは傾聴に値しよう。

石田晋 本多氏説賛。「組子」は捕手頭の配下。

多田 同右。

713 万字屋ハ草分けらしい家名也

南 新吉原の見世開きは明暦三年八月であるが、翌四年は万治元年となる。

句意は、「万字屋」は「万字」と「万治」の相違があるが、名前からすると、新吉原は見世開きの翌年が万治元年であるから「草分け」は草創に同じ意で、つまり新吉原草創時からの老舗らしい家名であるということ。

八木 明暦三年新吉原始まり、同四年は万治元年、それで万字屋は新吉原の草分け、という礎の考えに賛。

多田 賛。

714 いさかいをしい 碁打中能シ

南 「碁敵ハ憎さにくしなつかしさ」(初三)の有名句があり、碁打の心理をうがって妙である。

本句もまたその同想句であるが、側から見ると限りまるでいさかいをして居るようで、実は仲がよいという碁打の矛盾をうがった句。

碁がたきハ自身番からはたし状 四五三六
又けんかしに来たといふ中のよさ

石田成 賛。

先ン手後手皆ナ碁の友も石と成り

二二二九

多田 賛。

六九一五

西日本文字放送作品募集

題「似る」 橘高薫風選

3句 締切 7月15日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい
〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20

大手前ウサミビル3階

西日本文字放送 川柳係

水煙砂

黒川紫香選

出雲市 金 森 知恵子
ゴージャスを少し味わうJALの旅
背信をさりとて断てぬ血の絆

総理不評

ふるさととは黙し世評に堪えている
割勘の小銭がはしやぐアンミツ屋
心ない風に夏苗いたぶられ

名古屋市 藤 井 高 子

太陽はいつも味方でいてくれる
海をバックに気楽なシナリオ書いている
少し翔ぼうか老いの真はさわやかに
同心円貫く亡母の子守唄
ストレスは河馬の欠伸にくれてやろ

浜田市 中 尾 まゆみ

新線のまぶしき愛のまぶしさよ
人さし指の彼方に星の王子さま
逢える日へピンクのリボン撰っておく
縄跳びへ入っただけで孤独さん

ゆとりを持って真紅のバラに負けておく

米子市 足 立 由美子

約束が重なる程の倅せで

ふるさとへ帰る話にはずむ靴

ふるさととの風も空気もみんないい

どしゃぶりが町の噂を消しに來た

いいうわさだけを聞く耳持っている

寝屋川市 井 上 すみれ

血圧を上げて又読むリクルート

少年の輝く瞳に母がいる

ハンカチの白さが女をまた泣かせ

手の砂をさらさら洩らす日の悔やみ

あの一言に肩を落した影法師

熊本県 大 川 幸 子

なまけ癖ついてしまった全自動

痛いのを手助け出来ぬ手術室

手荷物が番をしている指定席

それからは路上に一円落ちてない

何たべて見ても一人の味気なき

八尾市 高杉千歩

以心伝心ぱったり出会うおしるこや

自立自立と男ばかりが攻められる

追いつめて季節が移る風の声

呆け上手になつてばつばつ描いてます

欲しいのは愛だと今も信じてる

今治市 野村京子

人許しひとが恋しいカスミ草

春風が花の情話を持ち歩く

長い手紙書いて少女に媚びがない

掌にのせる程の幸せもの足りず

こおとろことろ子供都会に行きました

鳥取市 小谷美千

消費税お釣りくださいとは言わぬ

メンバーが欠けるといつも呼び出され

満月にまたゲンマンをさせられる

行楽の流れに乗って旅に出る

泳がないから三途の川でバックする

富田林市 池森子

ふるさとへ向いて食べてる柏もち

夏の熱 冬の冷氣も知る元氣

うらうらと春は幼鳥たちのもの

春風におんな変身する予感

もたれ合う人と喧嘩をしています

伊丹市 山崎君子

花もいい若葉もいいな犬とゆく

新緑がゆとりをくれる散歩道

手に触れる御室の桜ぬれていた

映画村一丁ほどの江戸ロマン

悪筆の遺言状のあたたかさ

静岡市 沢田きん

居なければ寂しいくせに喧嘩する

無口でも親子の絆通じ合い

迷い捨て一人気楽な道に出る

生きるとは耐える事だと天の声

くもの巣に朝の出ばなをくじかれる

広島市 流奈美子

母の忌やあの日と同じ雨の音

レンゲ野で白い心を取り戻す

春帽子陽気な風に弾み出す

人間の罪の深さよ活造り

無理矢理の椅子に馴染めぬ尾髭骨

熊本市 宇野昭代

くたびれ果てて孫の余韻に酔っている

マニキュアの色にお米が染まりそう

大の字に寝て雨音を聞いている

名文に余白がほしい気の疲れ

一人きりにならないうちにフルムーン

長岡京市 木本如洲

都合よく森にお伽の馬車がくる

遺言に書く貯金だけ持っている

喜劇の絵落ちてる朝の街に佇つ
境内を奈良線が行く藪椿
裏切った街にヒントが落ちていた

京都府 木村 たけし

大原女の酢莖売りから壬生の鐘
夢のない絵を描きたがる春の森
通夜の席亡父に意外な艶ばなし
嬉しい噂と疲れた傘を母たたむ
エンピツを折って妥協を考える

酒田市 永沢 裕子

完璧のお宅でぬるいお茶を飲み
たいそうに義理を包んで荷が届き
執着をしたいお金の早い旅
遠い夢孫に果した赤い靴
的について観音ブーム呆け封じ

西宮市 秋元 てる

悪役は皆引き受けて長女なり
糖衣錠やがてじんわり来る悪意
悪乗りが何時も一番お父さん
声量の乏しい軍歌まだ続く
新学期一人一人に緑萌え

吹田市 井上 照子

嫁がせた娘の部屋あけて風とおす
孫襲来大奮戦の日曜日
果されぬ再会思慕がまた募る
日にかざしくるっと回して傘を買う

嫁った子にいつでも泣きにおいでやす

久留米市 鶴久 百万両

幻想の樹から少年降りてこぬ
小便小僧にグリム童話を読んでやろ
札束の魅力に負けて猿になる
ビックリ箱に俺の誓詞が積んである
美しい嘘に脱帽してやろう

京都市 松川 芳子

あの人も出好き私とよく出逢う
立替えて何時も損する消費税
中流と思い込んでるカード持つ
ポケットでハガキ二、三日思案する
シルバースhirt座つてみたい日の疲れ

東予市 小山 悠泉

胎教へたつぷり聞かすセレナーデ
洗い場が渴いて妻が病んでいる
前向きに進めば虹が見えて来る
前衛派自負して持論譲らない

尼崎市 野瀬 昌子

手放した犬に毎日逢いに行く
釣書きを馴れた手付きで渡される
下戸同士並んで座る酒の席
お隣へステキな車が来て止まる

尼崎市 的場 十四郎

海鳴りを赴任の宿で聞く浴衣
さわやかな話題のなかにある自慢

この杭を打って本音をたしかめる
これきりと不倫の跡を波で消す

兵庫県 森 協 和 子

神さまの横で疲れたなと思う

愚痴みんな吐き出し大きなメロン買う

背に乗せた傷が癒えない春の鬱

コーヒーでねぎらうやさしさだつてある

熊本市 北 川 一 進

体重計今日も変らぬ日記帳

余白には一句を書いて出す便り

書く事を覚えた孫のぬり絵帳

珍しく箒手にした日曜日

大阪市 上 田 柳 影

子供の頃の話が好きだよもぎ餅

束子にも分かる怒っているんです

都会から汚れて帰るブルーメラン

友の計報相つぐ

安らかに逝つたと計報書いてある

尼崎市 森 安 夢之助

夫から叱られるかも試着室

古里は遠く一人で飲むコーヒー

お父さん嫁の見たてで派手を着る

曲り角一つ間違え迷い出し

大阪市 吐 田 純 子

義理一つひとつ果して老いの道

砂遊びチルチルミチルの声がする

蹴落して奪った椅子が軋み出し
道草を知らぬ夫の靴の音

大阪市 亀 井 円 女

小石抱くそのうち光るかも知れぬ

流れにそってやつと歩幅が合つて来た

終止符は唯ありがとこの五文字だけ

楽しています妻の定年めつそうもない

熊本市 高 野 宵 草

パン食のあとにたくあん嚙るなり

平凡なひと日だったと日記閉ず

御礼をしたいと役所呼びつける

博覧会トイレの前も並ばされ

藤井寺市 高 田 美代子

証文はないけど親に借りがある

面二つ持ってお嫁に行こうかな

昭和一桁そろそろ生命お大事に

ライバルより白い白足袋さがさねば

和歌山市 山 口 三千子

鬱の日は犬も溜息ついてお手

聞き出した訳でないのに付く尾鰭

ワンマンの夫の透き間埋めておく

子が帰りパントマイムの日が続く

徳島市 宮 武 まつ 女

命令のままにやたらと打つ太鼓

残された余生へブランコが揺れる

自叙伝に誇るページのない轍

ぬかるみを進む運命というのなら

米子市

新 正 子

スランプに今日は右から靴を履く

夕涼み浴衣に母の手を借りる

進化論まだ伸びるかな象の鼻

好きだから君には触れぬことにする

尼崎市

尾 宮 弘 治

四畳半の世界を守るドアチェーン

耐えてゆく喪服の列に花の雨

時どきは使えと花瓶転げ出る

派手な絵はないが無疵の共茶碗

熊本市

岩 切 康 子

野苺は摘まれず今日も無事でした

一人居の布団持ち出し昼寝する

大橋の凄さ走ったり見上げたり

突風は祝儀の髪にいたずらし

川西市

西 脇 富 美

手をつなご影も素直になったから

明治気質姑の歩幅は乱れない

ありがとうが爽やかでした反抗期

人の幸喜ぶゆとり五月晴れ

西宮市

松 本 一 郎

作文にちちはは見事料理され

損得を計算しない夫が好き

幸せと気づかずにいるこの平和

夢の中これは夢だと安堵する

岐阜市

渡 辺 杏 村

あの齡で妻は水着を買いにゆく

夏休み父は予定に入れてない

とんでもない方向へ行く西瓜割り

風物詩入道雲と青い空

尼崎市

明 壁 敏 之

堤防を巡らし海の貌を変え

怖いもの見たさに少年ついてくる

ケーブルを横目で眺めしんどがり

負うた子に信号無視で叱られる

尼崎市

中 澤 向 西

幸せは信ずる友がそばにいる

爽やかな朝市どつきり買ってくる

銀の船乗ってお伽の国にゆく

日の丸を立てると子供が寄ってくる

鳥取県

中 瀬 さつき

マッチ箱のような部屋でも夢いっぱい

ほのぼのとする話なら聞きましよう

真ん中に座らせられて覚悟する

絵日記から家庭がわかる一年生

鳥取県

伊 吹 富 恵

茶がうまい温い仲間の輪の中で

手桶ないホテルの風呂で若がえる

もう一度逢いたい傘を借りてくる

花咲かす光と水と風を得て

堺市

桜 沢 あかり

あてやかな牡丹の前でハイチーズ
影踏みの一人減り二人減りひとり
そつとして上げる大人の愛もあり
教会の見える窓から陽が当る

島根県

高野律子

時世です素直に負けて流れます

正直の二字を宝に汗を積む

幸せは何がなくとも子が五人

塩壺に母の思いが生きていた

尼崎市

鈴木良征

汚職には縁の切れない二枚舌

時代遅れの煙管転がる父の部屋

一億の金持て余す過疎の村

頂点で尻尾切られている男

和歌山市

田中みね

言いかけてまたにするわと気をもたせ

百面相君の素顔にまだ会えず

喜びを素直に出せるひとが好き

倅せ気分だってそうでしょこの手紙

岡山県

土居ひでの

川の字に並んで倅せの寝息きく

二十一世紀へ羽ばたく翼かも知れぬ

順不同風は無情のいろは坂

手枕の母の温みをひとり占め

鳥取県

西浦小鹿

まず一步それを大事にしています

生かされて人に頼ってばかりいる
割り勘の酒から本音こぼれ出す
切り札を持つとゲームをやめられぬ

吹田市

山本希久子

孫を訪う口実もあるフルムーン

たった今別れたばかりの長電話

ブルトレに夢と旅情をのせて行く

ゴキブリに逃げるチャンスをややる独り

寝屋川市

太田藍子

同じ事また聞いてると子に言われ

弁当も付けますからと駆り出され

指立てるくせが気になる初対面

街角のおしゃれな店で待合せ

和歌山市

堀畑靖子

妻という役も結構肩がこる

誘惑に初心忘れていた私

蒸発をしたい五月の気の迷い

もう開き直るしかないオバタリアン

香川県

上藤多織

手紙来て父に文才あるを知り

親に似ぬ方の花芽に期待する

作文に夫婦喧嘩を裁かれる

朝顔の芽へ絵日記が元気づき

出雲市

岸桂子

雨の夜も案じてくれる一通話

体重計いま健康という目盛り

蝶に逢う約束がある花の種
庭先に来る小雀の盗みぐせ

枚方市 中山 おさむ

二泊三日くすぶったまま老夫婦

消費税三つの財布持ち歩く

長男の嫁が素直な顔で来る

バイオリズム座り直した回り椅子

佐賀市 古川 一 徳

稽古ごと老いを忘れる舞扇

父の歩幅まだまだ杖がいりません

ぼんやりのようで手の内読んでいる

郷土版古いなさけが生きている

尼崎市 木下 義 嗣

昭和史に想い出深い写真帳

噂など一寸も気にせぬ派手な妻

酔ってまた妻に財布を調べられ

手品師が種をあかすも人気取り

貝塚市 池田 寿美子

舞台裏の汗をじつくり味わおう

もうちよつと話したかった発車ベル

鈴つける役目は何時も逃げられる

ストレスを北山の杉知っている

姫路市 谷 清 柳

尻尾切りさてゆつくりと眠ろうか

大都会ひしめきあってみな孤独

酒やめてまた悪友がひとり減り

天国に近い河原で石を積む

高槻市 芦田 静 江

トッブニュース揺れて活字を確かめる

赤とんぼ竜野の里に胸を張る

頼り切る嫁がやさしい松みどり

春うごく月下美人にあるフアイト

鳥取県 乾 隆 風

仲たがいできぬ雨情に包まれる

番犬がいるからテクシーで帰る

でんでん虫も耳を澄ませる夏の陣

平成の窓から岩戸遠く聴く

尼崎市 吉 永 伊三郎

クイズは解けたが妻まだ帰らない

そんは筈おまへんとまた老夫婦

一粒のダイヤに狂う走馬灯

午後三時女が手帳繰っている

京都市 小林 英子

子つばめを促すような五月晴れ

測量士時には愚痴も聞いてやり

腕白が礼儀を知った剣道着

夏登山小舎のランブも磨かれる

寝屋川市 宮崎 菜 月

通院の茅花流しへ踏むペダル

どの風も素直に受けて熱冷ます

古ベンチ姿昔のままなれど

膨大な母の手紙に泪する

蛇口から出たデマ早く捨てましょう
米子市 大田 みさと

背伸びして掴んでみたい臍月
顔ひとつ造り直して出なおそう
こっそりと嫁の口紅塗ってみる

ふすま絵を見に行くだけの寺参り
守口市 森川 春子

行けぬけど楽しみに聞く旅行談
上げた木に花が咲いたという知らせ
長生きをして古里の味思い出し

静岡市 中西 雅

切株に縄のある木曾の森
景色よりカラオケが好き老いの旅
不自由な耳の老婆は筆達者

浴衣着ておどりおぼえた木曾のお湯

枚方市 森本 節子

五月の庭一巡すれば供花出来
独り言言いつつ遊ぶ子があわれ
留守犬の長々と寝て連休日

岡山県 富坂 志重

倅せをつかみたいので手を洗う
仏壇の夫と新茶をつぎ分ける
言い勝ったおごりを論す帰り道

岡山県 伏見 すみれ

子供みな味方につけて母強し

結婚をさせて田んぼが一つ減り
算数に弱いが商売よく儲け

喪の夜にしとしと雨が降りやまぬ
姑さんと嫁とでなしに出会いたい
反対をしたら憎まれ役になる
鳥取県 山根 八重

ボート洗う若者達のまぶしさよ
何もかもからにしないと進まない
さつき花摘んで季節がまた流れ
八尾市 向井 しづ子

何ということか娘を怒らせる
借りものをしているように腰痛み
つと思いだした銀行の守衛さん
和歌山市 森 茜

太陽がとっても好きな水しぶき
陽炎が眠りを誘うハイウエー
それからの事が気になる竹林
鳥取県 西川 和子

少年の夢は地球儀まわしてる
道説いた母は小さく老いている
捨てられた仔犬に月があたたかい
岸和田市 岩佐 ダン吉

それぞれの深さの違うおつき合
傷口をふさいでいつか共白髪
奈良市 米田 芳子

— 45 —

旅誘う便りを筆でしたためる

摂津市

木下道子

羽曳野市 福田満洲子

遠足の子らと分け合う若葉風

まかされて姑の爪を丸く切る

転がすのは玉ばかりとは限らない

静岡市

小木久子

大洲市 横田照夫

愚痴ばかり言ってしまった自己嫌悪

嘘を言う顔かとひらき直ってる

全員を感動させたい話

佐賀市

江口万亀子

鳴門市 八木芳水

衣がえしたら日傘もほしくなる

冷や奴好きと言ったが運のつき

留守まもる姑は依怙地に鍋磨く

兵庫県

倉垣恵美

兵庫県 東浦砥代

茶柱が今朝のわたしをなぐさめる

本音書くすらすらすると本音書く

耳よりな話はつぼみのまま綴る

広島県

森川抜智

南国市 窪田和広

飲んでいるうちは達者と思ってくれ

道みちばやいて歩くお年寄り

よいお酒ブレーキかける時を知り

鳥取県

太田幸枝

熊本県 増田一乗

菓子博の海にあふれている背中

新築のそばで樹の芽は深みどり

手作りの籠にアザミを咲かせてる

バス路線乗るたび変る道普請

兵庫県 酒井靖子

修験者が十字を切れば火が燃える

連れない義理のお通夜の所在なさ

負けて勝つゆとり独りになつて知る
結び目を確かめ合える友がいる
ときめきの中の積木は崩すまい

寝屋川市 河合 時弘

へソ繰りをねらう可愛いお客さま
さよならを言われてからの乱気流
天井へ別れを告げる退院日

岡山県 牧野 秀香

糸が切れ天へかくれたやつこ風
世渡りを観音さまが手で愉し
明日の夢はげみをくれた占い師

岡山市 中嶋 千恵子

ちぎり絵で綴る女の恋心
愛してるなんて言えない老夫婦
びくびくと言訳してる女です

堺市 神原 文

女の執念終の日まで化粧する
人前で話すと腰が弱くなり
同情し聞いているうちのろけ出す

豊中市 三宅 つえ子

病む友に贈る言葉を化粧する
脈あるとみたか今日も使者が来る
にぎりめし戦後の飢えをまなうらに

静岡市 久保 きぬ

友が来て愚痴を土産に置いて行き

誰とも話しかけたい合格日
おしゃべりが女ストレス軽くする

相生市 中塚 礎石

語り部となつてますます元気なり
露天商の手で包丁の試し切り
終業を知らず時計に音が無い

京都市 渡辺 圭坊

金鳳花富を荒野に播き散らし
サルビアは燃ゆる想いの赤い花
校庭のアカシヤ匂う友の情

藤井寺市 中島 志洋

本心はとても優しい毒舌家
貯金帳空っぽにして義理を立て
招かざる客ゆうゆうと長話

今治市 渡邊 伊津志

週刊誌欠かさず買って趣味読書
セールスになると肩書つけてくれ
懸命に闘争をするイヤリング

十和田市 阿部 進

夫婦でも程々が良い車間距離
美しく老いたく心薄化粧
ボケ防ぐ本を読んでる老夫婦

鳥取市 武田 帆雀

添え書の僅か一行裏切れぬ
春風が胸の隙間を通り抜け

セールの弁当今日は海で開け

大阪市 島路太郎

アトリエの窓一ぱいの風は夏

長くつで男がばがば梅雨をゆく

デパートで逢う約束の更衣

和歌山市 森三枝子

一日を無事に過ごした終い風呂

身軽さがとりえでうまく使われる

途中から話がぼける長電話

島根県 菅田かつ子

すばらしい花を咲かせる汗流す

青春の髪をなぶらす風みどり

風向きがvariわたりしも身構える

静岡市 増田扶美

歌う人飲む人バスは五月晴れ

源流はこんなに澄んだ川だった

地下足袋のままの昼餉の笑い声

新潟県 高野不二

パンフレットの旅して家で酒を呑む

憤懣を書いて寸志が来る投書

元値切ってもばっちり消費税

鳥取県 黒田くに子

なんとなく金魚見ている昼下り

ころころと笑顔はじける手話の指

郷愁や月下美人は闇をだく

虹が出る渡ってみたいかたつむり 芦屋市 根来 敬

矢印を素直に信じ抜け出せぬ

本当の事を言うては嫌がられ

静岡市 三浦つね

空気だけ気楽に吸える消費税

人並みの暮しを願う台所

玄関で済みますと言う長話

大阪市 川原章久

紫陽花が心変りのごんげ録

死にたいと母の繰り言今日もまた

秘湯の夜カンテラ揺れる隙間風

唐津市 福島紀一

吉野ヶ里弥生の土がまぶしそう

二重税とられているよな消費税

砂浜の俺の足跡波が消し

愛媛県 八塚三五島

等距離につないで丸い輪をつくる

無理承知言われる方も言うほうも

あやとりの赤いほつぺがよく匂う

流山市 神田治

正論へ寝わざはやめることにする

消費税とらないとこへ飲みに行く

逆境を支える妻の固い芯

大阪市 今西静子

旅プランこんびら歌舞伎誘われる
しゃべり疲れた妹の寝息やすらかさ
帰宅して旅の余韻がまだゆれる

大阪市 榊 本 落 児

春風に暖簾の揺れるのも京都
ばあさんの声が弾けるあぶり餅
阪神の勝った日テレビを二度三度

十和田市 阿 部 喜久江

母乳の味は知らない現代っ子
平成の時刻んでる古時計
前例がないと窓口そっけない

旭川市 朝 倉 大 柏

好きになつたらしい美人に見えて来る
一本の蘂から運が向いて来る
ライバルの溜息聞いた安堵感

唐津市 浜 本 治 幸

親も子も皆それなりに生きている
予定表通りにゆかぬ春の雨
消費税納めて今日の飯を食う

鳥取県 美 浦 美代子

多情仏心美し寡婦は揺れ動く
招かれたホテルに似合う服がない
あこがれの街雑踏で孤独知る

鳥取県 幸 家 単 車

本当の味方は俺の影だった

青い鳥誘う小窓を開けておく
母から愛の告白聞いている

富田林市 大 澤 三 四 子

目をつむる大人を裁く子どもの目
サングラスかけて行くとこ午後にする
いいことがありそですぐに返事する

静岡市 宇 佐 美 寿 美

つづれ帯老婆も女を覗かせる
宿の灯に忘れたはずの過去に会う
言い訳が気まずい空気を解きはぐし

藤井寺市 楠 昭 子

疲れ出た靴だが一番はき安い
やりくりの家計へ連休やってくる
一度来た客はまたくる自信持つ

唐津市 山 門 幸 夫

背丈比べ爺ちゃん負けて嬉しそう
こっちだよ蔵を追って老妻を呼び
ままごとの五目ご飯に消費税

岡山県 後 安 江 山

新築の木の香こもりて春の月
咲くもよし散るもまたよし散歩路
人柄がまるうなつたと心配し

榎原市 西 本 保 夫

喰い下がる質問ピントずれてくる
日めくりをめくる几帳面さも持たぬ

公園のベンチでしばらく無為無策

河内長野市

大西 文次

連休を待ってたように雨が降る

コマーシャルの美人と同じ風邪薬

石段の下から無理な神頼み

富田林市

山原 昭水

いじめっ子雀の学校おりません

伝書鳩昇任辞令もってきた

フクロウが暴走族に喝いれる

松江市

豊田 巡歩

野も山も緑大きく深呼吸

夫婦には各々の趣味西東

友呼んで新茶の味で語り合う

寝屋川市

北岡 波留吉

肩を揉む指が伝える嫁の愛

ゆっくりしたが姑が気になる里帰り

朝のコーヒー一味違うフルムーン

兵庫県

奥野 テル

ドラマ秘め小さくなった母の背

あなたへのセーター私の彩で編む

友の訃に心細さが胸にしむ

米子市

小西 五十鈴

隣にも留守を頼んでフルムーン

一本の杭で隣ともめはじめ

総入歯はずして寝てる仏顔

大阪市 尾崎 黄紅

駄菓子屋の壺つり銭のありどころ

まだ挙手の礼して友がひとり来る

大根の白さに偽りなどはない

鳥取市

西村 黙光

お隣は六法全書肩が凝る

一票で仇討ちしたる消費税

地球儀の隙間へ詰める人のエゴ

藤井寺市

武部 敦子

辞書さげて今日も雑学また楽し

筆不精旅の誘いの電話ベル

言い訳をパンに言ってる消費税

寝屋川市

豊福 路子

嫁した娘のきずな彩る街つつじ

しろがねの滝抱きしめる母の胸(那智の滝)

巡礼の発意かたまる那智の坂(清岸渡寺)

岡山県

大石 あすなろ

もめ事が嫌いで沈黙してるだけ

よからぬ事聞いていますぞ益が

いつか手を握った橋をふり返る

島根県

松本 聖子

そして今痴呆症保険を売りに出る

プレゼント利子をくわえて帰りつき

ダイエットしながらしつかり食べてます

豊中市

村上 とく子

外野席少しだまってほしい愛
床の間を背に飾られて母米寿
たとえばの話で妻がすねている

川西市 田中喜俊

立読みで漢方薬を知りつくす
虫干のつもりで茶会派手を着る
春雨が傘うつ音は心地よい

静岡市 柳沢たま

総入歯搗き立て餅に吸い取られ
記憶力落ちて昔が入り乱れ
我家だけ平屋で周囲皆二階

広島県 中村要

浮かれ蝶一緒に乗った無人駅
散歩道苦吟の末の縄暖簾
老婆の額に角の抜けたあと

鳥取県 武田照女

味方にも敵にもまわる笑顔です
雑音の中で女を意識する
目も口も元気な姑の木綿針

高知市 山崎一求

日雇いに六連休は夢の夢
魚心詰めた中元に着し
一円が財布に溜まる消費税

鳥取県 前田嘉津江

足るも愚痴足らぬも愚痴で小槌振る

雀チュンチュン朝寝の窓にラッパ吹く
仲間から外れて反旗ばかり振る

熊本県 立道善太郎

ふる里にまだ米を研ぐ川がある
新薬に試し試され古希を越し
トカゲです尻尾切られても切られても

田辺市 染道佳明

組板にのせてもしゃべらない男
上等のライターが欲しくなる四十歳
にんにくの利いてるうちに翹びましよう

神戸市 岩田信義

深爪をして後悔の夜が更ける
筈は悩みが無くてよく伸びる
定期券裏に返して入れてみる

岡山県 江口有一朗

フロンガス思わぬ場所に穴をあけ
日めくりに今日の決意を告げて出る
徳利の酒が気になる夜の目覚め

静岡市 浅子まつゑ

すきっ腹何言われても腹が立つ
一億の捨て金もある世の中か
古靴の干したるままに一夜過ぎ

伊丹市 猪原石莊

ただ一人一壘コーチだけセーフ
洋式トイレ天を仰いでとはいかず

一円の切手この顔だれやった

大阪市 平井露芳

老父一周忌

あの世でも親父やつばりのんで居り
若造り手の老いだけはごまかせず
持主がわかつて竹藪ほつとする

鳥取県 萩原美雪

バラバラな二人が夫婦演じてる
はるか昔のことはすっかり覚えてる

鳥取県 松本伊都子

美人画の横にすまして立って見る
二十歳あの娘美人に見えてきた

茨木市 藤井正雄

浴槽の窓朝富士が見える寮
水溜り避けてバス停長蛇列

堺市 近藤豊子

豌豆の花に出合った疎開先
無精卵螢光燈の空だった

鳥取県 鈴木芙美

窓ぎわに花一輪の思いやり
昼の月ないしよ話を聞いている

鳥取県 久野野草

口笛を吹いて散歩の歩が揃う
時どきは妻の化粧も見なくなる

和歌山市 前田美子

土ついた竹の子市の二割安
縦のもの横にもしない粗大ごみ

青森県 荒田つる

好きな帯好きな紬をつつましく
倦怠期ともに多趣味でつつがなし

岡山県 後安ふさえ

いつまでも未練が残る落し物
古里の句を都の子に送り

河内長野市 岡崎実

電話ではたよりなので逢いにくく
添うてみてすっからかんの人を知る

吹田市 西岡豊

わいわいと公民館に三世代
星影のワルツで友を送る宴

宇部市 中村三良

おせっかいなとこまでマイク追ひ掛ける
リリーフは妻に任せるフルベース

倉吉市 青砥菊枝

私もコリーと散歩してみたい
赤ちゃんの名前に父の願ひ込め

倉吉市 田中八太郎

顔を見になどと借金言えず去に
空似だと思ふ他人が会釈した

唐津市 山口ふさ子

嫁姑やりくり上手でうまが合い

大橋を竿竹売りの声も行く

大阪市 山北 三三三

譲られし席へ素直に礼を述べ
風化せぬロマンを秘めて女部屋

吹田市 山田 里子

遠い記憶に母のロマンも消えた橋
ユーモアが明治生まれに通じない

泉佐野市 大工 静子

粉雪の舞う庭に草の芽覗く
咳すれば大丈夫かと優しい孫

岡山県 森下 正子

芋棒を真似て海老芋苦笑する
人恋しさと見ゆ老いの喫茶店

豊中市 滝北 博史

竹藪をコースに入れる散歩道
仕送りに三パーセント足してやり

奈良市 井上 大

竹やぶの前を通ると不整脈
手の中でクルミ鳴らせば亡父の顔

羽曳野市 麻野 幽玄

核心にふれて思わず身構える
老夫婦話題とぎれた差し向い

和歌山市 岩崎 穂

病む人の代理でポックリ寺へ来る
名医だと言うからそうかなと通い

鳥取市 岩原 喬水

朝の窓ステンドグラスの新鮮さ
信心に自我の強さがじやまになり

静岡県 山中 竹野

休日が増えて予算を狂わせる
色あせた写真に残る青春譜

大阪市 清水 絹子

紫を着てむらさきを読んでます
師よまさにあなたの季節風薫る

枚方市 山崎 彩子

天婦羅を揚げていますと電話口
たし算だけ電卓よりも速い妻

大阪市 家村 高雄

全自動ひとりでボヤき濯いでる
カネ造るところにもあり花の里

八尾市 片上 英一

弱い方に応援している外野席
冷戦を気づかっている母の顔

岸和田市 三輪 通彦

平凡なニュース平和な日がつづき
易の灯に心の迷い問うてみる

岡山県 杉本 伊久栄

補償金で人の値打ちを計られる
連休も店開いてる小商い

青森県 波 ただお

海の端に落ち行く夕陽の赤い顔
五月晴れナースの唇赤く燃え

泉佐野市

真崎浪速子

男なら花を咲かせる城を持つ
他人の癖ばかり目につく席にいる

大阪狭山市

桜井莊次

横顔に笑みを浮かべている自信

お隣へ鍵を貰いに行く土産

米子市

服部朗子

無理をして働く靴を軽くする

白髪もはめて貰えば弾む筆

豊中市

みきわきみ

日曜の病室隣は外泊中

迫り来る恐竜もどきのダンブカー

鳥取市

前田一枝

味方だと思い秘密をうちあける

風が吹き砂の足おと変えて行く

鳥取県

横山房子

デマ好きな女に長い舌がある

お金とは怖いものだよ人を変え

岡山市

福原辰江

孫と行くネクタイすこうし派手にする

子が三人と言えば再婚こなくなり

八戸市

島田昭治

孫馬鹿になって目尻を下けている

アバラ家も倅せがあり笑い声

鳥取市

近藤秋星

春の風春の川にもある匂い
春や春車椅子にはまだ寒き

倉吉市

橋本さつき

お迎えを待ってるなどと蝮酒
美女の膝勝手に座る猫である

鳥取県

木下芙葉

平成になって日記の記事もふえ
散歩道花に見とれて苦を忘れ

大阪市

堀口欣一

君知るや天牛という古本屋

トンボりをゆくふところ五百円

静岡市

青柳金吾

この俺をからかっている俄雨
全員に当る籤ならたかがしれ

島根県

今川三津江

風笑う少し派手目の彩を着る
よく吠えて番犬人をよせつけず

富田林市

加藤ミツエ

母の日に

嫁さんがバッグのプレゼント嬉しいね

通院へ取り去りにくい春ごたつ

東大阪市

大平太一郎

ビール戦お客はドライ夏の陣

あと味につい人柄が見え隠れ

出雲市 森山健歩

自動ドアのつもりで佇っていた不觉

無為無策結構貯めているらしい

出雲市 高橋きよし

好感がもてて笑いも出る対話

分校を閉じて街には新校舎

堺市 井上たかし

高校で媚びを覚えて来た娘

ひまわりの苗で素早く夏を向く

島根県 児玉幸子

朝霧の流れる道を配達す

菓子博へ人間工芸見て戻り

大阪市 乾哲静

母の日に待ってたように荷が届く

盆栽をいじる気になりひやかされ

和歌山県 西口忠雄

まだ若いちょっと気取ってみませんか

もみじの手どっちへ振っても愛される

静岡市 丹羽定次

知らぬ人に会釈をされて首かしげ

踏ん切りが着かぬ男の頼りなさ

富田林市 浦田トシエ

春の月わたしの夢もおぼろです

春先に胸はずませて美容院

和歌山市 田中隆積

薫風が畑の作物撫でていく

故里のきれいな水がうれしくて

豊中市 小林一夫

春惜しむ人と眺める狐雨

秘薬売る店もありけり寺の道

静岡市 大石たき

雑巾を暇にまかせて縫う奉仕

長男も定年暇でもてあます

米子市 小塩智加恵

最後には親父によりしく言う息子

還暦に東北旅行子がくれる

鳥取県 西原艶子

歯を白く磨いて好きな歌うたう

つないだ手離したくなる恋をする

静岡市 大村正雄

別嬪の女医の言うことよく守り

花道を飾ってやりたい人もある

島根県 山根峰雪

ごつい手が語る大正の子沢山

古い二人旧居を守る友を訪う

豊中市 額田明吉

春の温習会で

名取の友いずれあやめかきつばた

年金と手帳も揃い旅に出る

島根県 川津幸夫
連休でとしより留守番買つて出る
包丁の動きの止まる救急車

鳥取市 森山豊子
年金が三パーセントあえぎ出す
無理をして晴着一式買いました

大阪市 清水利武
札束を土産に首相のフルムーン
血税を軽く使われたくない庶民

岡山市 河野青銅
階段をさけて平屋の老夫婦
町医者へご無沙汰をして恢復期

藤井寺市 菊地繁男
春うらら木彫のように猫眠る
蘇生して地獄を見たような顔でいる

鳥取県 石谷美恵子
泥吐かぬ貝は砂地に潜り込む
演説に方言も入れ顔を売る

唐津市 野田旭恒
バーゲンの夫は車で待機中
はるばると流浪の末に遇う仏

泉南市 坂根流水
独り旅何か足りないものありて
貧乏も神は健康下されて

青森県 木村喜峰

こどもの日大人が休んで花見酒
カラオケに取りつかれてから人変わる

大阪市 平山登代
佐渡ライン思わぬ霧水に大歓声
ペランダにミニ鯉のぼり初節句

鳥取市 美田旋風
おだてられ途端に本音吐かされる
近道をせずに会いたい人がいる

島根県 梅木梅園
古き菓を忘れずつばめなつかしむ
さわやかな風旅だより乗ってくる

高知県 大門一郎
この部屋で一緒に空気吸いましょう
背なに書く文字を信じて生きてます

神戸市 石神草風
鮎解禁俺には縁のないニュース
俺に似て孫も五年で駒を持ち

広島市 名和喜一郎
胸襟を開けたら槍が突きささり
日記帳忘れたいこと書いておく

島根県 岩田三和
一円を拾ってかえる子を誉める
日に三度新築現場へきて指図

愛染帖

橘高薫風選

富田林市 片岡 智恵子

見える敵見えない敵へ膝を抱く
約束を破ると小指長くなる

米子市 八木 千代

散るまへの牡丹のやわらかい笑顔
書き終えた手紙と二枚貝の殻

島根県 小砂 白汀

善人が死に悪人が死に幕が降り
選挙ゲームファミコンゲームより劣り

島根県 新家 完司

遍路笠ひとに語れぬことがある
草萌えて母のいのちを吸いにけり

今治市 越智 一水

親孝行する送金に消費税
造船の灯が消えミカンの色が消え

豊中市 みき わきみ

滄桑か人が不足でドル余る
叱られたことない男女育ち行く

豊中市 田中正 坊

三色旗美しきかな巴里祭
憧れのビーナスに逢う巴里祭

島根県 堀江 正朗
齡をとるだろうに雀同じ声
口惜しさにハイとは言えぬ時もあり

和歌山市 西山 幸

信号を多情多恨だなおもつ
下手に生き下手にたこやき裏返す

十和田市 斉藤 嘉

農業の未来を説くも式辞なり
りんご囃む音と抜けゆく旅疲れ

今治市 月原 宵明

下士官と兵で戦友会つづく
おどしたりなだめたりして酒を酌ぎ

米子市 政岡 日枝子

あまり無理するなと傘をさしかける
貝のから海へせつせと使ひ書く

枚方市 山崎 彩子

日によってうとましくもなる赤いバラ
遠い日の人が叙歎の記事の中

笠岡市 松本 忠三

間に合っています余裕のないくせに
毒舌をたたく人あり可愛くて

米子市 新 正子

ホープだと言われ続けている毛虫
地下街の柱太くて怖くなる

米子市 白根 ふみ

聞く耳は洗浄剤をくぐらせる
童謡を確かにうたう孫のまえ

米子市 川上 より子

夏立ちて山は戦う息づかい
山も樹も濡れて念いを深くする

米子市 林 荒介

茨木市 堀 良江
まがい仏仕立下しのみどり召し
涙出るうちはまだまだ耐えられる

高槻市 川島 颯云児

花ことば純愛とあり苗を買った
富田林市 藤田 泰子

つなれた犬に安らぐものあり
唐津市 浜本 ちよ

パトロンと言われて猫も気を使い
出雲市 板垣 夢酔

どの字にもサンズイ偏がほしくなる
吹田市 栗谷 春子

化かされてあげますうちの狸には
今治市 矢野 佳雲

名を成してから声高な反戦記
寝屋川市 堀江 光子

病み臥して鬼も仏も夢に見る
大阪市 山北 三三三

花林檎墨絵のように白く暮れ
青森市 工藤 甲吉

点滴のポトリポトリと勇気づけ
島根県 堀江 芳子

向き揃え五百羅漢を置いた罪
神戸市 岩田 信義

無神論ですが聖母の絵に打たれ
弘前市 波多野 五楽庵

とほけてはいるが作戦練つてある
和歌山市 山川 克子

ロボットに武士道までは教えない
米子市 小西 雄々

和歌山市 堀畑 靖子

寂しくてロボットの胸錆びている

無用の用がありそで花の山へ行く
倉吉市 渡 辺 菩 句

体重計ビツクリ箱のように振れ
広島市 中 村 要

さよならと言つてしまった立ちくらみ
鳥取市 小 谷 美 っ 千

過疎の村郵便ポストだけ赤い
和歌山市 古久保 和 子

殺人記事見ても見せても驚かぬ
和歌山市 福 本 英 子

人生とは今日一日のことである
羽咋市 三 宅 ろ 亭

自問自答鍋の底まで光らせる
岡山県 福 原 悦 子

ポケットに持っているのは花の種
田辺市 染 道 佳 明

思い出を小出しに喰うや老猫の
名古屋市 藤 井 高 子

夜の風風鈴だって淋しいよ
唐津市 福 島 紀 一

家出でもするのか大きな旅靴
藤井寺市 武 部 敦 子

てのひらに掬うと透けてくる未練
高槻市 河 瀬 芳 子

床の間に水の情けを知らぬ壺
東京都 吉 川 一 郎

憩いには緑茶の方が向くお年
藤井寺市 福 元 稔

僕の背中の坂を上つて来て欲しい
和歌山市 神 平 狂 虎

残り火の暖かかうう筈がない
鳥根県 松 本 文 子

人生の炎と入江ぬけてゆく
和歌山市 松 原 寿 子

遠い日も山も光を増していく
和歌山市 後 藤 正 子

白一色に落ける絵具を探してる
和歌山市 田 中 輝 子

菖蒲という名の懐石や初夏の席
尼崎市 春 城 年 代

札付きを除くと組閣に足りぬ駒
唐津市 久 保 正 敏

大臣を辞めても殺されはしない
鳥取県 土 橋 螢

ヒロインはわたし観ているのもわたし
河内長野市 中 井 雪 梢

個性ある絵だから先生手をつけず
廿日市市 森 川 抜 智

日曜大工ジュース半分温うなり
松原市 小 池 し げ お

春風と環状線をひと巡り
唐津市 山 口 高 明

サウスポーカ俺は飲み手のサウスポーだ
倉吉市 田 中 八 太 朗

敵役化けをおとせばほとけ顔
大阪市 尾 崎 黄 紅

香典の分だけ飲もう通夜の酒
黒石市 相 馬 一 花

掃除機が鴨の嘴真似ている
平田市 久 家 代 仕 男

倉吉市 奥 谷 弘 朗

貴方のは冒険でなく無茶という
箕面市 椎 江 清 芳

土を出た卑弥呼眩しく目を閉じる
大阪市 神 夏 磯 典 子

息抜きに来て分らないピカソの絵
唐津市 山 門 幸 夫

茜雲みんなが征った基地に立ち
海南市 三 宅 保 州

鉢巻を締めると急に曲がれない
松江市 豊 田 巡 歩

政治不信淋しく落ちてゆく夕陽
河内長野市 岡 崎 実

愚どんとは自分のことだ鏡みる
堺市 近 藤 豊 子

さくらんぼ遺されし子の逞しさ
姫路市 都 里 遊 光

試されたと知つたは穴へ落ちてから
高知県 赤 川 菊 野

はずまない毬を抱いて孤にこもる
大阪市 西 森 花 村

ゴミ捨てる人が嫌いな仁王さん
仙台市 川 村 映 輝

石女に夫が贈るカーネーション
羽曳野市 田 中 隆 二

一合の酒ではすまぬ妻の留守
米子市 沢 田 千 春

切れかけた縄よりなおし生きつづけ
寝屋川市 江 口 度

解答を棒読みにしてさつと消え
藤井寺市 高 田 美 代 子

外は雨せめて王女になった夢

大阪市 松尾 柳右子
すみれ草摘めば夢二に近くなり
堺市 高橋 千万子

人事異動大人のいじめかも知れず

守口市 羽原 静歩
風青き五月の船の旅がよし

弘前市 相馬 銀波
明日からの靴だけ磨く日曜日

鳴門市 八木 芳水
何もかも承知で妻の掌で踊る

西宮市 瀬尾 六郎太
好き嫌い蝙蝠たちもあるのやろ

町田市 竹内 紫緒
浮世絵展亡母の髪型まで進む

姫路市 大原 葉香
女母そして妻です三面鏡

兵庫県 倉垣 恵美
いい友が斜めにわたしを光らせる

鳥取県 乾 喜与志
赤い鳥わたしの胸に巣をつくる

堺市 神原 文
冗談が過ぎるどうやら酔ってます

島根県 西村 早苗
花粉症山のあなたからかしら

和泉市 岡井 やすお
器持つ仕種で人の器知れ

今治市 渡辺 伊津志
葉桜にもみくちやにされ陽が沈む

伊丹市 榎谷 寿馬
一円がハガキの旅情ブチ壊し

伊丹市 猪原 石莊

大正を侵しはじめた余命表

西宮市 松本 一郎
苦手意識捨てよ捨てよと負けている

大阪市 北 勝美
かくれんぼ本気で探す慌てよう

米子市 小村 てい子
よく切れる頭だ油断召さるなよ

吹田市 井上 照子
罪負うたピエロの芸が冴えてくる

流山市 神田 治
正論ではあるがロマンに欠ける妻

豊中市 三宅 つえ子
方舟の三等席で脈がない

鳥取県 さえき やえ
演出が下手でお酒の世話になる

和歌山市 森 茜
都合よい返事のなかで疼くもの

大阪市 塩田 新一郎
消しすぎて何も残らぬ消去法

熊本県 立道 善太郎
三途の川渡りそこねて惚け候

八尾市 向井 しづ子
いきどおり秘めて仕事のはかどる日

唐津市 筒井 朴竜
突き放す煩惱一つ鐘を撞く

岡山県 矢内 寿恵子
奴隷浄土の旅はどのあたり

相生市 中塚 礎石
太陽へ娼婦の胸をちらつかせ

鳥取市 西尾 呼風
入院に孫三行の手紙くれ

大阪市 島路 太郎
愛すると言えりのも古稀過ぎだから

岡山県 千原 理恵
葬送に桜舞う心に氷雨降る

唐津市 仁部 四郎
マンシヨンの大で隣へ吠えてみせ

広島県 田村 新造
十円を入れて眺めた城の町

摂津市 木下 道子
うんうんと聞いて策略わっている

鳥取市 美田 旋風
変わり身の早いこなしも芸のうち

岡山県 福原 辰江
振り出しへ何回もどった女坂

豊中市 桜塚三丁目13-15
投句先 千560 橘高薫風宛(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題「願い」 選者 森中恵美子

締切 7月10日

(ハガキに三句以内)

投句先

大阪市中央区馬場町3-43

NHK大阪放送局

ラジオセンター 川柳係

発表

7月30日(日)ラジオ第一放送

午前11時5分から

尚香のむ

小出智子選

風邪引いた人に風邪引きいたわれ

大阪市 津守 柳伸

ダイエツトするに悪友多すぎる

包帯で庇うと傷が甘えだす

和歌山市 桜井 千秀

思い出を手繰ると曆重くなる

水が澄むまでの手紙を泣きながら

米子市 政岡日枝子

苦しんだ果だよ 赤いバラにする

絹擦れを思い出すとき優しくなる

おだてにも乗ろうよ酒を酌ぎこぼす

紙バックいつしか情にうとくなる

ボーカーフェイス皺を恐れているらしい

肩の荷がまだ降ろせない母の背な

悲しむと仏が叱る声がする

連れ添った訳を今更聞かれても

一言の温みに開く花である

はずみにしても少し多弁なバラの朱

コーヒーが言わでもがなを喋らせる

火傷したことは誰にも言っていない

花鉄バラを切るとて求めしや

豆炊いて女の月日など憶う

富田林市 藤田 泰子
兵庫県 倉垣 恵美
名古屋市 藤井 高子ハンカチを振る母がいる遠い景
わたしも花を盗んでしまうかもしれぬ米子市 林 瑞枝
松原市 佐藤 藤子

倅せと思う私は上を見ず

声をかけあってトンネルからぬける

さっぱりと片付けたので探しもの

大根の辛さもからし消費税

捨て兼ねる母の匂いの古簾簞

快復期 話相手を放さない

残り火が文の伏字を読み漁る

礼状を出して余韻がふつきれる

タイマーのない人生もまた楽し

笑顔しかうかばぬ人の計報きく

間違いは小川に添って越えてから

おもい立って小豆煮ている五月闇

気位の高い牡丹が床に合う

みどりの日緑の帯をしめてみる

次の世で逢う約束をして訣れ

余命表花菜の黄が眩しすぎ

定退のあいつにすっかり者の妻

不安定な椅子に熱っぽく座る

したたかに生き青春の中にいる

子孝行どうぞ裏切り受けぬよう

手になじむコーヒーカップから割れる

本音しか聴いてくれない糸電話

くちびるにうた シナリオが完成す

米子市 林 瑞枝
松原市 佐藤 藤子
堺市 高橋千万里
米子市 青戸 田鶴
大阪市 本間満津子
大阪市 古川美津枝
姫路市 中塚 遊峰
堺市 山本 半銭
兵庫県 東浦 砥代
大阪市 神夏磯典子
姫路市 桜沢あかり
和歌山市 湯浅 遊光
尼崎市 春城 年代
米子市 服部 朗子
鳥取市 前田 一枝
岡山県 松本 元江
羽曳野市 吉川 寿美
寝屋川市 岸野あやめ
和歌山市 後藤 正子
八尾市 宮西 弥生
和歌山市 田中 みね
香川県 上藤 多織
和歌山市 西山 幸
米子市 新 正子

涙つとふいに溢れる物干場

お別れの手紙をわかりやすく書く

優しさよお前にいつも負けている

火に油注いで燃えぬ筈がない

ご無沙汰が里のしきいを高くする

機微にふれときどき易の灯を借りる

散る時の美学これから身に付ける

賞められて喜ぶ若いなと思う

悪戯はへのへのもへの傘の中

懐の深さ知ってるカタツムリ

水子塚 紙のかぶとを載せてやる

弱点を晒して会える花の下

瀬戸の橋たたいて渡る嬉しさよ

渡らばやあの吊り橋に謎がある

確かめたふりして謎をかけてくる

冗談のように男が本音吐く

消したくはない愛の灯を手で囲う

ふる里の風に誘われ墓まいり

葉桜になって静かな日に戻り

まっすぐに燃えた無位無冠のけむり

図書館へ行って漫画を読んでき

手を貸してもらい味方と思ひ込み

湯上りのように出てくる試着室

雑談で少し充電して帰る

方便の嘘へ花弁開き出す

島根県 松本 文子

鳥取県 西原 艶子

堺市 板野 美子

藤井寺市 高田美代子

和歌山市 前田 美子

大阪市 町田 達子

宝塚市 丸山よし津

西宮市 奥田みつ子

和歌山市 砂山千枝子

寝屋川市 稲葉 冬葉

和歌山市 古久保和子

和歌山市 福本 英子

大阪市 山田 妙子

岡山県 千原 理恵

和歌山市 松原 寿子

大阪市 板東 倫子

和歌山市 堀畑 靖子

大阪市 鈴木 節子

茨木市 堀 良江

富田林市 池 森子

大阪市 稲本 凡子

米子市 石垣 花子

堺市 近藤 豊子

和歌山市 内芝登志代

和歌山市 坂部紀久子

虚勢張って淋しい影をカバーする

愚痴をみな詰める風呂敷さがしとく

度忘れを友の記憶にたすけられ

咲き競う花に埋れてみたくなる

バーゲンの波へわたしも乗っている

お茶漬で労るグルメ疲れの胃

ご近所に匂を配ってよい距離に

風車水子地蔵で舞い続け

庭の隅 春待つ虫の身づくろい

豌豆の捨ててに惜しい皮の嵩

お土産はテレホンカードに決めている

幸せと思えばそれで心満つ

和歌山市 山口三千子

岡山県 富坂 志重

高槻市 小松 良

鳥取市 小谷美つ千

田辺市 染道 佳明

和歌山市 山川 克子

米子市 金山 夕子

岡山市 塩見美代子

岡山県 福原 悦子

吹田市 茂見よ志子

大阪市 松尾柳石子

箕面市 坪田 紅葉

ゴシックの一句目。同病相哀れむと言うものだが、軽いユー

モアさへ感じられ、一見平凡なようだが雑詠ならではの味わい

のある句。二句目。さりげなく表現して言いたいことを言って

澄ましている。その通り黙っているのが一番よい。三句目。さ

ぞや美しく咲いたであらうバラを。バラを切る時の女ごころ。

四句目。「豆を煮る」と言うのはよく下五に使われるが、この

句の場合は少し違う。豆を炊くことによつて月日を感じるという。

辛い時代を生きた人の真心だと思ふ。五句目。「遠い景」の表

現にお母さまのことを何時も案じている作者の心が凝縮され、

より効果的にまとめられた。六句目。この句のような恐れを抱

かせる程花は美しい。この句の場合の「かもしれぬ」は常套的

ではないと受け取りました。

投句先 〒544 大阪市生野区勝山南1-18-10

小出 智子（ハガキに3句）

句評リレー

四月号から

越村 枯梢

西口 いわゑ

越智 一水

河内 天笑

のワンカットであれば、軽い表現の方が受け入れられやすい。

妻が嫉くほどの火薬になるマツチ

波多野 五葉庵

枯梢 ポケットに忘れた花名刺のたかが一枚が、大爆発を起すことらしい。が、自称謹厳な私には、その裏が分からない。次の句評をお待ちしたい。

いわゑ マツチの火薬と言えば、大爆発を起すほどのものではなく、奥様がこんがりと嫉いてくれるのを期待して楽しんでおられる。私にはそのような気がします。

一水 句材としては、家庭でよくある一こまでおもしろいのだが、この句の場合、火薬というオーバーな表現をことさら使うよりほかに、表現の仕方はあると思う。

天笑 火薬をこの句のいのちとするならば嫉くくらいでは収まらず、別れるとこまで行ってほしいし、妻が嫉く程度なら火薬ではなく、起爆薬くらいなところでしょう。

枯梢 火薬について異論が多い。火薬は少しオーバーだが、川柳には誇張もある程度、必要ではなからうか。私は火薬を買う。

いわゑ 作者はきつと愛妻家でいらっしや

自己嫌悪 蛇口をいっばいにひねる

奥田 みつ子

枯梢 焦躁と腹立たしさ、どうしたらよいか自分の気持の持って行き所のない感じを水道の水に託している。欲を言うならば、自己嫌悪を初めに持ってきて結論を出してしまうのではなく、他に方法はなかったでしょうか。結論を頭につけてくることの良否は、後者にお任せしたい。

いわゑ 結論云々の問題では私も考えてしまいましたが、下五の方がすこし趣きがあるような気がします。

一水 主婦の、その腹立たしさまではわかるが、蛇口からの表現が小走りになり、受け取る感銘はない。

天笑 自己嫌悪を下五にまわすと、ますます説明くさくなるし、このままでも頭でっかち。上五が「ストレス発散」くらいなら、すこし明るさがあるのだが。

枯梢 推敲が嫌いな私の句は、いつも消化不良に泣いている。人様の句を熟読してから私の作句姿勢も変えねばならぬと思う。

いわゑ 蛇口をいっばいにひねる。同じ主婦として、痛いほどよく分かります。

一水 自己嫌悪を下五にと言う意見が出されているが、この句の場合、下五に持つてくれば、表現を変えねばならないと思う。したがって、天笑さんが言われている「ストレス発散」を強める意味からは、上五ですばり自己矛盾の感情を出した方が女性らしい。

天笑 抽象名詞はそれ自身に重さがあり、まして上四文字となればなお重い。日常生活

る。嫉いなり嫉かれたり、円満な家庭の楽しい句だと思ひます。

一水 この句、火薬とマツチの関連をもつ少し、推敲してはしかった。「句は書く前に七たび舌にころがし、書いてからも三たび、読み返すべきである」という三太郎の言葉を思い出した。

天笑 マツチそれ自身が火薬だから重複した感があり、マツチが、名刺とかハガキならば一句成立というところだ。

菜の花が蜂に吸わせている不倫

土居 耕 花

枯梢 不倫万歳の世相を諷刺したものだろう。花にも蜂にも昔から不倫があつたのかなと思ふ。中七は、少し直截的すぎないか。

花は移り気蝶にも蜂にも身を委ね 枯梢

いわゑ 菜の花と蜂の不倫、私には到底、思ひつかない構想です。蝶や蜂が花の蜜を吸うのは普通と思ひ込んでいましたから。

一水 菜の花、それは庶民に親しまれ、愛されている花である。その花のイメージに、現代世相の不潔さを作者がキャッチして、句にしたのであろうか。

天笑 不倫という名詞止めがいかにも印象

強く、菜の花の持つ温かきとはずいぶんかけ離れた、いわば思い切った言葉だと思ひます。「吸われている」ではなく、「吸わせている」と見たところに不倫があつたのかも知れません。

枯梢 ああ、私もある時は花になりたい。蝶になりたい。

いわゑ 未熟な私には、とても勉強させていただける句です。

一水 天笑さんが言われているとおり、不倫という名詞止めでこの句は仕立て上げられている。このような技法を私はあまり好まないが、耕花さんの作風として受けとめ、魅力ある作品だ。

天笑 句集『奴風』でやんやの喝采を浴びられた耕花さんは、自分の作品から得た満足感よりも、柳友からもらう温もりを強調して他界されました。ご冥福をお祈りいたします。

持てる国 大臣の使い捨て

都 倉 求 芽

枯梢 持てる国日本の持っているものは金だと思つていたら、大臣もそうであつた。使ひ捨てにできる大臣がたんといふ。そして、次の大臣の志望者もわんざかいる。何とだら

しない持てる国か。定型逸脱ではあるが、この句はこれでよいと思ふ。時事川柳として可

いわゑ 大臣の使い捨てとは正に言い得ていると感心しました。枯梢さんの言われるとおり、定型でないのが効いていると思ひます。

一水 この句、あと二字はしい気もしますが、このままでも通らぬことはない。

天笑 どうしても定型にできなければ仕方のないことですが、折角の痛烈な諷刺もこれでは物足りません。推敲不足と思ひます。

枯梢 時事川柳として可と言いましたが、その後、数日のうちに情勢は逆転、総理大臣になり手がなくて困つています。私は伊東総務会長に拍手を贈ります。この稿が誌上に出る頃はどうにも変つていくか。時事を取り入れる場合のむずかしさを痛感します。

いわゑ 私も時事川柳のむずかしさを痛感いたします。

一水 この句を時事川柳と言われているが、時事川柳にも永久に残る作品と一時的な作品とがある。この句の場合もう少し推敲すれば、世の矛盾を諷刺した作品となろう。作りっぱなしの作品でなく、「わが句はわが子、愛して誇るな」の言葉を思ひ出してほしい。

天笑 「持てる」は「ちやほやされる」という意味で、金を持つているとか、人材が豊

立った。

枯梢 第一回目の評で、私の言いたいことは尽きている。

いわゑ 前回では生意気なことを言いましたが、やはり男の人は大変。特に私の場合は、一人では食べて行けません。

一水 天笑さんが言われているように、安易に「男の中に」の表現をもって来たところに句の弱みがある。このままでは「ああそうですか」の平凡句に過ぎない。もう少し句のリズム感を考えてほしい。

天笑 私自身も安易に「男」とした句で、失敗した句がいくつかあります。男の良さを強調したり讃えたりする場合は別として、この句の男も適当ではないと思われま

鈴ふって自分の心正すよう

内 芝 登志代

枯梢 あまりにも素直に書き下した句である。そして下五の正すようは、少し弱々しすぎないか。これも教訓的の川柳かと思ふ。

いわゑ 枯梢さんの言われるように、素直に自分をもう一度確かめておられる。

一水 教訓的の川柳、結構なのだが、せっかく自分の思想を素直に詠ったのだから、下五

で締めてはしなかった。

天笑 悪汁を絞り切ったならこんな静かな句になるんでしょか。否、もっと積極的に憎まれ口を叩いてください。

枯梢 作者はとてもお人柄の良い、素直な心の持ち主と拝察します。どんとぶつかってものはね返すような句がほしいと思います。

いわゑ とてもやさしい登志代さんの気持が表れていると思います。

一水 鈴と自分の心を結びつけた着想はよかったのだが、鈴と心と正すの素直な表現が三つも重なったため、あまりにも句が弱々しいものになってしまった。

天笑 登志代さんのことだから教訓の句というよりは、自戒の句と考えたいが、それなら下五のあとに「にしています」とつけ足しの要するところが欠点です。

鈴ふってときどき自分振りかえる
なら無理なく表わせたのですが。アレアレ、また添削ぐせが出してしまった。ゴメンナサイ。

川柳塔用箋（二冊二〇〇円）

送料が変わりました。

一冊二五〇円・二冊三六〇円

※数量がまとまれば、「ゆうパック」にする方が大分、お得です。

第20回奈良新聞川柳大会

日時 7月16日（日）

会場 奈良県立公会堂（奈良市春日野町）
奈良バス春日大仏前下車東へ300米

お話し 番傘川柳本社主幹 磯野いさむ氏

席題 1題 歌藤 一麦選

宿題 「呼ぶ」 宮口 笛生選

「橋」 平井 綾女選

「幸せ」 石岡 正司選

「味」 杉森 節子選

「越える」 伊藤 定子選

「自由吟」 河合 渡口選

各題2句 午前11時半締切

会費 2500円（昼食・発表誌呈）

〈出席申込〉 7月9日まで 電〇七四二二〇一三三番

〒630 奈良市三条町 奈良新聞社
文化事業部川柳係

〈欠席投句〉 7月10日必着・500円

〒630 奈良市北市中町71 杉野睦朗宛

主催 奈良新聞社
後援 奈良県川柳連盟

砂

山口高明選

腕白のズボンが砂を持ち帰り
 気の弱い男と砂場に書いてある
 キヤパンのように砂道蟻がゆく
 童心に帰り素足で白砂踏む
 風紋に砂のいのちが蘇る
 磁石持ち砂鉄集めた幼い日
 カーフするたびにダンブの砂が落ち
 脳裏からあの砂山は消えはせぬ
 十字架を背負い砂丘で見る夕陽
 砂風呂に夫婦揃って晒し首
 蟻地獄仏のおわす寺の庭
 砂になら思い切り書く胸の内
 得意満面砂上の城と気付かない
 風紋の昨日は昨日今日は今日
 妻が描く絵の砂浜は踏ませまい
 砂風呂へ不倫の汗を吸いとられ
 砂時計別れの時を刻みでる
 人情のオアシスもある都市砂漠
 星の砂捨てて少女は脱皮する
 砂遊びチルチルミチルの声がする
 砂嚙んでからは素直な目になれぬ
 玉砂利をふめば雑念いつか消え

兼治郎 志重 喬水 朴竜 多賀子 鉄治 宵明 次男 美代子 白峰 勝美 正子 高子 満津子 早苗 可住 杏村 重人 あやめ 純子 美代子 テル

かなづちが砂に裸をみせてくる
 砂を噛む思いの中で数珠を繰る
 酸欠の街でかぶった砂ほこり
 砂かけて猫にも猫のエチケット
 砂袋補欠の分も詰めている
 耳鳴りへ届くは砂のひとり言
 音もなく砂の崩れてゆく不安
 砂ほこりの中に座します石仏
 玉砂利を歩めば心洗われる
 風に乗る砂の命の失語症
 砂ズリを噛めば上司のうめき声
 足元の砂が知ってる父の汗
 一握の砂の重みよ男の子
 熱砂ともいうべきほどの恋ならん
 背信の日から狂った砂時計

義美 典子 寿恵子 克子 笑風 玉恵 三五島 サワ子 智加恵 文子 緑良 四郎 螢 諷云児 史風 幸夫 正子 雄々 清芳 生流 高夫 秀峰 天 都市砂漠 独居老人 今日も死す 軸 玉砂利の鳥居くぐれぬ喪に服す

風鈴

丸山よし津選

逢うて来たはてり風鈴やわらげる
 風鈴も忘れず出した衣替え
 風鈴が二三度鳴って日が落ちる
 ネクタイを解き風鈴と対話する
 風鈴を鳴らして逃げる風もある
 風鈴が話途切れたところで鳴り
 庭に水打って風鈴客を待つ
 民宿の古い風鈴夏が好き
 シヤラシヤラと外国製で鳴る風鈴
 風鈴にささやく風はみどり色
 風鈴の金魚は夢で鳥になる
 風鈴に哀愁がある山の宿
 風鈴のもてなし受ける夏座敷
 風鈴の音色去年のままで鳴り
 風鈴屋昼の団地は留守の窓
 血圧も安定風鈴心地よい
 風鈴を吊るせば空も夏の色
 呼び声は風が手伝う風鈴屋
 風鈴の音も聞えぬ四面楚歌
 風鈴へ明日に伸びる夢を抱く
 風鈴をつるした亡父の影を追う
 風鈴が露地にも涼風誘い込む

砥代 重人 寿恵子 豊 螢 芳仙 公一 きみ子 博子 可住 正子 狸村 寿美 鉄治 正敏 秀峰 あやめ 不二 勝美 雄々 艶子 多賀子

集 路 集

風鈴の音色ミシンにかき消され 兼治郎
 風鈴を吊って帰省子待つてゐる 多織
 風鈴を賞でてゐる夏の肋骨 佳雲
 風鈴の音色も初夏の彩で鳴る テル
 風鈴はそのまま空家の軒にゆれ 元江
 ワンルーム風鈴あすの夢つづる 三五島
 会心の一句風鈴の風に乗り 枯梢
 父逝きて半音低く鳴る風鈴 信義
 風鈴の音が台風呼んでゐる 花村
 風と来て風鈴売りは風と消え 清芳
 無風の中で風鈴が鳴るミステリー 達造
 風鈴の音色涼しい南部鉄 新造
 風鈴を一つふやした夫婦旅 四郎
 風鈴にあえぎが洩れる土用丑 白光子
 風鈴に夜業の疲れ癒やされる 諷云児
 風鈴がしきりに鳴っている孤独 緑良
 風鈴の音色ピールも冷え加減 高子
 クーラーオフ風鈴の音を聞いている 正坊
 胸襟を開くと風鈴音が冴え 白漢子
 風鈴へ風が出て来た冷奴 雀踊子
 口論へ風鈴そつと割って入り 文
 風鈴も止んで夕餉に母は立ち 大柏
 天
 風鈴がびたりと止んで猫が起き しげお
 軸
 去年の風鈴も待つ里帰り

蹴る

吉岡美房選

竹藪の鞆をボンと蹴ってみる 倫子
 撲られて蹴られて今日の土俵入り 是美
 蹴った男の意地が悔んでゐる 多賀子
 蹴った方の足に痛みが残る悔い 三和
 消費税蹴られてばかりいる定め 和子
 石蹴って少し悪夢へ背を向ける 狸村
 石を蹴る力あるからばけてない 有一朗
 どう出るか敵の手を見る軽い蹴り 純子
 蹴とはしてやりたい夜叉の面を持つ 健歩
 石を蹴る心の整理つかぬまま 清柳
 おいしい話一度は蹴って思案する 砥代
 地を蹴って岩場に挑む命綱 文
 気の利いた返事浮ばず石を蹴る 鉄治
 式早くせよと胎児が腹を蹴り 遊光
 再婚の話を蹴って子に生きる 諷云児
 蹴飛ばした石に短気を論される 克子
 厳かに京は蹴鞠という行事 温子
 折角の誘いを蹴った孤独感 正敏
 あと足で蹴られた疵は忘れない 一枝
 蹴られてもじつとこらえる石になる 芳仙
 一蹴に付されたブランまた温め 明水
 酔うてゐるらしい電柱蹴っている

昇進を蹴って地元で母と住み 秀峰
 ボール蹴る子に真青な空がある 失名
 胎教に應えて軽く蹴ってくる 宵明
 妥協案蹴って反骨独り寝る 雄々
 蹴りそこなつた石にクスクス笑われる 雀踊子
 蹴り上げた鞆にもあつた自己主張 よし津
 蹴られたら蹴られたとこで生きた 重人
 蹴って立つた男の猿芝居 正坊
 思い切り蹴られた石は貝になる 保州
 蹴る布団子らに掛けつ夜が明ける 呼風
 石蹴りがもう見られない路地の奥 ただし
 空缶を蹴って急がぬランドセル 白漢子
 車椅子大地を蹴った日の記憶 公一
 蹴り易いところの石が又蹴られ 佳雲
 蹴る足を持たぬダルマににらまれる 可住
 和を乱す話きっぱり蹴っておく 達子
 底辺の石は蹴られることはかり 明水
 雑談の中で無心を蹴っている 軒太楼
 やけくそで蹴った小石が波紋呼ぶ 艶子
 小石蹴る恨みがそれで晴れるなら 洛醉
 押し売りを蹴った啖阿がふるえて 智加恵
 地
 泣きどころ少しはずして蹴る情 敬
 天
 アドリブで蹴った小石が跳ねかえり 美代子
 軸
 月蹴って宇宙に浮かぶ画が届く

初歩教室

題一草

阿萬萬的

「草」と言う題に対して皆さんの目は同じところに集まってしまうのでしょうか。草や花にはいろいろあって私たちの心にも感ずるものがあるはずなのに。

雑草は雑草なりの花を持ち
雑草の意地が花咲くこともある
草木はただ一筋に今を生きて

雑草と言われている花は咲き
雑草でさえ花もあり実も結ぶ
私たちの住居も都市化され、雑草もまた、

夏の日も舗道の裂け目草青く
アスファルトの割れ目は草の怒りかも
石畳の継ぎ目つき目に草萌える

(雑草の根性舗装路割って出る)
雑草も雑草として持つ誇り
多織

しかし、雑草雑草と言われても、それぞれに
ペンペン草何故嫌われる昔から
章久

(嫌われながらもペンペン草は実を結ぶ)

庭の草場所を選んで生きたる知恵
生き残る術を授かる草を知り
(生き残る術知っている草の種)
草花も順を忘れぬ処生術
(それなりに咲くとき知っている野草)
箱植の草花にもある落ちこぼれ
元近鉄の鈴木投手ではないが、草魂の句も
草を刈るふと草魂を考える
草むしり草の命をふと思つ
自画像に草魂と書く堅い椅子
だが雑草の花もよくよく見れば
草植えて小さい花をいとおしむ
緑濃き雑草一本残し置く
(可憐な花雑草一本抜き残し)
よく見れば雑草可愛い花をつけ
(よく見ればユキノシタにもこんな花)
キッチンのコップへ野草鍵つ子が
雑草のミニ花可愛らしく生け
(つくしんぼコップに生けてる一人ッ娘)
草にはお母さんの匂いもだぶって来て
泣き草の一枚は欲しい草木染
露草の手描き片身の亡母の帯
(露草の手描き片身の亡母の帯)
また、草餅にも母の香りがするものです
草餅の塩の利いたは母の味
帰省する娘に母のよもぎ餅

一枝 信義 太一郎 信一 呼風 遊光 多織 章久
信義 美恵子 英美子 サワ子 蜜拙 静子 つえ子 しづ子 すみれ 圭坊 保夫 登代 遊峰 繁男 かつみ

草餅に詰め込んでくる母の味
月詣り父の土産は草だんご
入歯でも草餅同じ味がする
(入歯にも草餅故郷の味がする)
古里を懐かしくさせるものに草笛がある。
草笛を吹く少年に夢がある
川堤少年の吹く草の笛
(草笛で少年がゆく土堤の道)
畔道で聞えて来そう草笛が
(草笛へふる里の空澄んでいた)
また、草に寝れば
大の字に寝て草いきれ故郷しのぶ
草原に寝転んで空と話す
(草に寝て空と話せば雲白く)
生きている遠いあの青春草いきれ
果てしない草原に今日の愚痴捨てに
(草に寝て人間小さきものを知る)
草相撲・草野球も思い出の一つです
草角力小さくたって僕の勝ち
賞品は負けても貰える草相撲
走りつつ野次に答える草野球
この頃は山野草も別の意味で見直されて
山野草葉と言う名で見直され
古希の坂菜葉ブック買いに行く
草原に自然食品たんとり
村おこし野草料理に舌鼓

芳水 数彦 艶子 清柳 圭坊 美子 良三 和子 円女 富恵 正子 宏安 雅子 三津江 金吾 ひさ子 由梨

飽食に野草味わう変な会 照子

(グルメとか野草味わう会も出来)

草取りと簡単に言うが、とても大変です。ね。

都会から嫁ぎ草取りから習い 菊枝

疎開して草取りをした田舎あり 登代

田草取る亡母の汗に励まされ 美代子

(田草取る亡母のことなど思いつ)

眼鏡かけて庭の草取る雨上り 光子

息抜きに草と語れる古希の風 芙美子

老いてなお草取り出来る有難さ 喜与志

(老いてなお草取り出来る陽のぬく味) 真一

草引きや地獄耳も知らん顔

(世にうとい顔で草引く地獄耳)

だが、雑草の伸びるにまかせている所も

雑草が生えて値上げを待つ空地 とく子

地価高値雑草何にも知らぬふり 好笑

(地価高騰雑草何にも知らず伸び)

線路にまで雑草生きる無人駅 保夫

減反の誰はばかりず雑草生き 勝美

(大手振るように休耕田の草)

さて草が伸びると言えは、こんな草も

古屋敷草茫々と落ち椿 秀香

屋根の草背伸びしている五月晴れ 由梨

草屋根も消えてふる里風化する

白川郷草葺き屋根が日に映えて 宏安

(白川郷草葺き屋根が世に耐えて)

伸び盛る草の中なる石仏 しんじ

人恋し草に埋もれる石仏 サワ子

ここでいつものようにもろもろの句を

雑草を知らないバイオの野菜出来 三津江

(雑草を知らずにバイオの茄子胡瓜)

今日も事胡つぶされた草黙ってる 志重

(事故現場草も惨めに雨に濡れ)

牛の餌青草刈り終え汗を拭く ミツエ

(牧草を刈り終え夕陽に手を合わす)

捨てられた子猫に温い草ぶとん 結美

(捨てられた子猫についてたイノコツチ)

万歩計草の緑にはずむ足 一枝

(万歩計草の緑に励まされ)

草花と語り生き甲斐求めあい 織

(草に寝て男の生き甲斐ふと思つ)

名も知らぬ草はつねんと月あかり 敬

雑草も味ある風情月の夜 良三

(雑草にも秋の風情の月の影)

れんげ畑草の対話が聞こえそう 好笑

(草の囁き聞こえて来そうなれんげ畑)

ひと時の憂さ忘れさすおじ草 三千子

(おじ草の素直さ何かを教えられ)

雑草にも名がある陛下に教えられ 露芳

(畏くも陛下名付けの草もあり)

名園の雑草遠慮がちに伸び 艶子

芹なすないつか来た道母を恋つ 太一郎

立ちつくしてアワタチ草は明日を待つ 敬

マンシヨンに摘み草の場所占領され 喜代子

遠足のみやげに土筆とたんぽぽと 方子

花束を作るにかかせぬかすみ草 義

無にかえる草には草の役があり 小鹿

明日離村する草焼きが目に沁みて 多織

姦しきは野党雑草症候群 治

民草を風下にして火をつける 隆雄

三代を生きて民草まだ枯れず 時弘

亡夫の墓抜き取る草も愛しい 志華子

野草の会去年の花に会いに行き 一乗

ジョイナーの爪では草はむしれない 菊枝

浮き草も地に足つける夢を見る 三千子

以上ですが、もつと紫陽花、薔、コスモス

などと心をひく草花がたくさんあるはずなの

に、何故か味気ない感じがしました。もつと

視野を広く持って作句して頂きたい。ではま

た来月。

◇

題「月」 7月10日締切(9月号発表)

ハガキに5句以内

「味覚」 8月10日締切(10月号発表)

「地味」 9月10日締切(11月号発表)

「湯豆腐」 10月10日締切(12月号発表)

宛先 〒598 泉佐野市中庄一〇八一—九九

阿萬 萬的

水煙抄

秀句鑑賞

―前月号から―

小島蘭幸

カルチャーにあやつられてる余命表

舟渡杏花

世はまさにカルチャー教室ブームである。一人でいくつも受講してたりするので、書道・絵画・料理・ジャズダンス等々…。どの講座も大盛況である。自分に合ったものを一つか二つ選べば良いものを。そして結局、どれも中途半端に終わってしまうのだ。

仏飯を大盛りにして亡夫の忌

森脇和子

ほのぼのとしてあたたかい作品である。働きの者で、とてもやさしかったお父さん…。

クイズ解答無職五十と定めてある

高杉千歩

クイズも当たるところには当たるもので、毎月一回から二回、賞品が届く家庭もあるそう。うだ。もつとも、それだけハガキを出しているのだけれど…。この句、無職五十と定めているところがとても面白い。『無職五十』と

ことなく哀愁を感じてはいないか。ちなみに私の妻は「主婦三十」と定めております。

出遅れも気にはならない葱ぼうず

秋元 てる

畑一面の葱ぼうずは壮観ですらある。出遅れていた何本かも、時期がくるとそれなりに形になって来た。葱ぼうずは雑草の如く、強くたくましい。それに比べて人間社会の何とひ弱なノもつとのびのび、もつとゆったり生きられないものか。

肩パット強い男を待っている

上田 柳影

『肩パット』―私はすぐにアメリカンフットボールの選手を想像してしまう。これはもう凄い女性である。この句は外見だけではなく、強くなった女性の心理をも見事に表出している。強い男は少なくなっている。

もどり寒昼飼は餅を焼いている

木村 たけし

別にとりたててこれというものはないので、何故かこの句に惹かれる。年老いた男がひとり餅を焼いている姿を想像してみるだけでも楽しくなってくるではないか。『もどり寒』が効いている。

ほほえみをキャッシュカードで引き出そう

今本 早笛

キャッシュカードで現金がヌツと出てくると思わずにつこりしてしまふ。自分が一生懸命働いたお金でもそうだけど、両親が働いて

働いて入金してくれたお金だとおさらである。学生が都会で一人生活していると、なんとなく心細いものだ。ましてや財布がなくなる、不安で不安でたまらなくなることがある。そんな時のキャッシュカードで『ほほえみを引き出そう』とはうまくいったものだ。

日曜は遊び呆けてから眠る

太田 幸枝

仕事をやる時はやる。遊ぶ時は何もかも忘れて遊ぶ―ここまで割り切れる人は、案外少ないのではないか。脱帽するほかない。

嫁はんの留守に雨漏り直しとく

乾 隆風

「今やろうと思っていたのに」というコマ―シヤルがあつたのを覚えていた。以前から気にはなっていたのだが、あれをやれ、これやれと言われると、どうもやる気がなくなってしまうのが世の亭主族である。この句は、『嫁はんの留守』に一大決心をして雨漏りを直してしまつたのである。とてもさわやかであり、妻とせず、嫁はん。としたところが微笑ましいではないか。

楽しくておちよ二二杯で酔っちゃった

新 正子

とても素直で心地よい作品である。二十歳そこそこの茶目つ気のある可愛い女性を想像して、ニンマリしてしまふ私である。『おちよ二二杯』がピッタリと決まっついて動かない。

■ずいそう

函館の寿司

寺尾 俊 平

函館の駅から表に出ると、冷たい風が吹いていて、やはり北国だということをおぼわされる。岡山を発つときから「函館で寿司を食べような」と山妻と約束していたので、かすかな記憶の中の函館の街を歩きはじめた。

夫婦は、札幌川柳社の斉藤大雄さんの巧妙な誘いにのって、札幌の川柳大会に参加しようとする途中であった、東京・盛岡・青森と陸路をとったのは、私の高所恐怖症のためとできるだけ窓の景色をたのしみながら旅をしたよつという夫婦の計画であり、大國主命みたいな大きな旅行鞆を背負うての旅であった。

記憶というものは不確かなものであつて、先年札幌からの帰りに、薫風さんと食べた寿司屋がどうしてもみつからない。その私の記憶と反対の方向に一軒の寿司屋がみえたと、「あそこがいい」と煮えきらない私に大まかな妥協を強要した。実は彼女スイミングスク

ールで足を少し疲労させていることもあつてとにかく早く座りたかつたのである。

店は小綺麗でカウンターのガラスの箱の中の魚貝も新鮮なように見えたので、やや安心しながら「北海道の魚と貝をにぎつてくれたらありがたい」と注文した。子供の頃覚えていた北海道の海産物ニシン・サケ・タラ・イカ・コンブを思い出したのがなんとなくつかしなかつた。「いかそうめんはある」とたずねると「あれは六月からでして」との返事がくる。なんでも食べさせようとする風潮の強い瀬戸内海あたりの店と比較して、正直な寿司屋など妙な感心しながら寿司をほおばると、とにかくつまかつた。これは、まさに正直な味だ。などと妙なところで納得しながら頼ばつた。かなりご機嫌な気分と正比例するかなりの料金を払って店を出た。山妻は「わりあいとおいしかつたね」と話しかけてきた。このわりあいということばはかなり抽象的な莫としたものであるけれども、満足をしたという山妻の常用語である。風の強い函館の街の真昼であつた。

「お客さん、函館の寿司はなんてたつて、なんとかなにに限りません。駅前なんかにはいい店はありやしません。とにかくネタが違います」と寿司屋を出て拾つたタクシーの運転

手のことばである。夫婦は若干気押されたような感じで「へえ、そんなに違うかね」以下まるで石松三十石船に似たやりとりをしなから、今度ここへ来たならその店にしようなど考えていた。結局、その夜の観光までさせられてしまつた。

湯の川温泉に一泊した朝、函館駅に向うタクシーの中で「函館でいちばんうまい寿司屋は」と興味半分に聞いたところ、またまた魅力ある寿司屋が登場し、「ここに限る」というのである。山妻がそばでくすりとした。つまり、自分が食べて納得した店が函館いちばんということのようで、必ずしも間違つてはいないが、彼らは函館全部の寿司屋の寿司を食つてのことではないと理解したからであらう。このあたり、それぞれに味がある川柳の分野によく似ていると思つた。川柳もまず、その味に納得したところから、哀楽がはじまるのだと考えたからである。

長い列車の旅の終点札幌に到着、宿舎のグランドホテルの雑踏の中に佇つた夫婦の前に微笑した斉藤大雄さんが現れた。そのとき、ふいつと函館の運転手ふたりのことを思い出した。「札幌では寿司は食べん方がよろしい」。よし、寿司は食べんぞ。大雄さんの握手した掌は意外に温かつた。

■ずいそう

土 用

布 施 幸 子

『一粒万倍日』という喜ばしい日があるかと思えば、『不成就日』という嫌な日もある。

『天赦日』というありがたい日がある一方で、『三隣亡』という恐ろしい日もある。一年三百六十五日ほどの日も二十四時間ながら、平等ではないらしい。

ね、うし、とら、う……の十二支や、大安仏滅といった六曜星には多少のなじみがあるが、^{じゅうごう}十干、九星、十二直、二十八宿などとは縁がうすい。けれど一日一日にそれらがまわりついていて、良し悪しを左右している——と考えるのが易学である。

「思い立ったが大吉日」とはシロウトの見方で、易者側から見ればとんでもない。まずは易断所へ足とお金を運んで、大吉日を選んでもらい、しかるのちに着手せよ、とPRする。日を選ぶことを選日といって、高島易断所の

暦を開いてみると、古くから伝わる特殊な日の吉凶について説明が載っている。

先の一粒万倍日は、一粒の種が万倍にふえる吉日。ただし、借金すれば利息も増えて苦しむことになる。

不成就日は、障りがあつて悪結果をまねく凶日。

天赦日は、天の恵みで万事に良き日。

三隣亡は、棟上げなどに大凶で、自宅のみならず隣近所まで災難にあつたとされている。

ほかに八専、天一天上、十方暮などが書かれていて、縁起をかつぐ人は大変だなあと思つたが、そんな中でわりあい聞きなれた『土用』の文字が目についた。

土用とは立春、立夏、立秋、立冬の前の約十八日間をいい、平成元年の土用の入りは、一月十七日、四月十七日、七月二十日、十月二十日となっている。

「土を用いる」と書くのに、この期間中は、例外日をのぞいて動土、土木工事が大凶とされている。また万事に要注意の時期だという。

「土用ゴボウは死にゴボウ」といって、春の土用にゴボウの種まきを禁じたり、冬の土用には口紅を買って口中の荒れを予防したり、夏の土用波に注意を促したり、土用坊主というお化けが土中にかくれているから、庭の草

むしりも危険だなどと、昔から伝えやいましめが残っている。けれど、近ごろは年四回の土用のうち、夏の土用だけが注目され、他は影が薄くなった感がある。

夏の土用のころは、暑さでバテ気味だから、昔から「熱さを以て暑さを制す」お灸のすずめがなされ、熱めの薬風呂も活躍した。逆に冷たい水につかつて暑さを制す法として水浴も盛んだった。京都の神社では、境内の川に足をひたす御手洗祭の神事があり、また南瓜やキュウリを供養して厄封じする寺もある。

土用餅は力がつき、とくにヨモギ餅はハラワタになると信じる地方もある。それよりあんころが一番、と売り出す店もあるが、なんといつても土用といえは「うしの日」のうなぎが浮かんでくる。うしの日にうなぎを食べる習わしは、「江戸時代のレオナルド・ダ・ビンチ」といわれる平賀源内がつくりだしたものらしい。

西洋物理学、電気、絵画、医学、薬学、文学となんでもこいの天才だった源内は、門弟を殺して獄死し、謎を残しているが、ふだんは気さくで町人たちに親しまれていたという。仲よしだったうなぎ屋の恭助が、店の不景気を嘆くのを聞いて、「まかせておきな」と桧板に「土用うしの日」と大書して店の前に置か

せた。とたんに客がおしよせて、てんでこ舞いの忙しさとなり、以来、「土用うしの日は即ちうなぎの日である」と決まってしまったのだから大したPRである。

もっとも、うなぎの栄養価は万葉の昔から評価されていて、万葉集に大伴家持の

石麻呂に吾物申す夏瘦せに

よしといふ物ぞむなぎ漁り食せ

という作があり、これまた土用うしの日の宣伝に役買っている(むなぎはうなぎのこと)。

この歌は『瘦人をあざけり笑う歌二首』のうちの一首で、他の

瘦すも瘦すも生けらばあらむを

将たや将たむなぎを漁ると河に流るなである。

「石麻呂くん、ずいぶん夏瘦せしたなあ。

うなぎでもとってきて食べたらどうや。けど

まあ、瘦せっぽちでも命に別条ないんやから

うなぎとりに行って川でおぼれたらあかん

で」とかかっている。石麻呂くんは友だち

だったのだろうか? かかっている家持自身

も瘦せっぽちだったといわれているからおも

しろい。

この歌でもわかるが、昔はうなぎ屋の出前をたのんだり、スーパードで特売うなぎを買ってきたりするわけにいかず、めいめいが川へ

とりにいって料理した。

瀬田から宇治へかけての清流は、江戸時代

まで特上うなぎを泳がせていたというが、今

では天然ものはめったに口に入らなくなった。

たいいてい養殖もので、アメリカ、ヨーロッパ、

ニュージーナからも輸入されている。家持が

現代人なら、さだめし違った一首で、世相を

風刺したことだろう。

暑中見舞広告募集

★個人 一口二、〇〇〇円

(氏名・住所・電話番号を掲載)

★団体 次の四種といたします。

① 1/3頁 六、〇〇〇円

② 半頁 九、〇〇〇円

③ 2/3頁 一二、〇〇〇円

④ 一頁 一八、〇〇〇円

▼原稿第2次締切 7月5日(必着)

原稿と掲載料を左記へご送付ください。

〒581 八尾市中田二一三〇二

高杉 鬼遊方

川柳塔社会計室

第20回川上三太郎賞 表彰
第15回白石朝太郎賞

第40回柳都川柳大会

とき 7月23日(日) 10時~17時

ところ 新潟厚生年金会館
(新潟市南万代町)

会費 一五〇〇円(記念品呈)

宿題(各題2句)

「他人」

「棒」

「踏む」

「層」

「五分前」

「誘う」

「雑詠」

特別課題 出席者のみ

「満ちる」

ディスカッション

速川美竹/原飛伝広/菅原孝之助/長谷川冬樹

席題 当日3題発表・正午締切

※欠席投句・500円同封で7月10日

までに〒956 新潟局私書箱15号

柳都川柳社へ

主催 柳都川柳社

■ ずいそう

真田 祭

西 尾 栗

五月五日のこどもの日の朝から、僕は妻とこんな会話をして九度山町へ出かけた。

「これから九度山町へ行ってくる！」

「九度山町ってどこでっか」

地理音痴の妻の返事である。

「高野山の麓にある町で、真田左衛門尉幸村の閑居したところだ」

「知り合いてもおますんのかいな。それとも、兵隊友達でも」

「いやいや、そんなものはないが、僕が十二、三歳の頃からの友達がいるんだ」

「へー。初耳だな」

「そうだ。思い出せば僕が小学四、五年頃からの友達がいるんだ。猿飛佐助君、霧隠才藏君、由利謙之助君、三好清海入道君というなつかしい友達がいるんだ。僕の近頃は、その友達のことを書いた立川文庫を雨緑で、日の暮れるまで、夕御飯にせかされ、親に叱ら

れ叱られ読んだ幼な友達なんだ」

「ナント物好きない！」

「もの好きは初めからわかつている。オマエと連れ添ったのからして物好きだ」

「一人で行かばって大丈夫だっか」

「大丈夫だけど、心配なら従いてこいや」

「今日は予定があつて従いてゆけまへん」

「じゃ、行ってくるぞ」

とカメラ一つもって家をとにした。JR大和路線を新今宮で乗り換えて、九度山駅へ着いたのが十一時四十分だった。

駅のホームは、六文銭（正しくは六連銭）の家紋の入った旗ざしものが林立して、真田祭と書いた提灯がぶら下り、今日の祭をもり上げていた。

駅から七〇〇米ときいた真田庵は、紀の川の上流とおぼしき深い溪谷の川を二つ渡ってやや登り坂を上って行くと、とうもろこしの焼ける匂い、蛸焼の店、鯛焼の店、氷菓子の店が軒をつらねていた。庵の中では、数十人の僧が白装束で般若心経を大声であげていた。僕は人につき当りながら史料館へ入った。いずこも同じ鎧、兜、刀、槍等を一巡して境内に出た。九度山町には喫茶店はあるのだろうか、今日は祭で店は閉められている様子で、喫茶もままならぬ町になっていた。丁度、昼にな

ったから、町の商工会の婦人会が出している店に入って柿の葉寿司をお昼をすませ、真田紐のバンドと六文銭の入った土鈴を買った。

「お客さんはどちらから来られました」

「信州は戸隠山からきました。私のルーツは戸沢白雲齋でござってな。常々、幸村閑居の地を一度訪ねたいと思っておりますが、今日はその思いを果しました」と頗る白髯をしこいた。「まあまあ、それはそれは、お遠い所を」と婦人会は仰山に驚いてくれたが、白髯の僕を、かの有名な白雲齋の子孫と思ってくれたらどうか。果して白雲齋という名前を知っていたらどうか。

久しぶりに少年に返った思いしていると、急にあたりが騒がしくなった。真田祭のイベント、少年武者行列が小学校から出発して町を練って真田庵へ到着したざわめきだった。それで僕も人垣の中に入った。第一陣は六文銭の旗ざしもの隊、つづいて鉄砲隊、次は薙刀隊で薄化粧した少女が薙刀を小脇にかいこんで、仲々勇ましい格好で二十名程列を組んでいた。

続いてひとときわ高く大きな幟が現われて、そこには真田幸村と書いてあった。高学年の中学生らしいのが、キンキラキンの陣羽織を着てシズシズと歩いてきた。また、槍隊、薙

刀隊とつづいて、忍者姿の軽快ないでたちの猿飛佐助と霧隠才蔵が前後してつづいた。次は坊主頭の髪をきた三好清海入道と伊三入道がやってきた。穴山小助が陣羽織姿で現れるかと思うと、鎖鎌をもった由利鎌之助が来る。笈十蔵がやってくる。十勇士の前には一段と大きな幟が、それぞれの名前が書いてあった。久しぶりに返った少年の気分では今一度、十勇士の名前を繰ってみた。がどうしても、

■句集紹介

千原理恵『風ぐるま』

田中正坊

大原川柳社と私との出会いは、今は亡き友の白石文衛君を通じてだが、去る五十八年、土居耕花さんの喜寿建碑に出席して以来、いくたびとなく『武蔵の里』を訪れ、小林妻子さんはじめ多くの方たちと顔なじみとなり、その中の一人に千原理恵さんがおられた。

最近では四月四日、耕花さんのお葬式に行ったが、その前夜、大原山荘でみなさんと耕

九勇士しかない。猿飛佐助、霧隠才蔵、由利鎌之助、穴山小助、三好清海入道、三好伊三入道、笈十蔵、根津甚八、海野六郎。

どうしてだろう。少年時代、とくとくと十勇士の名を考えずに言えたのに、今一人がどうしても思い出せない。真田大助だったろうか。いや、大助は幸村の息子だからそれは入らない。帰りに本屋へ寄って、真田十勇士という文庫本を五冊買って調べたが、右の九勇

花さんの思い出話に花が咲いた。そして理恵さんから聞くともなしに、ご自身の生いたちや今日までの道のりをうかがい、そのけなげさに心を打たれた。

今回、その耕花さんが病床で序文を書き、発刊を心待ちにしておられた理恵さんの川柳句集『風ぐるま』が刊行された。装丁は紙装ではあるが、耕花さんの『やつこ風』と並べると、表紙も見返しも全く同じ色で、まるで親子のような感じがする。

耕花さんの『はじめに』では、晩婚の伴せ抱いて薄化粧

などの句を紹介しながら、『流浪のエンゼル』理恵さんの人柄にふれ、巻末には武村一美さん、松本元江さんが柳友の面影をスケッチしているのもあたたかい。文衛―耕花の良

士しか載っていない。たしか望月某という名をかすかに憶えているが、それが果して残りの一勇士であるかどうか疑問である。ご存知の方は是非教えてください。

陽はまだ高かったが、七〇〇米ある道を駆けと急いだ。道端に真田の抜け穴という木札があつて、鉄の扉が固くしまっていた。手には柏餅の土産をぶらさげていた。帰って寝床の中で指を何回も繰ったり、文庫本をくっていた。

き伝統につながる、大原川柳社の中心メンバーとしての理恵さんの今後のご精進を期待し、句集の中からいくつかの句を抜粋して、鑑賞に代えさせていただく。

風ぐるまからから淋しくまわります
ちっぽけな私も残す足の跡
我が机わが文才を知りつくす
シナリオにこんな余生があつたとは

人生の戦友ひとり居る安堵

逃げ腰へ聞いてますかと妻の声

追われても蝶には逃げる空がある

この秋も柿はおんなじ色で熟れ

恩愛を計る目盛りが見つからぬ

北風になにも語らぬ風ぐるま

小出智子句集

『路の臺』の雅味

橘 高 薫 風

小出智子さんの句集『路の臺』が出版された。まことに嬉しい。早春、路の臺をはじめて見つけた心のときめきのようである。

大正末期生まれの智子さんご自身に、私は路の臺を感じる。明治の梅の枯淡格式の風はなく、昭和の薔薇・洋蘭の華美に流れてもいない。作品にしてからが、路の臺の味で、刻んで雅香匂い立つかと思えば、煮て苦味が沁み透る。味わう人の舌に応じて深みが深まって行く思いのするものばかりである。

智子さんは中尾藻介氏の句風を範とされ、指標として精進された。私には、若いうちは片意地張って、右に左に揺れ動き、頭をぶつけて進むべきで、淡々とした境地に馴れると老成してしまいはせぬかと思つたのだったが、それは杞憂にすぎなかった。静と見える航跡

の、目に見えず、人の推し量れぬ処の波濤を見事に乗り切られた。

乗り切られたといえは、健康に関する事にも触れた。高野山での追悼川柳大会に於ける、憔悴した体に鞭打たれての責任感の強さには、舌を巻いた。終了後、入院手術。多くの仲間はずれに快癒を祈った。親身に祈った人が多かった。私は、今、智子さんの人に対する心の有り様を述べようとしているのである。それは、どの句にも心があることを言おうとしているのだ。だから皆が祈つたのであった。

風花の舞う日を父の忌と憶え

どうしても描けない母の笑い顔

夫より包容力のあるポスト

風船の脆さを知らぬ息子たち

一番星わたしに孫が出来ました

家族を詠った作である。悔恨慰撫の手紙類を無限にバクバク食べてくれるポストには、人間の包容力など到底、及びもつかない。それを言つて実は大きい夫の包容力に触れる手法など、藻介流の真髄ではなからうか。

草を踏む緋の絨毯にまさりけり

あじさい寺の冬を想像せぬことだ

失敗でふくらんでゆく雪だるま

心配は海苔が湿つたほどのこと

南座のあたりが好きな女たち

磨きのかかった感性のよく發揮された句。

青路と緋の絨毯の対照から、南座のあたりの味までの感性の幅に注目したい。

正直な鏡へあかんべえをする

可愛らしい鼠に描いてやりましよう

トイレから出てきた顔は正直な

夫婦にも黄門さんの来る時間

大根よお前何処から来たのかい

ユーモアにくるんだ味で、ホツとさせてくれる句たち。むずかしい言葉を使う作者どもよ、と私は言われていそうな気がする。

最後に、身にしみる好きな句を列記する。

七十はさほどに遠きことならず

にぎりめし母の祈りのかたちして

失った指輪のように忘れよう

うちの酒が美味いなどと言いはじめ

風の音みんな一人で死ぬんだな

人生には、親子があり、夫婦があり、師弟

があり、友人があり、さまざまな綫を織りな

して行く。それが川柳に綴られる。

近年、頓に増えた女性作者のあこがれの灯

の一つとして、路の臺をより香り高く育てて

頂きたい。

来年の早春、路の臺を見つけたら、一番に智子さんに贈りたいと思わせる句集である。

新家完司川柳集

『平成元年』

江原とみお

こぎれ屋です鋸屋ではありません 完司
指呼の距離に住み、心通い合う一番身近な
柳友新家完司は、文房具店「こぎれ屋」の
主人である。私はひそかに「こぎれ屋完司」
と呼んでいる。勿論、口外したことはないが、
小説「居酒屋兆治」の人物像と相似るものを
感じ、心のなかでそう呼んでいる。

大掻きで泳いだ距離をふりかえる

川柳作家新家完司が、昭和の時代の何時を
出発点にしたかは詳らかには知らない。が、
新しい年号を一つの節として、再びの飛躍を
目指していることは確かだ。句集『平成元年』
の発刊を我が事以上に嬉しく思うと共に、収
められた一七九句から、生活詩人「新家完司」
の人物像を汲みとって戴けたら、それに優る

倅せはない。

お天気で良かったですねお葬式
あんまり空が青いので遅刻しました
なまけものの血が脈脈と受けつがれ
さくらめーるに悲しいことが書いてある
金持ちは好きではないが金は好き

完司川柳は言葉に飾りが無い。素朴過ぎる
くらい飾らない。だから鑑賞する側に抵抗な
く溶けこんでくる。いわゆる消化が速いので
ある。従って皮相的な見方で鑑賞すると、底
にひそむ思いを掴み損ってしまふ。しかし、
彼の川柳は俗に言う「私にも写せます」的な
川柳とは全く異質な味をもっている。呟くよ
うな口調の訴えこそ、新家完司の持ち味であ
り、意識しない技巧とも言えようか。

哀しみを集めているのですか層屋さん
わたくしに似たダンボール折りたたむ
いつ死ぬかわからないから先にめし
阿呆のまねしているではありません
つますいたところがちようど酒屋さん
気の合う犬と雨だれを見えています
妻に傘さしかけるのも久しぶり
恥ずかしくて死者はきつちり目を瞑る

その日から気まづくなつた御忠告
無実です証提なんかはないけれど

特別に抜粋した訳ではないが、完司色のよ
く出ている句を並べてみた。脚色ぬきでその
ままに表現された川柳は、お世辞の言えぬ(言
いたくても言えない)完司の心の投影だから
である。「一生に一句でもよい。人の心に染
みついて消えぬ句を」――誰に話すともなく彼
は呟く。

句集『平成元年』新家完司の生きる記録の
小冊子が、川柳を愛する諸兄の掌に温かく開
かれることを願って止まぬ。

小出智子句集

『路の臺』発刊記念句会

とき 8月6日(日)午後1時
ところ なにわ会館3F信貴の間
兼題と選者

「帽 子」	西出 楓葉選
「一 日」	谷垣 史好選
「玄 関」	金井 文秋選
「美味しい」	中尾 藻介選
「昔」	西尾 栞選

主催 川柳塔社

本社 六 月 旬 会

六月七日(水)午後六時

メンズフアッションセンター

本社旬会はここ数か月来、常連組にまじつてニューフェイスが見かけられるが、今回は初出席者の句が抜けると司会の合図で拍手が起るというほほえましい光景がみられた。

おはなしは板尾岳人氏で、いつもどおりウンチクを傾けた。水。アラカルト。初出席は、米田寛(寢屋川市)門谷たすこ(西宮市)川見絹子(大阪市)坪田紅葉(箕面市)人見翠記(姫路市)の各氏と多彩。今月の月間賞は宮崎シマ子氏(八尾市)が獲得。

(進行―天笑)(受付―みつ子・いわゑ)(記録―射月芳・月子)(清記―楓楽)

出席者―笛生・鬼遊・楓云児・白漢子・寿美・恭昌・凡九郎・眉水・千秀・博泉・武庫坊・年代・幸・狸村・佳秋・庸佑・楓楽・芳子・勝美・藤子・柳伸・萬的・杜的・小林英子・作二郎・英壬子・安藤寿美子・紫香・美智子・太茂津・重人・しげお・公一・勝晴・

出席者―笛生・鬼遊・楓云児・白漢子・寿美・恭昌・凡九郎・眉水・千秀・博泉・武庫坊・年代・幸・狸村・佳秋・庸佑・楓楽・芳子・勝美・藤子・柳伸・萬的・杜的・小林英子・作二郎・英壬子・安藤寿美子・紫香・美智子・太茂津・重人・しげお・公一・勝晴・

悦郎・いわゑ・みつ子・柳宏子・光代・柳影栗・寛・悟郎・三男・シマ子・正坊・一二三福本英子・仙吉・すすむ・利武・洋敏・房子たす子・文秋・絹子・形水・白洋・隆二・文子・あいき・ダン吉・喜風・薫風・章・章久・女・智子・美房・三郎・元紀・八斗・冬葉・東雲・頂留子・弥生・昭子・美代子・度小路・美幸・英一・射月芳・憲太郎・天笑・月子・雀踊子・寿子・岳人・花村・吸江・吐来・紅葉・翠記

席題「泡」

大路美幸選

金魚の泡 女ひそひそ話する
消えてゆく泡にわたしの命見る
石磯の泡で昨日が消えますか
どうせ泡デモ一思案してほしい
石けんの泡と仲よく主婦の朝
やがて消える泡でもけじめつけている
泡吹いて金魚楽しい会話する
ドロククの泡醗酵し訓示する
欲望の果てはあぶくとなって消え
しゃぼんの泡で罪が流せるものですか
晴天に泡弾み出す洗濯機
泡噴った話の味を聞いてみる
言葉なく渚の泡を見る二人
お手前の泡立ち心をうつしている
青年の出張へビールの泡が飛ぶ
ぶつぷつと泡が怒っている流れ
泡食った話売ってる蚤の市

凡九郎 幸 萬的 光代 太茂津 いわゑ 白漢子 仙吉 天笑 年代 小林英子 文秋 みつ子 仙吉 女 丹吉 武庫坊

席題「替える」

安藤寿美子選

石磯の泡に明日の夢が浮く
青臭い議論を口に泡たてて
すぐ泡になる内閣ができました
泡一つ金魚の私語をききもらす
泡消えたジョッキの横で父眠る
弁解をすれどぬぐえぬ口の泡
すみっこでひと泡ふかす爪をとき
うたかたのいのちが光るシャボン玉
彼は戦地に泡のような恋でした
泡になるさだめの中で抱く絆
泡のように消えた水子が胸に棲む
狂ったか泡を食ったか人民軍
若い希望の泡とも思ふ民主主義
モンローがあぶくの中で呼んでいる
石けんの泡が知ってる汗まみれ

紫香 射月芳 白洋 寿美 美代子 利武 頂留子 正坊 たす子 寿子 年代 太茂津 太茂津 英一 美幸 元紀 雀踊子 昭子 元紀 あいき 八斗 柳宏子 三男 杜的 千秀 悦郎 勝美

百八十度替えるつもり赤を着る
鍵替えて女自立を考える

投手交替監督の胃が又痛む

宿替えの日までは庭木に水をやる

北極の地図を女が書き替える

模様替えばかりしている倦怠期

土壇場で流れを替える策を練る

聴えない振りで話題を替えてくる

マイホーム生命保険を引き替える

衣替えおんなの腕が陽を弾く

表替えてはる祝い事らしい

十字路で風向き替える策を練る

肩書が付いて眼鏡のふちも替える

出口のない私の地図を書き替える

絵具皿替えてあしたの絵を描こう

軍隊の力で替えてはなりません

取替えてくれそうもないにぎりめし

替玉が背伸びをしたい時がある

どの面に替えても自分捨てられず

衣替えさせたら風邪を引いてくる

替えられぬ妻がお米をといでいる

実印は眼鏡を替えて押してやる

夏の絵に替えると夏がときめきぬ

替玉の方が立派という噂

着衣のマハを裸に替える夏が来た

一日に三べん面を取り替える

兼題「惜しい」

吉川寿美選

年代 佳秋 武庫坊 絹子 佳秋 月子 諷云児 狸村 射月芳 寿美 美代子 諷云児 萬的女 楓幸 智子 白溪子 いわゑ 博泉 たず子 しげお 作二郎 正坊 白洋 射月芳 寿美子

わずかでも出すのは惜しい消費税
女去る惜しい時間を置き去りに
敵ながら惜しいあいつの良いキップ
口惜しさは時間通りにパスが出る
冷蔵庫の隅でひからびていた銘菓
捨ててきた会社が息を吹きかえす
これからの惜しい場面が目覚める
ガラクタに惜しい心が積んである
惜しまれて去ったあとから光る椅子
補聴器が惜しい話だけ聞き洩らす
ぼろいこと出来るバツにしがみつき
惜敗も褒めてやりたい選手達
惜しまれるうちに花道探しとく
惜しかった惜しかったなと励まされ
人の手に渡ると急に惜しくなり
粗大ゴミ惜しい気持をズバと切る
惜しいとは言わずくじけるなと恩師
敵方に惜しい男がついている
敵方に回せば惜しいのみつぶり
片方の欠けたカフスが捨てられぬ
失った若さを惜しむ鏡掛け
惜しみない拍手へ幕がしまらない
お決めの尾灯点滅する情け
名を惜しむばかりにけじめつけかねる
日が沈む寸時惜しんで種をまく
一房の葡萄に惜しい日が走る
惜しみなくあたえる愛に子が溺れ
天安門広場のいのち還らない
ゆく春を惜しんで回る風見鶏

正坊 太茂津 勝晴 一二三 寿美子 博泉 狸村 文秋 柳影 悟郎 天笑 東雲 智子 射月芳 三男 八斗 榎 しろ 荒介 みつ子 早苗 柳伸 恭昌 昭子 元紀 あいき 鬼遊 恭昌

小出智子川柳句集

『路の臺』

序文 西尾 栗

★『川柳塔』の「茴香の花」

選者の小出智子氏が二十余年にわたる作品を一冊にまとめた

★四百五十一句が年代別に収録された珠玉の句集をぜひ、あなたの書架に

体裁 A5判・一六八頁(美装)

頒価 二、〇〇〇円

申込 川柳塔社事務所または

小出智子氏へ

発行所 川柳塔社

なにもかもしやべつてしまひ惜しくなる

惜別の思い半分胃を取られ

青春を惜しむ夕陽が美しい

惜敗の無念益知つてゐる

アラームに惜しいところを起される

女には過ぎた気骨を惜しがられ

貧農の背にも夕焼惜しみなく

別れを惜しむ駅の時計は正確で

価値観の違い惜しいと思わぬ

革命に惜しい命を削られる

竹光で惜しい男を切つておく

千手観音どの掌も慈悲を惜しみなく

兼題「地図」 吉岡美房選

地図通り歩くと葬儀の家に着く

致死量が地球をおおう未来地図

世渡りの地図に迷路が伏せてある

裏街道ばかり載つてゐる地図がある

地図にない穴場をいつも捜してゐる

半日を地図と遊んだ旅心

料理屋の地図をルンペン知り尽し

母の地図私も同じ道を通る

これからは自分で歩く地図を持つ

銃声の止む日を知らぬ世界地図

地図赤く塗れる日祈る北の島

青い地図広げ息子の夢を聞く

地輪の目へ古代の地図は青かった

俯瞰図へ自分の位置を赤く塗る

亡父の地図残してくれた羅針盤

美智子

小路

藤子

重人

房子

女子

女子

雀踊子

庸佑

元紀

しげお

寿美

白溪子

正坊

芳子

英一

洋敏

勝美

天笑

昭子

隆二

章

福本英子

月子

萬的

三男

昭子

地図にない島をさがしている若さ

反骨を残した儘の父の地図

おぼろげな記憶をたどる孤児の地図

十年先の地図を知つてゐる黒いカネ

汚れない地図をここに持つてゐる

遺跡には古代の地図が埋めてある

銀座の地図に恋を灯したことがある

七転び地図を何度も書き直す

近道をした人生が狂い出す

また橋を書き足している父の地図

わが地図の行く末を問う蒙の馬

私の地図に少ない持ち時間

雑兵の高さで描く未来地図

地図にない橋だが渡る事にする

白い地図ばかり集めて病んでゐる

トイレまであと何キロと道路地図

飽食も飢餓も同居させざる地図

つまずきを糧に父の地図を書く

父の地図歩いて父の痛みを知る

政界地図に白いペンキを塗つてやる

四季の花いつも咲かせて母の地図

子に残す地図は近道など付けず

停年へネクタイ捨てる地図を書く

古い地図亡父のケルンを知つてゐる

迷いからさめて夫婦の地図を抱く

幕僚の地図に傷つく鳩が棲む

より添つて歩くとき軽靴の音

兼題「歩く」 宮口笛生選

博泉

しげお

正坊

天笑

狸村

狸村

作二郎

いわゑ

月子

藤子

瑞枝

重人

諷云児

白溪子

岳人

寛

福本英子

諷云児

諷云児

芳子

藤子

光代

博泉

月子

美房

幸

人妻と歩く通りが明るすぎ

孫に手をひかれ歩幅うろたえる

足枷が取れて勢いづく歩幅

もう少し歩こう別れがつかないから

回り道月が私を歩かせる

歩道橋の上で都会を呼吸する

歩くのが下手で後から追い越され

歩を合はす人のコンパス長すぎる

歩き疲れて自分の影を踏んでいる

ズック靴履くと歩幅は少年に

夫婦して歩き通した亀の意地

歩いた跡が道になるから先を行く

過去のある女と歩く戎橋

妻の後歩いただけのショッピン

歩き疲れて万葉歌碑がやさしくなる

うしろからついて来るのは妻だろう

万歩計それから医者を書く

ゆつくりと歩けるだけに気が疲れ

歩くのが楽しくローカル線を下り

自信をもって歩く誰かについて来る

一歩ずつ足跡だけは残さねば

万歩計手抜きすること嫌ひ抜く

善人を歩き続ける靴の紐

爽やかに歩く母娘の夏まつり

一万歩歩いて二杯飯を食う

とぼと歩いて影に叱られる

人妻と歩けば歩調よく揃う

歩き続けた道をゆつくり振り返る

正坊

勝美

芳子

寿美

女子

絹子

繁男

福本英子

芳子

美幸

悦郎

太茂

正坊

吐来

作二郎

雀踊子

昭子

庸佑

楓楽

紫香

緑良

荒介

重人

幸

栗

螢

いわゑ

吐来

年代

ゆつくりと歩いて亀と話してる
同じ道歩いてるのに運不運
三步先歩く妻でよし平和です
さくらんぼ父と一緒に歩かない
おしゃべりをせぬと歩けぬ女たち
道頓堀おんな髪娘が歩く
長屋王のゆかり歩けば揚げひばり
颯爽と歩いてるのによく転ぶ
ガイドより先を歩いているカメラ
真直ぐに歩けば神に出合う道

兼題「円」

西尾

梁選

一円切手もきつと怒っているだろう
円満な顔で西瓜を食べている
円満な会議私の出番ない
目の届く円周の中で泳がせる
通動園の円がだんだん大きなり
出船入船酒場に円い窓がある
円卓に座ると鳩が好きになる
楕円球ころがすことのおもしろさ
円満な顔で万年平社員
円満な夫婦に風は北を向く
円一つ描いて禅問答にけり
同心円やっぱり蛙の子は蛙
円陣をつくれば戦したくなる
沢庵の円から出られない武蔵
円熟の筆かたくなな息をする
円満なお顔で鬼を棲まわせる
円陣を組む監督の胃が痛い

早苗 隆二 吐来 しげお 眉水 萬的 作二郎 年代 白漢子 笛生
ゲン吉 幸 千秀 房子 天笑 作二郎 幸 度 幸 女 岳人 八斗 正坊 寿美 三男 柳影 芳子 武庫坊

円を描くとんびにもあるひがみ
円満を信条にして父の舟
眉深く円空仏のの思い
竹に花咲いて円を引き直す
一言が刺さり円形脱毛症
円満に話がついて荷が降り
恋掛ける円周率で愛される
円満だった頃をつくづく父の酒
一円を届け巡査と子の会話
円レイトどう変ろうとコップ酒
円満な解決はいつ北の島
円周を走り続けている運命
円満な顔してきついても言い
コンパスを使わぬ円にある温み
妥協する答は楕円形になる
円高も円安もなしうちの葱
描いても描いても丸くならない円を描く
円ばかり描くコンパスの一本気
円盤は青い地球を愛してる
円周率あんたは何でも切り捨てる
同心円がときどき狂う永田町
円満な顔に素うんとよく似合い
大寺の円柱に佇つもの思い

早苗 柳伸 眉水 悦郎 繁男 巡歩 千万里 佳秋 弥生 庸佑 月子 三男 元紀 寿美子 幸 射月芳 英一 寿美子 元紀 シマ子 栗

川柳塔社常任理事会（6月1日）

▽西尾栗叙勲記念川柳大会の運営を協議。入選句数を各題50句とすることなどを決定。
▽8月本社句会を高鷲亜鈍追悼句会とする。

ふれあいの祭典ひょうご 89「川柳祭」作品募集

作品 未発表作品3題・各1句
題と選者（1題5人共選）

「酒」

井床 芦蘭 鳥本 泰
和田 光代 赤松 隆男
「荷」 去来川 去城

かなもりかず枝 中村 東角
濱邊 稲佐嶺 平山 繁夫
「会う」 石井 冬魚

卜部 晴美 坂本 須磨代
春城 武庫坊 藤本 静港子
一、〇〇〇円（定額小為替を作品に同封して下さい）

応募法

各題別に便箋を使用。別紙に住所・氏名・年齢・性別・職業・電話・大会欠付を明記

応募先

〒682 西宮市六湛寺町一〇—
一 西宮市民会館内
西宮文化振興財団「川柳祭係」

締切

8月20日（当日消印有効）
兵庫県知事賞ほか

賞

各題別に抜句数の合計で順位を決め、同点の場合は受付順

選考

柳界展望

集録一敏・武庫坊

ち去ろう

中尾 藻介

満潮のように集っているのです

★はびきの市民川柳会は創立10周年、また、もくせい川柳会が一人合点をして困る

田中 正坊

★和歌山市制百周年記念市民川柳大会は5月28日、和歌山市役所大ホールで出席者二百名を越える盛会で開催され、本社関係で岩本雀踊子・河井庸佑・神平狂虎・西山幸・桜井千秀・後藤正子・森茜の各氏が入賞した

★汐風川柳社（月原宵明会長）主催の長野文庫氏追悼第35回愛媛川柳大会は5月14日、今治市立中央公民館で開催、参加者二一四名、今治市長賞を野村京子氏が獲得された。

★高槻川柳サークル「卯の花」の5周年記念大会が5月17日、一二九名が参加して市民会館で開かれた。大会は古下俊作氏の柳話の後5年間皆出席の黒川紫香・小西多賀子の両氏に記念品を贈り、各題40句という嚴選の披露が行われた。当日の秀句は次のとおり。

五輪へはコーチになつてゆくつもり 中尾 藻介
男をたてる女で丸い絵がうまい 塩谷 幸子
無縁墓地に赤を残して立



★津山市芸術祭・第11回津山川柳大会が6月4日、美作教育会館大ホールで約二百名の出席で盛大に開かれ、本社から西田柳宏子副理事長が選者として参加、大会後、市内を観光、同市出身

▽同人消息△

■東野大八氏は、『柳宴』に5月号から『台湾遊記』を連載している。

■水粉千翁氏（倉敷市・参事）は、二十三年間にわたって主宰してきた『川柳道場』を終刊、もう一つの道（日本画）を余生の支えとすることとなった。

■浜野奇童氏（岡山県・参事、弓削川柳社会長）は、6月4日付『山陽新聞』の文芸面に「交通安全」と題する随想を執筆。

▼訂正▲

6月号の本社句会（81P）の「風の動きを誘うように吹く 礫」は、「風の動きは男を誘うように吹く」の誤りでした。

第7回 夜市川柳大会

とき 7月30日（日）午前10時開場
ところ 堺総合福祉会館 4階大広間
兼題と選者

- | | |
|-------|-------------|
| 「瓶」 | 藤井寺 赤木和子選 |
| 「けじめ」 | 和歌山 牛尾 緑郎選 |
| 「駅」 | 美 祿 安平次 弘道選 |
| 「僅か」 | 西 宮 奥田みつ子選 |
| 「差」 | 米 子 八木千代選 |
| 「並ぶ」 | 東 伯 新家完司選 |
| 「帽子」 | 藤井寺 藤田泰子選 |
| 「ハガキ」 | 竹原 小島蘭幸選 |
| 「扉」 | 和歌山 神平 狂虎選 |
| 「七」 | 米 子 門脇 かずお選 |

席題 なし

各題2句・締切正午・欠席投句拝辞
賞 費 千円（昼食・作品集呈）
呈 賞 各題 天・地・人に賞品

◇ベスト10招待懇親宴あり。
一般参加者は先着15名（会費五〇〇〇円）
準備の都合上、7月20日までに左記へ
ご連絡をお願いします。

〒593 堺市堀上緑町2-9-12

河内 天 笑
電話0722(78)4706
主催 堺 川 柳 会

老地神壇

1人1句、原則として30句以内、各句会ごとに秀句を精選してご投稿ください。
毎月25日締切厳守。
担当・玉置重人

南海川柳会(前月分)

飯田 悦郎報

その波の来る水際で砂の城
鉄砲水山の怒りか崖崩れ
底充びた靴に犯人崩れてる
寒い風落葉に愚痴を言う鴉
葉がくれの遺跡に思ふ桐一葉
滝壺の渦から出られぬ落葉
落葉踏み雄木林に鬱捨て
新緑を仰ぎ落葉は安堵する
使命もう終った落葉の身の軽さ
はちされる若さを秘めている新芽
年輪を一つ刻んでいく新芽
札束を見せると新芽ふいてくる
新しい芽をばしている老舗
新芽まで隣の方が早う伸び
長崎の坂に踏絵が置いてある
坂道と知らずに娘春を追う
坂道を立ち止まらせた文学碑
坂道を一気に登る春の毬
坂道で大きな夢を追っている

しんじ 勝美
ダン吉 信博
しづ子 眉水
志げ子 曲ん手
とみを 憲太郎
恒明 千万子
真砂 柳宏子
甘平 悦郎
重人 柳伸
東雲

樹木にも性質があり横へ伸び
画用紙へ子の性質がよく出てる
気の強いその性質が邪魔をする

川柳藤井寺(前月分)

赤木

和子報

風雪に耐えて地蔵のいい笑顔
鐘一つ思いきりつき春を呼ぶ
水雨降る歴史のささやき御大喪
冬の絵にやがては消える朱をそそぐ
浮き浮きと踵に弾けるラブソング
ライバルもそつとまじないかけている
待ちわびた手紙ポストへ二度三度
ものごとは胸に蓋して円く生き
大物の微笑が迷いを深くする
春彼岸二度目の風邪をひいてます
日々善意小さいこたわりなど捨て
消費税一人歩きの四月馬鹿
病む祝を供養不足のせいにする
風船の飛び方角に春がある
まじないも意見もきかぬ子の背丈
まじないが効いたんでしよう腰上げる
無愛想だけどすてきな人間味
笑う日もあるだろせつせと飲む薬
セツとした髪さうって行く春一番
人の字を書いて飲み込む初舞台
仏の絵書く手で毛虫殺される
盛り塩に庭しつとりと客を待ち
まじないは人に迷惑かけぬよう
新幹線帰る両手に故郷の味
まじないと迷信分ける紙一重

覚然坊 凡子
庸佑 志洋
和美 雅美
治子 繁男
昭子 作秀
吸江 比呂志
美代子 与呂志
末二 祐二
みなる 美房
婦美枝 伴子
紀子 昌子
つやこ 隆
政代 政代
てつお ふゆ
きよし ときお

せせらぎの音も柔らかつくしんば
雛祭り娘より嬉しい親の顔
火消しつば一度は消した愛なのに
ポックリと死ぬるまじない考える
まじないを本気にさせる受験時期
呪いが効いた小指の紙指輪
料亭のかくし味には口を閉す
梅前線共に飛びたい北の空
子の願い叶えてやれた底力
トースター我慢出来ずに飛び上り
海外へ逃げる手苦へ捜査二課
お百度の素足子の夢叶うまで
春一番冬のべールを吹き飛ばす

川柳藤井寺

赤木

和子報

交番に誰が生けたか花二輪
信仰と言うには遠く手を合わせ
罪深いものとは知らずバラは咲く
先生もお手々つないで一年生
時うつり今は恩師の影を踏む
親の仇みたいに毛虫焼き払い
そのうちに呼吸するのに税がいり
加速度がつくから怖い下り坂
住む気より売る気にさせる地価暴騰
チューリップ蝶ネクタイが似合うなら
霞む空人か花かと春盛り
根来寺でみどりに染まる句を拾う
兄ゆずりのランドセルが重くくる
街づくり毛虫の住めぬ植樹して
情報誌杜名小さきリクルート
答弁のうまい議員は箔をつけ

彩 初枝
正枝 敦子
信子 三郎
寿美子 よう女
スミ 好太郎
松亭 秀伸
美佐 志洋
きよし 吸江
三郎 作秀
須美 比呂志
美代子 美代子
ふゆ てつお
とまお 与呂志
末二 祐二
みなる 繁男

五月晴れ燕を連れて渡る風
 夜桜の風に溶けゆくわだかまり
 出産葬儀面倒見よい消費税
 突っ張りの子は先生を斜に見る
 消費税先に笑った方が負け
 大掃除中断させた古写真
 十三回忌弔うより酒の宴
 露天風呂書割り見るよな臙月
 春眠を覚めてこの身のおきどころ
 冬眠の毛虫も平成知ってるか
 蝶の夢毛虫のうちにたち切られ
 紫煙との縁を絶ち切るレントゲン
 信じ切る愛にくもっていたレンズ
 バレットに溶かしてみたい愛の彩
 妥協性あるのに白髪未だ染めず
 先生もよく先生に叱られた人
 四季に咲くバラでありたい人生は
 洗濯機鉤のとれた音で鳴る
 愛こめた糸で通した鉤穴
 花咲けば奈良に劣らぬ道明寺
 合格の便り桜は満開だ
 神さまのげんこつだった事故だろう

川柳後案

井上柳五郎報

和美 雅美 彩房 美枝 伴子 紀子 初枝 つや子 敦子 昌子 隆子 治子 正枝 昭代 政太郎 松亭 美佐 秀女 和子 哲郎 番茶 文平 玉水 照路 拓治

煩惱を捨てて頑固な殻に入る
 空気に消費税なし深呼吸
 たけのこが育つと黄金色になる
 消費税税務署員の顔でとり
 風見鶏春小路で羽根たたむ
 浪人が春の日射が強すぎる
 竹下と心中ご免と若手起つ
 煩惱を海の広さへ捨てて行く
 もう一人の私煩惱捨て切れず
 煩惱があやつっている命綱
 煩惱を捨てて無限の徳をつみ
 煩惱の鎖が解けぬまま老いる
 軽い出会い軽い別れも花の下
 春の野にすこしとばけた彩でいる
 画布いっぱい春の構図を整える
 菜の花が押しくらまんじゅう春の風

川柳東大阪

森下

愛論報

博友 佐加恵 草風 吟平 美智子 鮫狼 方巳 秋月 美代子 美代子 桃風 青銅 義親 柳五郎 金吾 柳宏子 孤舟 美子 喜風 白屯 美津留 百合枝 晋吾 湖風 度章 頂留子 しんじ

食うために女かなしく肩をひく
 磯笛に暮らしを賭ける海の肌
 五百羅漢悲しい顔も二つ三つ
 息殺す怖い民話に虎落笛
 首塚のここのけ悲しい羽が降る
 野仏に祈る素朴な母がゆき

打吹川柳会

奥谷

弘朗報

暖冬の梅林で聞く別離かな
 寄り添った影離れないおぼろ月
 化粧して夫の墓へ逢いにゆく
 澄んでいる人形の瞳に笑われる
 千羽目に近い鶴ほど頼られる
 川上のダムを氣にする花筏

佳句地10選 (前月号から)

恒松町紅報

遠い日の夢が砂丘においてある
 千春 視界からやがては消える子の翼
 結実 いい夢が見たくて枕高くする
 利子 今日あたり悪女になってみたい酒
 美智子 言い訳は聞いてくれない冬の月
 可住 本当の味方が縁の下に居る
 定人 義理一つ果たして白い足袋を干す
 いつを 水道が埋めるとガスが掘る表
 桂子 世に疎く割れた鏡を抱いている
 雀踊子 仕合せにまだ出逢わない影法師

慶三 雅美 勝士 章久 曲ん手 雀踊子 寿美子 典子 雀踊子 妻々 紫映

乳房の魅力恋人あるそうなの
鏡の中の亡母が咎める嘘ひとつ
ライバルに花を持たせた矢尻研ぐ
風の便りに放蕩むすこ無事らしい
逃げながら人の弱さをかみしめる
悔しさにこぼれる涙でのひらに
しんがりに付いて風向きみています
四拾五入一円玉の跳ねる音
急流にさからう石のそばに住む
風便り幼な馴染の奮闘記
山門をくぐると浄土の臭いがし
読み飽きて塔を一巡する日課
首一つ供えて先を急ぎます
悪税に慣れる自分に腹が立ち
予算案通らないのに税は取り
又来いと緑がさそう里帰り
親に似てゴマすり下手な子を案じ
純ちゃんの応援歌にも別れ告げ
ご先祖の頼む嫁です愛さねば
頼られて私に頼るものがない
嫌なことこれから先は目をつむり
「あなた」だけ書いた便りが胸にしむ
酒に背を押されて本音少し出す
野辺送り帰りの靴が重すぎる
父と子と繋ぐ宿命追っている
花の坂息子が繋ぐ手の温み
さわやかな日和が私を招き出す
税金を少し納めた平和論
年金を受ける身分の味気なさ
ガマ口を開けるたんびに税取られ
マネキンの見ている人の視線追い

早苗 紫泉 白峰 巡歩 邦俊 みさ子 ともお 三和 温子 原兆 杜的 梅朗 柳風 善政 節子 みほ 節枝 佳子 幸子 孝恵 仙岳 幸枝 小鹿 いわ子 高代 明治 光明 光聖 菊枝 勝見

下手ながら根気に託し句をひねり
野心捨て婦唱夫随で生きてはる

久世川柳クラブ 二宗 吟平報

幸せは達者で旬の物が食え
うと菜摘み夕餉の渡を豊かにし
五線譜を鳴らした渡る春の風
苦勞など無かった様な花の顔
お喋りがアンテナ立ててやってくる
七十の自慢土と対話の日々がある
鍋蓋になって暮らした五十年
正月下駄抱いて寝た日が懐かしい
筆不精友の便りを風に聞く
孫の声も入れて受話器の賑やかさ
ふり向けば限界こえて来た姿
奥の間へ今日熨斗入れのうれしい日
神様のお告げのあった道まよい
占いを信じ切るのも暮す知恵
占いの大器晩成まだ来ない
占いが当れば離縁もないものを
燃えてきた女占いの前に立ち
手軽てこヒーショッで待ち合わせ
こヒーも冷めて空しい失意の日
こヒーで喉をつるおす春がすみ
こヒーを出す百円を孫に借り
こヒーに砂糖も入れずダイエット
こヒーが絆で愛が実を結び
和服着た女のような梅の花

城北川柳会 神夏磯典子報

川柳で初めて使った消費税
午郎

消費税一円玉の泣き笑い
ホテル街かけて遠道する親娘
明日あると思えば生きる楽しみも
日のたつのが早すぎるようもう四月
若ければ酌み交わしたい花見酒
年金で十円単位の暮し方
根性が勝負角力の分岐点
平成に昭和を残す身りの日
皮下脂肪減って花冷え身にしみる
クレラップしたいあなたの身とこころ
心通わす人に逢いたい花の道
お互いのルールを守るべアを組み
自由席大阪弁がよくしやべり
普段着て手ぶらでとんで来た見舞
雨しずくまともに受けて首すくめ
忍の字に不信の声が雨あられ
タンスからやつと出られた形身分け
同居して嬉し春の四世代
あの人もこの人も連れ昭和逝く
美人薄命もう葉桜になるさだめ
弁解をするなど雨がつきささる
わがままを通した後の孤独感
春日遅々猫がねずみを忘れたたり
妥協なき鏡に老いの薄化粧
帰省して重いふとんに亡母徳ぶ
手袋をつけた握手にだまされぬ

川柳化粧粧 植村客遊子報

お迎えが仲なか来ない紙おむつ
止り木でふと貸しのある顔に会う
用意周到逃げ道までも空けていた
越山

輝子 市郎 よし子 登美子 文子 新一郎 閑石 寿美礼 公一 達子 温子 静子 満津子 秀夫 典子 純子 倫子 テルミ だだし 白峰 静歩 静く 右近 史風

別れあり出会いもあつて春の詩
蹊いた時に体の異常知り
やるだけはやつた己へ言い聞かせ

三幸川柳教室

桜井

急いでる足もと仔大からみつ
困る時素顔の月に問うてみる
困らせるはずの話がUターン
困惑の瞳私に問いかける
軽口の友にアリバイ崩される
困難に合つて結束する絆

二股をかけて選択迫られる

かと言つて立たれて困る台所

免疫がないから困る美辞麗句

バリウムとカメラを飲んで酒も呑む

胃袋でまだ泳いでるおどり食

ほんとうの事は胃カメラ知っている

欲しいだけ食べて胃薬飲んでおく

胃に穴があくぞと妻も医者も言う

胃カメラは大安の日に飲むと決め

胃袋が昼飯だとわめいてる

喜びの知らせが消化剤になる

食べ過ぎて胃にお詫びして今朝の粥

千秀報

出幸子

常敏

三千子

純子

公正

幸子

正一

千秀

鉄治

美子

重次

可笑

敬子

千枝子

靖子

正直の徳死語となる脱税者
クロヨンに笑ひみかに泣く農家
手相見に長生きだけは保証され
この手相万に一人と喜ばせ
ひげ面の手相見なんだか当たるよう
手相からいへば富豪の妻のはず
金たまる手相の筈が店じまい
一握の砂がこぼれてゆく手相
星占い吉で手相は凶と出る

サークル檸檬

藤田

泰子報

威勢よい返事にいつもだまされて
手の上にのらない子供ほど愛し
老いてから子に従えと言うけれど
落着いて聞けば良かったあの時に
鼻めがねかけてせつせと菊手入れ
子育てを終えて第二の青春期
思うことつながる母の望遠鏡
春風に返事馬酔木の花揺れる
神様の返事のような虹が出る

岸和田川柳会

植山

武助報

寝たきりの話相手になに行く
着古しのセーター捨てないある思い
小さい俵せつつかんで生きている老後
磯の香が満ちてひとつの舟に乗る
見せかけの善意で騙す詐欺師たち
にこやかな顔に善意が貯めてある
こんなにも小さくなった母の背
人情の涙満ちて新喜劇
横丁ではんにちっちゃな運拾う

西 孟 枝 玉 定 天 耕 結 実 桂 香 智 水 庵
雅 子 登 美 子 三 四 子 今 日 子 千 代 女 美 緒 智 恵 子 泰 子 薫 風
ひ で 喜 久 子 こ う す み え み の る 希 久 志 通 彦 理 村 弥

邪な善意を法は見逃さず
テールランプ追う満ち足りぬまま別れ
軽やかなエンジン漁港に活気満つ
親として聞きのがせない小さい嘘
先生と行った思い出の東京の梅
心の傷小さくなって次の恋
寝たきりの小さい母は笑むばかり
コップ酒見知らぬ善意の人と飲む

川柳塔きやらぼく

政岡日枝子報

肩書きを外した日から日曜日
亡父亡母もようふるさとへ帰れない
ふるりの山が私を憶えてた
繕うてきりぎりまでは飛ぶつもり
無理を通してひずみ出て来た床柱
血圧が無理をするなど旗を出す
目的があるから無理を通させる
無理をして貯めた小金は使われぬ
若い日の無理なめ絵がざわざわと
無理を言いもつた苗で枯らされぬ
み仏に無理なお願ひするわたし
ボタン穴無理に通した園児服
無理をしてひっくり返るドラム缶
無理じいされてかごめめ輪をぬける
お話のときとん昔無理にきく
無理をして買った宝石光らない
結論を急ぐと茶碗もひび割れる
無理ですよいま遮断機がおりてくる
大仏も心身症かはげ一つ
無理のない暮しでここに根を張った
無理をさせてしまった段々畑のはは

武 助 初 太 郎 甘 平 白 光 子 さ よ 子 富 吉 子 丹 吉 勝 晴 智 加 恵 正 子 高 代 ふ み 恵 子 千 春 花 子 八 重 子 八 重 子 富 美 子 玲 子 子 子 夕 子 子 朗 子 子 朗 子 子 瑞 枝 子 亜 弥 子 寿 子 子 田 鶴 子 荒 介

無理を通して出口ふさいではかりいる
Xを無理に解いたらゼロになる
千代

京都塔の会 松川 杜的報

聞けば聞く程腹の立つ消費税
禁煙車上司と手持ち無沙汰だ
杜的

廃線になつて子供ら土筆摘む
赤ちやんに美人になれと鼻つまむ
葉子

ダンディであつた紫煙がうとまれる
古文書の謎握つてる虫の穴
英子

春の花摘みに小さな旅に出る
自然食プームで野草摘みになる
年栄

紙風船昔の夢が詰まつて
よもぎ摘む老女の顔が美しい
武庫坊

レンゲ摘む指から遠い日が浮かぶ
捕われた宿命火の輪もくぐらされ
諷云児

禁煙をする氣にさせた妻の愚痴
水すまし自分が画いた輪の中で
圭坊

禁煙へ体重計がピンと跳ね
地下鉄の禁煙ポケットに手が入る
正坊

茶摘み唄段々煙の笠の波
花見して帰りによもぎ摘みをする
紫香

本読んで寝るはかなし禁煙車
そわそわと嬉しいことが多い春
美智子

禁煙車老いも若きもよく食べる
花嫁の父そわそわを諫められ
求芽

花嫁の父そわそわを諫められ
美子

川柳大坂 中原比呂志報

ほんとこの敵は私の中にいる
そうかそうかと苦勞のシワが今笑つ
花代子

苦を耐える内助は樂土の夢を追つ
洛醉

挨拶が苦手で肩書などいらす
若者は苦勞売ります買いません
喜醉

無駄足を踏んだが義理は立ちました
裏方の苦勞が芸人ひき立てる
一步

雑草は苦勞見せずには咲かせ
ジョギングも兼ねて花咲かせ
希久志

苦しみか判るてマダ人間なやろなア
あのうわさやはり死角にある火種
鉄心

休めれば何でもいさ「みどりの日」
軍歌なら俺に任せと音痴節
正之

悔いばかり重ねて女のひとり旅
むつかしい話になった箸まくら
天

苦の種もあかるい笑顔で消えました
苦言をば一筆呈すのも友情
凡九郎

残り火をカルチャーセンターで燵ぶりぬ
釈放へ積む札束も汚れてる
我勝

独楽回る今日もゆらゆら揺れながら
辞書抱え存在感へひたつて
柳弘

諸人よ税はきびしきものと知れ
川柳はびきの 塩満

花冷えに肌着一枚入れて旅
美辞麗句並べる下に見る鎧
美津留

地球儀の裏に少年飢えの足
ウインドを見る樂しさの妻の足
敏報

支持率に民の怒りがこめられる
朝刊を探る視角に美女の影
比呂志

輪の中でテーマが揺らぐ蜘蛛の糸
一票の怖さ教えた消費税
比呂志

少年が夢で宇宙を飛んでいる
色即是空諦めてから白い闇
比呂志

さよならの手紙が戻る税不足
あきらめたらあきらまへんと影が追つ
トミ子

吉野山花の数程人が出る
春ですよせめて窓を開けましよう
利武

身構えるテーマだけが先走り
非行少年胸の砂漠はのぞかせず
重人

消費税二級酒三本買い溜める
迷い猫仲間のような顔で住み
与呂志

教育を高嶺の花にする値上げ
連休の優雅な一日猫とじやれ
美津留

餓鬼大将という少年が見当らぬ
多情多恨諦められぬ影法師
柳弘

少年の夢をこわした消費税
連休もお供をします一円貨
笑風

一日の悔いを流した湯の濁り
主婦の会今日のテーマは消費税
亮太

血圧が高く諦め花見酒
外の雨捨て猫の声聞えない
本蔭棒

諦めた人追いかける春の月
自分史を私の影が笑つて
しげお

白牡丹咲いてお庭に王者めく
幸せを独りじめして湯がたぎる
比呂志

マラソンの群に喝采だけ送る
後からまだまだ背伸びしています
比呂志

腹の内みんな吐かせて酒の友
ふた筋の香煙としばし対話する
比呂志

肩の荷をひとつ降ろして登る坂
式挙げたホテルで別れ話する
比呂志

雑巾になつて木綿の意地を見る
大原川柳社 小林 妻子女子報

トミ子

利武

重人

与呂志

美津留

繁男

シマ子

健三

忠宏

希代司

昇

悦子

悦子

悦子

悦子

トミ子

利武

重人

与呂志

美津留

繁男

シマ子

健三

忠宏

希代司

昇

悦子

悦子

悦子

悦子

トミ子

利武

重人

与呂志

美津留

繁男

シマ子

健三

忠宏

希代司

昇

悦子

悦子

悦子

悦子

トミ子

利武

重人

与呂志

美津留

繁男

シマ子

健三

忠宏

希代司

昇

悦子

悦子

悦子

悦子

トミ子

利武

重人

与呂志

美津留

繁男

シマ子

健三

忠宏

希代司

昇

悦子

悦子

悦子

悦子

トミ子

利武

重人

与呂志

美津留

繁男

シマ子

健三

忠宏

希代司

昇

悦子

悦子

悦子

悦子

トミ子

利武

重人

与呂志

美津留

繁男

シマ子

健三

忠宏

希代司

昇

悦子

悦子

悦子

悦子

トミ子

利武

重人

与呂志

美津留

繁男

シマ子

健三

忠宏

希代司

昇

悦子

悦子

悦子

悦子

トミ子

利武

重人

与呂志

美津留

繁男

シマ子

健三

忠宏

希代司

昇

悦子

悦子

悦子

悦子

トミ子

利武

重人

与呂志

美津留

繁男

シマ子

健三

忠宏

希代司

昇

悦子

悦子

悦子

悦子

トミ子

利武

重人

与呂志

美津留

繁男

シマ子

健三

忠宏

希代司

昇

悦子

悦子

悦子

悦子

トミ子

利武

重人

与呂志

美津留

繁男

シマ子

健三

忠宏

希代司

昇

悦子

悦子

悦子

悦子

トミ子

利武

重人

与呂志

美津留

繁男

シマ子

健三

忠宏

希代司

昇

悦子

悦子

悦子

悦子

トミ子

利武

重人

与呂志

美津留

繁男

シマ子

健三

忠宏

希代司

昇

悦子

悦子

悦子

悦子

トミ子

利武

重人

与呂志

美津留

繁男

シマ子

健三

忠宏

希代司

昇

悦子

悦子

悦子

悦子

トミ子

利武

重人

与呂志

美津留

繁男

シマ子

健三

忠宏

希代司

昇

悦子

悦子

悦子

悦子

トミ子

利武

重人

与呂志

美津留

繁男

シマ子

健三

忠宏

希代司

昇

悦子

悦子

悦子

悦子

トミ子

利武

重人

与呂志

美津留

繁男

シマ子

健三

忠宏

希代司

昇

悦子

悦子

悦子

悦子

トミ子

利武

重人

与呂志

あやとりの少女の夢は果しない
同窓会みんなの子のこと孫のこと
惜しまれて惜しんで恩師蓮華座に
連休へ人も財布も疲れ果て
五月晴れ飛んでいそがな奴
亡き人を探し羅漢の群像に
家負うてお前も父かカタツムリ
子雀が巣立ち静かな日が続く
ああ平和夫婦で雨を聞いている
胸元に溜ったうつに似たドラマ

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報

青空を見てると蒸発したくなり
村おこし村営という木のホテル
ホテルの夜ラーメン横へ連れが出来
警戒の二つの顔が出るホテル
ホテルでも浴衣がほしい日本人
ホテルの朝 花婿母へ報告し
未来図に載る苦の友待つホテル
名ばかりのホテル山峡の湯に浸る
ホテルから早く帰ると老いふたり
宗教を外から売りにくる子連れ
外面の良さソプラノの電話口
公園の外は危ないなわ電車
竹やぶの外を毎日歩いてた
ハワイなどもう外国と考えぬ
外へ出てくやし涙をふいている
オーブンの花輪を背にしチンジャララ
連開く音聞いている阿弥陀仏
野仏が教えてくれた春の道
身の立つよう亡母の教えた鯨ざし

たけよ 敏子 こふゆ 睦子 みさえ 寿恵子 ひでの 正子 あすなろ 妻 子

アドバラン日本は今盛り
道を聞くために煙草を一つ買い
年の数きつちり飲める盃の数
疎まれた身内法事の墓が呼び
母の日に嫁 好物を提げて来る
喜劇役者の髭が涙をさそい出す
無人駅の遍路ひとりの打を照らす
風五月 笥めしで待たされる
川柳塔鹿野みか月川柳会 土橋 螢報

人と言う同じく俺も欲ふかし
欲言つてみても残りはおとわずか
欲のない話で熱がはいらない
山脈を越えても欲の離れない
欲望が隣に座るから怖い
生きた欲あつて日向に出ない苦
ていねいに掘っているのは落穴
掘ってみると自分の罪は深すぎる
紫煙ゆらゆら頭の中を掘り返す
淋しさを掘ると明日も雨になる
身を守る僕も虫けら穴を掘る
生かされて生きる倅掘り続け
師の鞭を鬼とも思ふ岐路にいる
五色豆がとっても好きな京の鬼
握手して鬼の涙を見てしま
涙もらい鬼が私のふところに
人のいい鬼を一匹飼っている
非常ベル順序よく訓練終り
いつか鳴る終焉のベル聞いてみる
母さんの歩幅で歩くお父さん
一歩ずつ終着駅へ向けている

落児 英子 花村 登代子 房子 武庫坊 作二郎 紫香 螢報

チンドン屋について歩いたこともある
父よりも大きな靴で歩きだす
満開の桜が匂う平和色
絵の中のメロン匂って売れてゆく
大学に入るペンにも意地がある
いにしへの姿のままで花匂う
いい匂い残して女名刺出す
散りきわの花の匂いに別れあり
百合の香を辿れば崖の縁にくる
鶯の姿さがして昏れなすむ
生臭いにおいで握る命綱
女らしい匂い十五のあずき飯
父さんの匂いとおなじ男といる
にんにくの匂いが嫌で別に眠る
川柳たけはら 森井 蒼居報

おへんじよのまどからゆうやけがみえた
こいのほりもつとつとたかくなれ
いきたいな一ばんすきなゆうえんち
広いそのつてみたいないこのほり
さあしゅつばつきうはなのしいえんそくだ
まどもつ春の世界に変わつて
さわやかな朝一日のはじまりだ
お母さん風邪をひいたはまだ起きぬ
五年生家庭科始まるうれしいな
信じてはくれない母さんじれつたい
たのしみなしゅう学旅行早く来い
おにぎりがとてもおいしいハイキング
中学校良い友達とめぐり会い
電話口友の嬉しいう声がする
初出勤見送る祖父の瞳が優しい
高重貴子 蒼居

僕にやる夢ポケットに詰めている
 消費税一円募金でするか
 そのけそのけ今日から消費税
 金を戴く友の温かさ
 別府湯へ想いめぐらす二人旅
 はころびを互いに縫つて長寿です
 ワープロの文章だつて誤字があり
 版画彫る孫の手つきもさまになり
 お遊戯会うちの孫しか目に付かず
 老いて知る来る日来る日の有難く
 プレゼント母上様と書いてある
 燃え初めし胸火を消さぬ術が欲し
 安住の土地を二人で下見する
 うさぎ小屋なんと言つてもわがお城
 このままで良いかと思つて床につく
 まだ欲がたつぷりあつて生きている
 娘も四十はつぱ主婦の貌となる
 じやまにした一円に泣く消費税
 健康を願う老後よ講話聞く
 踏まれてもまっすぐ伸びた春の芽よ
 十年の時間を止めて友と逢う
 悟つたか感謝感謝と書く日記
 川岸のみどりは水の息遣い
 パンジーの向きそれぞれに自己主張
 それからの話はコヒヒ飲んでから
 母の日も父の日もくるたのしいな
 ご意見は有難く聴きマイベス
 お会いしてよかつた世界広がりぬ
 二級酒が少し上がった酔い心地
 自画像に白髪は描かぬことにする
 おふくろの味とくらべる紀行文

こうじ 蘭 幸 静 水 浪 子 麻 代 喜 久 夫 節 夫 千 里 千 年 枝 八 重 美 喜 美 子 俊 夫 千 恵 愛 子 榮 恵 光 子 ヤ ス エ 一 枝 伸 子 清 水 博 子 康 子 笑 子 房 子 淑 子 令 子 白 狐 一 路 観 杏

やるだけはやつた自認の休みなり
 心配いりませんなどと七歳の置き手紙
 輪廓がばーつとふくらむ春絵筆
 幸か不幸か白髪になるまで生きている
 本心をそつと見ていた裏ボタン
 春九十五あはうになつて踊らんか
 ぜいたくに馴れたベットの手にかかる

川柳塔とつとり

岩原

喬水報

急いでも受付嬢は無表情
 死に急ぐ車どこにも売つてない
 寺の鳩休み続きで豆にあき
 休日が増えて予算を狂わせる
 年中無休よくする妻よありがと
 追伸の一言針で突いてくる
 毛筆の手紙明治の気概なり
 子の手紙単身赴任力づけ
 添え書きの僅か二行が裏切れぬ
 やはり春隣の猫もさわざだし
 春風がうぶな娘の恋さそう
 内職に春闘などは出来ません
 こだわりが溶けてふたりの春の海
 まだ春へ染まる気もあり髪をすく
 就職と進学春をはすませる

倉吉川柳会

渡辺

善句報

腹八分これが本当の平和です
 ひよつとして平和の鳥が無精卵
 ふるさとに戸を開けて待つ母がいる
 約束に待っているのはいつも僕
 耳よりな話スリルも連れて来る

美佐雄 千代美 貞子 政巳 静風 シゲヨ 新造 多可志 旋風 一 枝 喬水 圭一郎 粗人 呼風 帆雀 一步 砂山花 秀和 俊路 艶子 由多香 碧水 康志 小鹿 さつき

どうしても本音が出ない初対面
 平和な島で男愛してみよう
 男でしようハッキリ本音言いなさい
 待ち合す場所は浄土と決めてある
 本音ひそひそひそと永田通り
 この平和地球も凶器隠してる
 隣国のデモもテレビで見て平和
 酒瓶を割ると最高な音がする
 待つている時が最も高な音か
 平和だなお量は何を食べようか
 勲章を羽織袴で待っている
 本音が知れぬ海鳴り聞いて寝る
 神殿へぶつぷつと本音いう
 待つことに馴れてしまった飯茶碗
 僕の馬は昔へむいて走りだす
 思い切り本音を吐いてやめてやる
 竹藪を肴にニッポン平和だな
 ラーメンに油ギラギラ平和です
 萬葉の昔から愛物語

高槻川柳サークル卯の花

河瀬芳子報

先輩の息がかかっていた異動
 人事異動飲み屋が噂聞いている
 異動地へデマが一足先に着き
 当確へ一步タルマがする期待
 期待せず今年もタイガー応援旗
 親に似ぬ子だといわれたる期待
 風船の紐を握っている期待
 ブラットに四月の期待靴がなる
 紙バック軽い期待を詰めている
 春ごとに小さくなつてゆく期待

秋人 京子 満春 かつみ 観洋 秋草 柳風 十六夜 螢 完司 石花菜 雄々 洋 秋女 とみお やえ 独歩 苦句 紫香 花代子 萬的 散歩 圭坊 スミ子 芳子 静江 正坊 年代

恋人の弱みやさしく懐に

弱みなど無いが逆うつたりしない

王様の弱みを聞いたことがない

弱みなど見せぬ夫で山が好き

スランプを抜け出す本を読みます

五年目のスランプ妻も疲れてる

スランプから脱け出し髭を剃っている

定年後上司はいないが妻が居る

お約束星の出るのも早くなり

忘れ物窓から先に声が追いつ

消費税一円玉の泣き笑い

女ひとり小さなメニューワイン色

ゲートボール若い自信が競い合う

矢印の通り進めば葬儀場

お局の香りがするよ八重桜

老人の好みに合うす木の芽あえ

鳥にも問答があるQアンドA

週二日休めと言うが銭が無い

二級酒で人生論の夜は更ける

焼酎の酔いが憎んでいる政治

川柳塔わかやま

牛尾

緑良報

泣いている姿見せたら負けになる
一心に過去を捨てたい蝶の舞い
おめでたが何より大きなプレセント
クレヨンに似顔絵贈る瞳のつばら
プレセントそのままにして母は逝き
脱ぎ捨てた喪服に覚悟ためされる
何も彼も捨てて呆けたい父でいる
墓石が重くて故郷捨てられぬ
見そこった男を捨てに行く家裁

正 志

白 漢

美 智

と お

芳 子

眉 水

和 友

花 村

上 志

節 子

栄

英 子

佐 代

栄 子

豊 子

杜 的

風 云

佳 秋

鬼 遊

雀 踊

捨て石がひよんな事から陽の目見る

結局は丸めて捨てて他人事

達人は半端を捨てて立ち向う

捨てた孤児逢えばなつかし血の絆

しがらみを捨てて弾みのつく女

無防備な姿で女爪を切る

父母の働く姿を見て育ち

姿良いりんごが先に売れてゆく

激痛のときの姿を真似される

晴れ着より野良着姿に惚れました

姿なき声がきこえる水子塚

寝姿に性善説を疑わず

後悔はしない人生隙だらけ

隙のない女に少々くだびれる

頼もしい背なにかわいい隙がある

隙見せぬ男の笑顔に嘘がある

隙のない構えを針で突いてみる

隙のない帯はきりつと胸高に

大物になれぬぞ隙が無さすぎる

隙一つ埋めるに償い遠い道

生きてゆく仮面にすこし隙がある

尼崎いくしま川柳会

春城

年代報

風病んでいるのか怒濤おさまらぬ
開病記二度目の桜が窓に咲く
筆まめが便りとぎれて病んでいる
聴診器病んでる顔へ話しかけ
物騒な車庫にかわっている歩道
花道をゆっくり歩くフィナーレ
妻の手の温みと歩く失語症
藤の花仰いで歩くまわり道

瑞 穂

好 笑

豊 太

忠 雄

恭 子

紀 美

裕 美

照 子

公 子

正 博

輝 太

結 実

稚 代

克 子

柳 宏

紀 久

桂 香

三 男

千 寿

緑 良

山頭火の歩いた道を詩を拾う

老夫婦歩く喜び噛み締める

寺町を歩けば鳩も歩いている

八起目の歩幅は神にあずけよう

難色を示す女のエゴという

難色は示せど善後策はなし

七人の敵へ朝刊読みあさり

戦争はせんでも自然淘汰はやってます

抜け道を知っているからあわてない

枝みちにそれて活気の出た会議

悪いのはみんな私とひがむ母

葉桜の下を通ると風がある

ライバルの笑顔の裏にある妬心

待ちぼうけ花壇の針がよく動く

約束を一つすませて風薫る

それなりに幸せがある団地の灯

どこの子の毬かきのうもきょうも雨

尼崎尾浜川柳会

春城武庫坊報

アメフト男の怖さ剥き出しに
怖い人逢わずに通る回り道
爽やかな声が弾けるレース窓
爽やかな余韻残して下りる幕
弁解を嘘と見透す目が怖い
いか釣りの灯が海を赤く染め
昔むかしの海鳴りを聞く浜の宿
たたずんで貝の私語聞く春の海
海の町鳥賊の浜焼きい匂い
顔立てる言葉にお世辞多すぎる
昼下り団地の窓にのるピアノ
一円五円話しあつて小銭入れ

武庫坊

萬 堯

梨 枝

歌 子

ときお

山 久

凡 九

曲 手

敬

芳 子

か ね

園 歩

正 一

美 智

み ち

年 代

弘 治

義 嗣

澄 子

す み

風 云

敏 之

佳 秋

美 智

向 西

白 漢

十四郎

六 浦

郷愁の心が赤く燃える老い
病状を問い詰められて啞になる
風よ吹け鯉は願って耐えている
故郷の祭り昔を呼び戻す
信念を持って揺るがぬ母の旗
草笛を吹くと昔の僕になる
ひっそりと咲く草花が美しい

川柳泉尾

吉川

寿美報

内気だと言いつつマイク離さない
かすみ草優しくバラの棘かくす
通夜の明け親子ですする白いかゆ
寒もどり老いのスカート空いばり
還暦にちよっと早いのが赤のベア
子育てを終えて一つの面をとる
子供から大人への切符手に入れる
素晴らしい師から私の人生観
ふくらんだ胸に女が見え始め
喝采にゆれてふくらむ胸のバラ
まだ青き胸のふくらみ愛おしむ
南から蕾ふくらむ花便り
冥想も詩人になれず陽は沈む
吹く風にフンワリと聞く春の詩
一編の詩からもらったエネルギー
さよならのビールの泡に詩が浮かぶ
桜彩に染めての日一行詩
反抗もあの日のは嘘と許します
許すことばかり仏に近くなり
許されて髪黒さがなお重い
般若面許せぬ過去をひきずって
カラオケで心の不満歌いたい

夢の助
歌子

美代子
いとお

昌子
武庫坊

紫香

師の影はとうに踏んでる反抗期
六郎の絵の温もりに詩がある

南大阪川柳会

中川

滋雀報

美代子
寿美

重人
寿美

柳伸

冬葉

章久

覺然坊

柳宏子

滋雀

頂留子

勝美

和子

しんじ

文秋

雀踊子

シマ子

恒明

庸佑

妙子

曲ん手

岩信

トミ子

智子

連体の疲れロケット容赦せず
遠方へ行きたい離流しの様に
わかあゆ川柳会
松本はるみ報
失礼の詫びが言えたら信じます
シヤネル五番女その名に憧れる
失礼も知らず上座の若い嫁
つきあひも失礼ばかり恐妻家
合格へ運が良かったネとは失礼な
答弁がすんなりいった酒の味
失礼と知つていながら口を出し
何も起らぬまま停電の灯がついた
道端の一円玉が拾われる
失礼ですまぬセクターライン越え
一羽二羽おくれた鳩の居りどころ
八尾市民川柳会
飯田
悦郎報
封書への記念切手の温か味
正直に一円不足で還される
一円の切手大手を振って見せ
切手から捜査思わぬ方に伸び
四季おりおり明日の夢がある切手
ブローチをもらって服を買うはめに
ブローチの胸のときめきさとされる
申告が済んでブローチつけ替える
ブローチを妻に贈って疑われ
古希過ぎて別のブローチ欲しいなる
ブローチを並べて迷ううれしい日
黒い太陽ばかり描くてなし子
絵具とくばかり空しく老いが来た
母を描く紅い絵具を溶いている

新造
作二郎

はるみ

蔵栄

ヒデ子

かつ子

智重子

聖子

鈴江

北斗

世似

清泉

白汀

しんじ

雅士

美津留

庸佑

憲太郎

三男

とみを

シマ子

重人

律子

春堂

頂留子

しづ子

美代子

絵心が出来たか人物描きたがり
教会で白い絵具を探してゐる

覚然坊
夕花

定年のあくる日絵具買いにゆく
一房の葡萄に欲しい色がある

元紀
勝美

漁火に詩情湧かせ一人旅
合図の灯波間に消えた嵐の夜

和子
比沙胡

満月をライトで走る恋もある
いつか女になる優しさが灯のなかに

柳伸
悦郎

全快のきざし愛の灯が炎える
家族らの暮しは言わぬ下宿の灯

晋吾
曲手

おふくろの味が待つてゐる小さい灯
追い風が来るまで答えを伏せておく

正好
紀美子

独身貴族答えは出さぬまだひとり
はいと答えて違ふ事する妻になり

美幸
欣之

少年の答えは無限地に溢れ
フラスコの答え曖昧すぎないか

泰
甘平

すばらしい答えを白い歯にもらう
手ごたえは確かにあつたいい笑い

翠洋会

中西兼治郎報

母子手帖成人式が後になり
きつちりと書いた手帖で叛けない

兼治郎
凡子

一徹が広い世間を狭くする
ちよつと待て眼鏡と手帖出してから

真
正雄

一年生子は子供なり気疲れる
老いければ頭の手帖もつすれ気味

恭昌
英一

電子手帖メカに弱いとなめてくる
妻が見てもわからぬ事が書いてある

東雲
文子

れんげ路にお遍路さんの鈴の音
古手帖まだ捨て切れず逃げ切れず

春枝
美津枝

あの人とあるいてみたいしようぶ園

故郷へバスが歩幅を近くする
世は広し善意の手術また送り

為子
さと美

星空を仰いで心広くなる
銀行の手帳五冊もためてゐる

照子
宏子

物忘れ手帖にやつと支えられ
子の目までしやがむと更に広い空

綾子
光子

生徒手帖髪長の長さも書いてある
新世紀まで生きたいと歩いてる

みつ子
登志実

もの忘れたる手帖を置き忘れ
六畳一間こんな広い探し物

鬼遊
悦郎報

南海川柳会

飯田

此の道はいつまで続く夫婦坂
添寝して昨日の続き読まされる

重人
庸佑

蕾から女優一代光つてゐる
開花待つ蕾にくい春の雨

しづ子
真砂

蕾ふくらみ可憐な少女の春帽子
月下美人蕾は夜を待つてゐる

凡子
勝美

初夏の陽へ蕾すこしずつ喋る
補修して私の答え出ないかも

月子
千万子

補修した顔はレンズに見すかされ
補修した顔はレンズに見すかされ

曲手
東雲

遠巻きに不正の場面見てしまふ
息をのむ場面が汗をにぎらせる

志華子
正好

逆流の場面へ美談割り込めず
舞台今濡れ場客席息を飲む

とみお
悦郎

高らかに会話秘密等はなし
まこころが通じ会話のない二人

甘平
悦郎

笑つてる会話も底を見せて居す
会話途絶え継ぎ目を探すのは男

柳伸
しんじ

グン吉

川柳ねやがわ

高田

博泉報

同伴の小さな客へする愛想
顔つなぎいつかは敵となる予感

藍子
時弘

体調がもどり早口とり返す
帰るかと思えば足を組み直し

春子
雅文

客布団干して娘を待つてゐる
一円玉アルミでよかつた消費税

なつめ
権太

どれ見ても十二支悪いえとは無い
広すぎる湯舟にひたる旅の宿

一鬼
とし

啓蟄へ害虫舟を振つて出る
悪童がちやんと供える彼岸餅

君
波留吉

水ぬるみすみれたんば消費税
巨悪みな安眠出来る椅子を持ち

かすみ
光子

悪い事知られてしもた気の軽さ
客ひとり午後の画廊に溶けてゐる

一
てまり

体調のベストにあつた落し穴
母子家庭いつか花輪が届くだろう

冬
三郎

悪いやつ夫婦げんかの種をまき
体調を気使いさそつて来れぬ友

頂留子
亞成

新婚の首をひとつにすなる花輪
校門で別れと出会い春となる

庸佑
英王

連休の記事読んで足る凡夫婦
落ちそうな学生ばかり絵馬を買つ

度
まさお

客に番させて本屋は用に立ち
悪いのは秘書で有権者が悪い

鬼遊
碓

老いらくの恋体調が狂いだす
一升を五日で飲んで平和です

眉水
小路

これ以上飲ませたくないお客
定年のない妻だんだん強くなる

柳宏子
紫香

すき焼きの肉で夫婦がもめてゐる

お見合いに何処が悪いといえぬけど

川柳高知

川竹 松風報

薫風

見送りの母の温みを抱いて発つ

黒粋の友を見送る寒い春

午後になりエンジンかかる低血圧

この愛も宿命だつた古希の道

節くれた指が告げつてる生活苦

来世も夫婦でオイと呼ぶつもり

別居中目障りになる夫婦離

子の事になると波長の合う夫婦

子に遺す絵を懸命に描く夫婦

自由化の波宿命の農をつぐ

定年のそれから夫婦らしくなり

子育てを終え心配な夫婦仲

子育てを終え心配な夫婦仲

川柳塔まつえ

恒松

町紅報

手作りの人形鼻を低くする

手作りを食べてかかった五月病

糸口をたぐりながらに掘る古墳

大臣の椅子善人は座れない

デマ好きな女に長い舌がある

デマだけが一人歩きを止はじめる

デマに乗る軽い女は妻にせぬ

真実をデマの教訓から拾う

いつの日か使つつもり杖削る

大臣も母への甘えにうたを残し

遊ばせて置くと両手が駄目になる

夜遊びの下駄にお灸をすえて置く

幸運の糸口一円玉拾つ

幸運の糸口一円玉拾つ

幸運の糸口一円玉拾つ

幸運の糸口一円玉拾つ

幸運の糸口一円玉拾つ

幸運の糸口一円玉拾つ

幸運の糸口一円玉拾つ

幸運の糸口一円玉拾つ

幸運の糸口一円玉拾つ

幸運の糸口一円玉拾つ

薫風

竹 幸 泉

千恵子

一 郎

節 子

功 子

菊 野

佳 風

朱 坊

松 風

和 広

和 広

和 広

和 広

和 広

和 広

和 広

和 広

和 広

和 広

和 広

和 広

和 広

和 広

和 広

和 広

和 広

和 広

和 広

和 広

和 広

和 広

和 広

和 広

和 広

和 広

和 広

和 広

和 広

和 広

十字架に糸口ひとつあるように

手作りがころし文句となって売れ

遊びなど知らぬ軍手のひとり言

階段を上らぬ遊びなら許す

竹とんぼ親子の絆乗せて飛び

デマに勝つ漢方薬を飲んでいる

故郷の風はデマなど信じない

童顔の首相漫画になりやすい

山頂に遊べば僕も天下びと

デマが飛び貯金おろしたお人好し

遊ぶ日の車きれいに磨かれる

糸口を隣の猫に盗まれた

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

糸口がするする解けて夕映える

駒つなぎ川柳会

里

小路報

無駄口が和ませているバスター

成長の為の無駄なら許される

護符受けて成長祈る宮詣り

片腕で受ける賜杯に湧く拍手

陽の恵み受けぬ雑草のたくましい

沈黙は胸に一物秘めて持つ

耳痛い説得力が胸を突く

突然来たように集金あしらわれ

突然に來て一升を飲んで去ぬ

急用の足引っぱっている義理の顔

田舎から母急用の顔で来る

無駄に思える釘を母が打ちにくる

今に思えば無駄のない左遷

コヒーがこんなうまい受賞の日

直感で胸に一物ある態度

突然の客にケンカを中止する

突然の客にケンカを中止する

突然の客にケンカを中止する

突然の客にケンカを中止する

突然の客にケンカを中止する

突然の客にケンカを中止する

突然の客にケンカを中止する

突然の客にケンカを中止する

突然の客にケンカを中止する

突然の客にケンカを中止する

小 鹿

芳 枝

洋 々

きみ子

つ ね

大 漁

寿美子

多賀子

代仕男

巡 歩

静 恵

とみお

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

町 紅

突然の知らせ計報と限らない

急用の男が糸を垂れている

うたた寝の中で急用思い出す

信念を変えよう無駄が多かった

椅子に深く掛けている無駄がない

貧乏くじの秘書受け皿は出来てます

受けてたつ男に覚悟出来ている

この先は胸に仕舞っておく情け

胸中を察して言えぬ借用証

突然にもうなれしました洗う

突然へ向けて地球は唯回る

急用の妻は実家へ行ったきり

ポケットベル俺の心も知らないで

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

傷心を受けとめたのは母の愛

度

千代三

射月芳

恒 明

白 兔

萬 的

笛 生

柳 宏子

冬 葉

美津枝

凡九郎

章

勝 美

金 太

金 太

金 太

金 太

金 太

金 太

金 太

金 太

金 太

金 太

金 太

金 太

金 太

金 太

金 太

金 太

金 太

金 太

金 太

金 太

金 太

金 太

金 太

金 太

金 太

金 太

金 太

金 太

金 太

金 太

金 太

森子報

花 子

静 枝

昭 水

昭 水

昭 水

昭 水

昭 水

昭 水

昭 水

昭 水

昭 水

昭 水

昭 水

昭 水

昭 水

昭 水

昭 水

昭 水

昭 水

昭 水

昭 水

昭 水

昭 水

昭 水

7 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 お よ び 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	2日(日)午後1時から レモン・礼・冷凍・歴史	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
尼 崎 いくしま	7日(金)午後1時から 溜息・思案・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田淵定人 句会費 300円 投句料 62円切手3枚
川 柳 塔 まつえ	8日(土)午後1時半から 休日・歩く・話	松江市和多見町 慈雲寺番神堂 〒690 松江市雄賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(62円切手可)
西宮北口 川 柳 会	10日(月)午後1時から 泥・素足・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 62円切手4枚
八尾市民 川 柳 会	11日(火)午後6時から 記念・集る・やさしい・感謝	八尾市立労働会館(山本)近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2-141 飯田悦郎
川 柳 塔 わかやま	16日(日)午後1時から 育てる・添う・損・染める	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 62円切手3枚
もくせい 川 柳 会	17日(月)午後1時から 声・一流・見る・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
南 大 阪 川 柳 会	19日(水)午後6時から 愛着・辛い・差・正しい	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
高槻川柳 サークル 卯 の 花	20日(木)午後1時から 欠点・迷う・スクラム・自由吟	高槻市民会館305号室 阪急高槻徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児 句会費 500円 投句料 200円(郵券可) 各題2句
富 柳 会	20日(木)午後1時から 鼻・母・橋	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353 池 森子
南 海 川 柳 会	21日(金)午後6時から 越える・要領・音楽・機会	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川 柳 東 大 阪	22日(土)午後6時から 流れ・想う・面・浪人	東大阪市社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5-6-23 桑原喜風 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
駒つなぎ 川 柳 会	24日(月)午後6時から 頼る・痛い・貯める・出る	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11 津守柳伸
※川柳ねやがわは16日(日)高鷺亜純追悼句会のため64頁参照。 ※堺川柳会は30日(日)第7年度夜市川柳大会(82頁参照)のため8月句会は休みます。		

★特に記載がない場合 句会費 500円、投句料 310円(郵券可)、各題3句以内
 原稿送り先(締切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)
 〒597 貝塚市地藏堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

路郎忌 本社7月句会

日時 七月四日(火) 午後六時
会場 メンズファッションセンター三階
中央区内本町1-1 電話06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角

おはなし
兼題 「浜」
「メロン」
「天才」
「似る」
席題 二題 当日発表
会費 五百円

橘 高 薫 風
春 城 年 代 選
田 中 正 坊 選
亀 山 恭 太 選
西 尾 葉 選

各題三句以内厳守

★投句は柳箋(4cm×19cm)に1葉1句。
各葉ごとに裏面に必ず氏名明記。
投句料 310円(62円切手5枚)同封のこと。

本社8月句会 8月7日(月)

兼題 「報いる」「たしか」
「詩」「立派」
川 柳 塔 社

『夜市川柳』募集(3句)

題 選者 締切
第2回 「米」 西田柳宏子 7月末
第3回 「遊」 門脇かずお 8月末
第4回 「友」 西川けんじ 9月末
第5回 「歩」 但見石花菜 10月末

投句先 〒593 堺市堀上緑町2-9-2
河内天笑方
堺川柳会

●募 集●

九月号発表(7月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 葉 選
水煙抄(10句)黒川 紫 香 選
愛染帖(3句)橘 高 薫 風 選
茴香の花(3句・女性)小出智子 選
吟 「牛」 宮口笛生 選
題 「謝る」 松本今日子 選
課 「ブラシ」 神平狂虎 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

十月号発表(8月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 葉 選
水煙抄(10句)黒川 紫 香 選
愛染帖(3句)橘 高 薫 風 選
茴香の花(3句・女性)小出智子 選
吟 「窓」 松川杜的 選
題 「結ぶ」 稲葉冬葉 選
課 「時計」 田口虹汀 選

★愛染帖・茴香の花・課題吟は同人・誌友に限らず、どなたでも投句できます。

定価 六百元(送料51円)

半年分三千八百円(送料共)
一年分七千五百円(送料共)
一九八九年六月二十五日印刷
一九八九年七月一日発行

編集兼 発行人 西 尾 巖
印刷所 藤原 童心 社
大阪市阿倍野区三木町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川 柳 塔 社
電話(06)六元一六九一四番
振替口座大阪8-13336八番

Ⅱ 編集後記 Ⅱ

☆七月号をお届けする。七月は路郎先生の誕生日、死亡の月なので、生前は「川

難川柳まつり」などを催してお祝い、没後は路郎忌として追慕しているのでは、他の月より感慨が深い。

☆今年には栗主幹の叙勲記念大会を開催するので更に気分が高揚する。在阪の同人挙って誠心誠意お迎えします。のでお一人でも多くのご参加をお願いします。

☆今年の九月は、初代川柳の二百年忌、弓削駅前路郎句碑建立二十年記念。来年の九月は、川柳塔になって三百号の誌齢を重ね、二十五年を経るわけだ。

☆直原玉青画伯には、昭和四十年十月号から今月まで二百八十六点の表紙を画いて頂いたことになる。今月の絵はユングフラウだ。私にはあこがれの山である。

☆昭和三年、父は獨逸へ二度目の留学をしたが、その時ユングフラウ・ヨッホで「ピラタス」は男さびすも湖

と雲を距てて若き妻見る」と詠んだ。私がユングフラウに向えばどのように詩うだろうか。

☆路郎先生は、川柳における私の生みの親であり、栗主幹は育ての親だと思つて。厳しくまたのびのびと育てて頂いた。ありがた

い先祖様である。

☆句集の出版が相次いだ。新家完司著「平成元年」と千原理恵著「風ぐるま」と小出智子著「露の墓」である。完司さんが、あとがきで「川柳に限らず短詩文芸は口誦されてこそ、その存在価値があると思う」と書いておられるのは至当の言

で、後進はご先祖を超えねばならない。

☆本号最初の校正刷りの出た十二日、阪急百貨店で、小島直記著「志に生きた先師たち」を買って帰宅したら、テレビで藤沢恒夫先生の死去が報じられた。早速お別れに駆けつけ、言葉では言い尽くせぬご恩に深謝申し上げたが、人生にはつらく悲しい事が出来る。

☆さて、厳しい夏が来ます。暑中見舞いまだ間に合いますからよろしく。(薫)

▼栗 良平の実話童話「一杯のかけそば」が、いま爆発的な人気を呼んでいる。かけそばの一杯を母子三人で食べると大晦日の夜の物語で、飢えと貧しさを体験した人々には共感の涙をさそ

う。豊饒な現代だから話題になったことで、昭和二十年代であれば、一般生活の現実そのもので何らニュースにもならない。

▼行きつけの本屋へ買いに行った。「予約をしてももらわないと売れない」ということで勿論、現品は一冊もない。品物が本だから読ん

でからというわけにはゆかないが、どんな体裁かくらないは知りたいものである。筋書を知って買ってくる人

もあれば、家族に頼まれて「一杯のかけそば」のためなぜ本屋に来なければならぬのか不審顔の奥さん多いのだ。こんな注文が多いうのだったら近所のそば屋から熱いをとってあげた

ら」と、つい冗談が出た。

▼ラジオとテレビで朗読されたのが評判になって、一篇の童話がたちまち、吉本ばななを追いついて、ベストテンの第一位になったのは予想外であり、出版界の異変である。政治不信に

いさか狂いそうなのをなかに「一杯のかけそば」は、新緑の木々を抜けて吹く風のように、ひととき爽やかな気分にしてくれた。テレビの嫌いなわたしは、

テレビで知ったのは皮肉なことである。「一杯のかけそばに酔うその一人」(き)

★「旅まぐら雨にあれば雨の詩 栗」旅の楽しさは天候に左右される。五月下旬に出かけた筑紫路の旅は、しっかりと雨にたたら

れた。ハイライトの柳川下りも、ビニールの合羽を頭からかぶって舟にのりこむ始末だった。その時、ふと栗主幹の句を思い出した。ものは考えようで、その気になれば五月雨にぬれてそ

う我ら年金生活者」(正)

はことのほか冴えていた。

★実はこの旅、戦争中に卒業した学校のクラス会、名づけて「老朋友の会」の年次総会で、今年で八回目になる。一番の天気者だった男が急死したのが契機で、有志が数年一回ひらいて定例会を全員によびかけて

すでに四人の物故者を送っている。あの戦火をくぐりぬけて生きのこった者同士だけに、おたがいの無事と健康を喜び合いながら亡き友を偲ぶ一夜であった。

★ところで今、各地で年金者組合が生まれつつある。お上からのあてがいぶちの福祉に頼るのではなく、要求すべきことはどしどし要求していきという組織で

やがて全国単一の労働組合が結成されることとなっている。とかく弱者にしろよせがくる政治の下では、自らの権利は、自ら守らねばならない。今日の日本の繁栄をきずいた者は、私たちに

KIRIN

21世紀へ乾杯

本格派。

旨さの辛口。

アルコール度数高め
キリッとしまるドライ

キリンビール株式会社

キリンドライ

標準的小売価格は普通のビールと同じです。未成年者の飲酒は法律で禁じられています。



5つの個性・5つの色味!!

アイスクャンデー

ミルク・アズキ・パイン・チョコ・宇治金時



なんば戎橋筋本店
なんば高島屋百貨店
泉北高島屋百貨店
京都高島屋百貨店
阪神百貨店
松坂屋百貨店
そごう百貨店
京阪モール店

サンストア中之島店
サンストア淀屋橋店
アベノ近鉄百貨店
上本町近鉄百貨店
東大阪近鉄百貨店
奈良近鉄百貨店
京都近鉄百貨店

なんば新川店
虹のまち店
ドーチカ店
南海難波駅店
国鉄大阪駅店
梅田大丸百貨店
堺東店



大 阪 ・ なん ば



TEL 641-0551